
超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

【Nコード】

N6621W

【作者名】

らい

【あらすじ】

どこにでも居るような一人の青年、沖中宏樹。そんな彼に降りかかるコレでもかと言うくらいいのテンプレな不幸。でもやっぱりテンプレだけあって転生することができることとなった。彼が転生先に選んだのは「超次元ゲームネプテューヌmk2」。さて、彼はこの世界でどのように生きていくのか。

現在は原作2章にてキラーマシンと戦闘中。

ブローグと言つ名の転生時能力のお品書き（前書き）

とりあえず、書き始めてみました。

ブログと言う名の転生時能力のお品書き

「さて、ここは一体どこなんだろう」

そう言つて、俺は辺りを見渡してみる。

見渡しては見たが、何も無い白い空間が広がっているだけだった。何か思いつきそうなんだが、心がそれを拒否している。

まあ、いい。ちょっと思い出してみるか。

俺こと沖中宏樹は、久しぶりに取った有給休暇を利用し、秋葉原に来ていた。

ぶっちゃけ、今日から数日間休みをもらったので、そのときにやるゲームを探しに来たのだ。

まだまだ未消化のゲームもあるが、それはそれ。それに、ウォレット残額も少なくなってきたし、買っておこうかと。

で、JR改札から出てソフマップに向かおうとして、小さい女の子が道路に飛び出すのを見て。

……そこで記憶が終わっている。

「……あ、そういうことか」

俺は、結論にぶち当たった。

何のことはない。女の子を助けようとして……自分が身代わりになった、ということだった。

『そういうことじゃよ』

どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。

その声はさらに続ける。

『しかも、その少女は元々助かる予定だったのだから』

「……え」

声の主によると、少女は元々奇跡的に助かる「予定」だったらしい。だが、俺が介入したことにより、「确实」に助かった。

その代わり、何も被害を受けるはずのなかった俺が、「死亡」ということになってしまったとのこと。

そのため、被害者「0」のはずの事故が被害者「1」となってしまったらしい。

そうなってしまったため、原因追求をしたところ、ある記述を発見した。

それは、俺の名前の今日以降の予定がすべて黒く塗りつぶされている書類だったらしい。

しかも、それを行ったのはこの声の主の孫だったそう。

『本当に申し訳ない。なんと行って詫びればよいか……』

声の主の声のトーンは少し下がり、色々と言葉を選んで話しているようだった。

「まあ、いいじゃないですか。あの子は助かったんでしょ？」

『うむ、まあそれはそうなんじゃが』

「で、俺は元の世界には生き返れない、と」

『そういうことじゃ。話が早くて助かる』

「ってことは、転生は可能？」

『ああ、もちろん。ついでに迷惑を掛けた詫びに、能力の付加もできるが』

転生キタ

(。 。)

!!!!!!

「で、どんな世界でも可能？アニメも？ゲームも？」

『その辺はまかせろ。抜かりはない』

じゃあ、「ぼくのかんがえたさいきょうのそらび」でも実行させてもらいましょうか。

「じゃあ、世界は『超次元ゲームネプテューヌmk2』の世界で」

『ちよつとまで、あのトンデモ世界か？』

「ええ、あのトンチキ（褒め言葉）な世界です」

『で、能力は？』

「えとですね、武装神姫の武装が欲しいです。で、……………ってことをやりたいんですが、可能です？」

『それくらいはお安い御用じゃ』

「じゃ、それに追加で。全能力は女神たちの擬人化状態と同等、かつ……………した場合は女神化した時と同じくらいの力量で」

『まあ、それもどうにかなるな』

「んじゃあとは、今言ったのがレベル1の状態で、レベルがカンストしたら女神より強くなるとかは可能？」

『……………もちろん可能じゃが、凶悪じゃな』

「いや、じゃないと面白くありませんからね」

『他には何かないか？』

「んじゃ、原作開始の4年前からスタートで」

『ん、そんなことか？そんなことは簡単だが、どうするんじゃ？』

「もちろん、4女神と顔見知りになっておく。それだけだよ」

『わかった。名前はどうする？』

「今のままでもいいけど……………『ケイス』で」

『『ケイス』じゃな。』

「あ、あと『イストワール』には怪しまれないようにして欲しい」

『それは基本じゃの。おぬしのことは書かれていることにしておこう。あとはないか？』

「女神や、女神候補生と友好的な関係を築きたいな」

『あいわかった（魅力MAXな）』

『さて、と。これで設定は終わった。あとはおぬしが世界に行くだけじゃ』

「ありがとな、神様」

『おや、わしは一度も「神」とは言っていないつもりじゃったが』

「いや、こんなことできるのは神様だけだろ？」

『では、おぬしの次の人生に幸のあらんことを』
「サンキュー、神様」

そう言つて、彼の姿が薄くなり始めた。
転生が開始されたのだ。

さて、ここから彼の姿が完全に消えてからが彼の第二の人生の開始となる。

わしは、それをゆつくりと眺めさせてもらおうかの。

ブログと言う名の転生時能力のお品書き（後書き）

さて、始まってしまいました。

すでに、自分の中のプロットと違うんですが……（汗
最低でも週1更新くらいにはしたいと思います。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ということで、主人公の設定です。

オリジナルキャラ設定

キャラクター名

ケイス

武装

近接攻撃

M4ライトセイバー

近接戦闘時にはこの武装をよく使用する。

いわゆるライトセイバー。

双剣モードでよく使われる。

M8ライトセイバー

M4ライトセイバーの強化版

だが、出力が上がったためかエネルギー切れが早い。

そのため、あまり使われない。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバー2振りを柄の部分で連結した武装。

M4ライトセイバーで攻撃時にこの形にすることが多い。

遠隔武装

アルヴォPDW11

いわゆるオート小銃。

あまり威力は高くないが、命中率が高いため愛用。

LC5レーザーライフル

いわゆるレーザー砲。

エネルギーチャージに時間がかかってしまったため、使用頻度

は少ない。
が、出力は現段階ではピカイチ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

ということで、オリ主君の武装紹介でした。

まあ、見る人が見れば分かるとおり、あんばるmk2の武装です。ちよつとまだ隠し玉がありますが、それはまたいずれ。

ということで、次回予告。

超次元ゲーム Neptune の世界に降り立ったケイス。

さて、彼はどこに降り立ったんでしょうかね。

（指定してなかったしね）

次回、第1話「やっぱりはじめは紫でしょ」をお楽しみに。

…って、楽しみにしてくる人があるんだろうか…

第1話 はじまりはスライヌとともに（前書き）

サブタイトルが前回の次回予告と違う？
仕様です。

さてさて、ケイスはどこの大陸に行くことになったのやら。

第1話 はじまりはスライヌとともに

さて、ここはどこだろう。

そういえば、転生先の指定をしてなかったな。

そう言つて、ケイスは辺りを見渡す。

近くには木々が生い茂り、草の匂いまでする。

（ここは、プラネテューヌかリーンボックスか）

俺はそう推理する。

ラストイションであればこのような場所はないだろうし、ルウィーであれば雪に覆われているため、除外。

後もうひとつ、決定付けるものがあればな。

そう思いながら、辺りの草に体を預け寝転がった。

空は青く広がり、平和そのものだ。

（そういえば、まだ原作の4年前だしな。まだ女神が健在だから平和なんだろう）

そう思い寝ようとしたが、そうは問屋が卸してくれないようだった。

「スラー！」

スライヌだった。

まごうことなきスライヌだった。

「なんだ、スライヌかよ。どうせならダイコンダーとか馬鳥くらい連れて来いよ」

そう言われ腹が立ったのか、スライヌはケイスに攻撃を開始した。

……まあ、ちくちくアタック程度だった。
ああ、めんどくせえ。

放っておくか。そのうち飽きてどっか行くだろ。
そう思いながら、もう一度寝ようとしていた。

side ????

ああ、もうお姉ちゃんどこ行っちゃったんだろ。

いーすんさんは「別にいいですよ、いつものことですから」って言うてたけど、やっぱり見つけてお仕事をしてもらわないとね。
そう思い、お姉ちゃんがいつも暇をつぶしている森に来てみた。

「お姉ちゃん、どこにいたのー？」

返事がない。

ここじゃなかったのかな？

そう思ったときだった。

「スラッ、スラッ、スラーッ」

あれはスライヌの鳴き声。

しかも、何か攻撃しているっぽい！

私は鳴き声のする方へ駆け出した。

そして、そこで見たのは、倒れている人に攻撃しているスライヌだった。

「こらーっ、やめなさい」

そう言っ私はスライヌの方に駆け出した。

そんな私に気づいたのか、スライヌは一目散に逃げていった。

side ?????? END

「大丈夫、ですか？」

スライヌのちくちくアタックが止みどこかへ逃げて行ったあと、そんな声が聞こえてきた。

……この「ほっちゃん」ボイスは……ネプギアか。そんなことを考えていると、

「あの、どこか怪我されているんですか？」

そう言って心配そうに顔を近づけてきた。

近い、近いっ。

「いや、ごめんごめん。寝てた」

ズルツとコケる音がする。

「さすがに煩いなあと思ってたんだが、追っ払ってくれたんだ。ありがと」

にこつと笑いながら、そういう風にお礼を述べる。

「い、いえ。でも本当に大丈夫なんですか？」

やっぱり心配そうに聞いてくる。うーん、やっぱり優等生だなあ。

「大丈夫大丈夫。ほら、ね」

そう言っあいつらてスライヌが攻撃していた部分を見せる。

ちよつとほつれはしているが影響はない。

「さて、と」

そう言ってて立ち上がり、ネプギアのほうを見る。

「冒険家、ケイスといいます。今回はありがとうございました」

そう言ってて、右手を差し出す。

その手を取ってて、彼女はこう言った。

「私はネプギアといいます。お力になれて何よりです」

どちらからともなく、笑いあつた。

「そついえばケイスさん、どうしてあんなところに？」

森の中を歩きながらネプギアが聞いてくる。

「いや、お恥ずかしながら路銀が尽きてね。何か稼ごうと思ったんだけど協会もギルドも分からなくて、あそこでフテ寝してた」
大嘘である。

「あ、そうなんですか。ギルドはちょっと分かりませんが、協会にならご案内できますよ？」

ちつとも疑おうとしない。ええ娘や。

「ほんと？助かるよ」

そう言つて、両手を握つて感謝の意を表した。

心なしかネプギアの頬が染まっていたが、気のせいだろう。

「それじゃ、協会にご案内します。ついてきていただけます？」

そう言つて、ネプギアは森の出口に向かって歩き始めた。

俺はその後をついていくことにした。

俺の冒険はここから始まる。

さて、これからどうなるのか……。

……SAVE

第1話 はじまりはスライヌとともに（後書き）

ネプギアに協会まで連れてきてもらったケイス。

ここで衝撃の事実が…？

次回、「協会にて（仮）」

「スライヌにいじめられてた人を保護してきましたー」
「ちよつと待てい」

第2話 協会へGO（前書き）

ネプギアに救われた（？）ケース。
彼は、仕事を求めて協会に向かっていた。

第2話 協会へGO

side ネプギア

ケイスさん、ちゃんとついてきてるかな？

そう思い、私は後ろを振り向く。

ちよつと離れてはいるけど、ちゃんとついてきてるみたいだ。

でも、何かちよつと寂しい。

私はそこで立ち止まって後ろを振り返り、ケイスさんが追いつくの待った。

side ネプギア END

ネプギアちゃんが立ち止まって、こっちを見ていた。

どうしたんだろう。

「どうした？何か忘れ物でもあった？」

俺はそう問いかけたが、返ってきたのは思ってもみない言葉だった。

「何か、話しながら行きませんか？」

side ネプギア

あ、唐突過ぎたかな。

何か、ケイスさんが困ってる様に見えた。

ありえない言葉を聞いたかのような顔をしてる。

そんなに变かな、お話したいっていうのは。

それとも、私なんかとお話したくないってことなのかな……。

side ネプギア END

うわ。ネプギアちゃんが何か泣きそうになってる（汗）

さすがに、そんな表情を見せられて「ヤダ」と答えられるほど俺も鬼じゃない。

「いいよ。どんな話をしようか」

そう答えると、ネプギアの表情がぱあっと笑顔になった。

うん、やっぱり女の子は笑顔のほうがいいや。

「ケイスさんって冒険者って言うてましたよね。でも、そんな軽装で冒険しているんですか？」

ああ、ごもつとも。

武器のひとつも持ってないからな。

「まあ、ね。それに武器とかは、よつと」

と言って、武器を召還するようにイメージする。

すると、両手に質量が発生する。

「この通り、いつでも出せるからね」

そう言いながら召還した武器を霧散させる。

そしてネプギアちゃんのほうを見ると、目をキラキラさせていた。

「すごいですっ。武器を召還できる人、はじめて会いました」

そのあとも、どういう風にやっているのかとか、他にどんな武器があるのかとか、色々と聞かれた。

まあ、悪い気はしないし、知っておいてもらったほうが動きやすいつてのもあったから、全部見せたけどね。今のところ呼べる武装は「へえ。亜空間から呼び出すイメージ、ですか」

難しそうですね、と苦笑いしながら尋ねてくる。

こつちも実際どんな風になっているかわからないから、有耶無耶にしがたが。

突っ込まれると回答に困るしな。

そんなこんなで、協会についた。
へえ、ゲームでは外観は表示されてなかったけど、こんな感じだったんだ。

普通の教会と同じような感じで、違うところといえば、十字架がないくらいか。

「いーすんさん、ただいまー」

ネプギアちゃんはそう言いながら入っていった。

おいおい、俺に女神候補生ってこと言っていないのにいいのかよ。

「あ、ネプギアさん、お帰りなさい。あら？そちらの方はどちら様ですか？」

そう言いながら声の主は俺のほうを見る。

あ。いーすんさんだ。ちっこいのう。

「えつとね、お姉ちゃんを探してたときに、スライヌにいじめられてたから助けたんですよー」

いや、ネプギアちゃん。確かに事実かもしれないけど、それはあんまりじゃ……。

「プラネテューヌの教祖、イストワール様ですね。私は旅の冒険家、ケイスと申します。お見知りおきを」

一応、はじめだからね。このくらいやっておかないと。

「自己紹介、ありがとうございます。私のことはご存知のようですが、一応。教祖を務めております、イストワールと申します。さて、本日は協会に何の御用でしょうか？」

いきなり眼光が鋭くなる。まあ、女神候補生にくつついて来る人間なんてそうそういないし、怪しすぎるわな。

「すいません、路銀が尽きてしまいなにか職があれば、と思いましたが。そのときに、そちらのネプギアさんと知り合ったんですよ」

そう言うと、いーすんさんはネプギアちゃんのほうを向き、事実を確認しているようだった。

まあ、金がないのは事実だし、何かの討伐とかないかなくとか思っていたし。

「本当に心苦しいのですが、紹介できるものがないのですよ
ま、そうだろうねえ。」

「ギルドを紹介しますが、行ってみますか？」
おお、それでもいいや。

そう思っていると、ネプギアちゃんがいーすんさんに何か話していた。

side ネプギア

「いーすんさん、私も一緒にギルドに行ってみてもいいですか？」
ケイスさんがどんな戦い方をするのが気になっていた私は、いー
すんさんにそう聞いてみた。

「ダメです。ネプギアさん、貴方は女神候補生なんですよ？何かが
あつてからでは遅いんです」

いーすんさんはそう言つて、了承してくれなかった。うー、ケチ。
「じゃあ、私が女神候補生だつてことを打ち明けて、そのボディ
ガードとしてついてきてもらうつて言うのはどうでしょう？」

私もそんなに簡単には退かない。だつて、お姉ちゃんやアイエフさ
ん、コンパさん以外の戦い方つて見たことがないから。

「それじゃ、彼にアイエフさんと模擬戦をやってもらいましょう。
それで、彼が勝てたらその通りにしてもいい、ということにでもし
ましょうか」

やたつ。これで、ケイスさんと一緒に行動できる、かも。

side ネプギア END

side イストワール

ネプギアさんにも困ったものです。

彼女が信じているようですから、いい人なのでしょうが。

それでも、多分アイエフさんには勝てないでしょうから、この案件は杞憂ですね。

さて、それじゃアイエフさん呼びましょうか。

side イストワール END

「できれば早くギルドに紹介して欲しいんだけど」

俺はそうネプギアちゃんといーすんさんに話しかける。

「ちよつとだけ待ってください。ちよつとテストのようなことをしてもらおうと思ひまして」

そついつて、いーすんさんは連絡を取り始めた。

で、ネプギアちゃんは、というと。

「すいません、ケイスさん。私がケイスさんと一緒にギルドに行つてみたい、つて言つたらこんなことになつちやつて」

まあ、そうだろうなあ。原作でもギョウカイ墓場から帰つてきたときに初めてギルドに行く、つて描写になつてたし。

ん？もしかして、ちよつとした原作ブレイクか？これは。

「で、何でそんなことになつてるの？」

まあ、多分女神候補生だからつてことだけなんだろうけど。

「あ、はい。それは、私がプラネテューヌ（ここ）の女神候補生だから、みたいです」

あー、やつぱり。

「で、ボディーガード的な位置なのね、俺が」
「はいっ」

ふう、まあいつか。

さて、それじゃ対戦相手を待ちましようかね。

……SAVE

第2話 協会へGO（後書き）

腕試しをすることになったケイス。

その相手はアイエフ。

双剣使い同士、どんな戦いになるのやら。

次回、第3話 「原作キャラとの戦い（仮）」

「へえ、結構強そうじゃない」

「お手柔らかにお願いしますね、アイエフさん」

第3話 少女と双剣と新たな力（前書き）

ひょんなことからアイエフと模擬戦を行うことになったケイス。
彼は勝つことができるのか。

第3話 少女と双剣と新たな力

ここは、プラネテューヌの協会の中庭。

俺の前には、戦闘準備万端といった感じでアイエフが軽く体を動かしていた。

というか実は、別にこの人と戦わなくてもいいんじゃない？

side アイエフ

なーんだ。

冒険者、って言うってたからもっとゴツイのを想像してたけど、案外ひ弱そうなのね。

これなら、簡単に勝てそうだわ。

でも、何でネプギアはこんなのが気になってるのかしら。

side アイエフ END

「それでは、はじめてください」

そう、いーすんさんの声が響いた。

その次の瞬間、アイエフは先手必勝とばかりに突っ込んできた。

こっちは、武器も用意してないってのに。

「銃よ」

そう言っと、俺の右手にアルヴオPDW11が現れる。

それをアイエフに向け、トリガーを引く。

ドガガガッ。

アイエフは咄嗟にその銃撃を横に跳んで避け、そこからまたこちら

に迫る。

「危ないじゃない!」

「速攻で突っ込んできたアイエフ（あなた）に言われたくない」

そう言いつつ、アルヴォPDW11を右手から消す。

そして、両手にM4ライトセイバーを出す。

これで迎え撃つ!

side アイエフ

さっき、何ももってなかったわよね、彼。

で、いきなり銃を乱射するなんて。

どこから出したのよ、なんて思ってたら剣!?

何の手品よ、全く。

side アイエフ END

「面白い手品ね」

「手品かどうか、すぐに分かるさ」

双剣 vs 双剣

その戦いの火蓋は切って落とされた。

アイエフの右手が上から切りかかる。

ケイスはそれを左手の剣で受ける。

その瞬間、アイエフは左手を横から風ぐ。

ケイスはそれに反応し、右手の剣で受け流す。

「なかなか、やるじゃない」

「そちらこそ」

その後も何回も剣戟の応酬が続いたが、双方ともに決定打を与えず数分が過ぎた。

そのとき、二人の戦いに動きがあった。

アイエフが、ケイスから少しだけ間を取ったのだ。

「一気にカタをつけてあげる」

アイエフはそう言っていると、俺のほうに突っ込んできた。

（うわっ、マズっ）

そう思うが、体が思うように動いてくれない。

なんとか両腕を前に持って行き、防御体制を整える。

「フフっ、どこまで耐えられるかしら。『ソウルズコンビネーション！』」

縦横無尽に双剣が振られる。かつ、蹴りも同じように放たれる。

キンッ、キンッ、ドギヤギヤギャッ！

数発もらってしまったが、どうにか凌いだ。

「ハア、ハアッ」

自然と息も荒くなってしまう。

「随分、やるじゃない」

アイエフは不敵な笑顔を浮かべながらそう言った。

確かに、防げたのはかなり運がよかったからだ。

「お褒めに預かり、恐悦至極」

そう言いながら、ライトセイバーを構える。

「じゃ、コレで終わりにしてあげる」

そう言って、アイエフが再び突っ込んできた。

マズい。

そう思ったときだった。

キイイイーン。

そんな音を立てて、辺りの時間が止まっていた。

だが、その中で動く影が2つある。

ひとつはケイス自身。

もうひとつは、奇妙な足音を立てながら、ケイスのほうへ近づいてきた。

まるで、ロボットが歩いているかのように。

『オヌシが、あの神とやらが言っていた少年でゴザルか?』

俺の目の前まで歩いてきた影がそうつぶやく。

なんか、この言葉遣い、聞いたことがあるんだが。

『どうしたのでゴザル?さては、拙者がカッコよくて見惚れていたでゴザルか?』

間違いない。

「いや、なんでもないさ。爆炎斬鬼丸」

『おお、拙者の名前を知っているとは。拙者も有名になったでゴザルなあ。』

いやいや、そうじゃないってば。

「で、どういうことなんだ?」

ちよっと(どころではないが)不思議に思ったため、聞いてみた。

『拙者の力、受け取って欲しいでゴザル』

???あ。もしかして。

「神様から、そう頼まれたってことか?」

『ウム』

「装備とか技とか?」

『ウム』

「でも、俺機械じゃないから使えないかもしれないけど、大丈夫なのか?」

『そこは、「おやくそく」とやらで大丈夫だと申しておったでゴザル』

さ、さいですか。

「ちなみに、他の仲間は?」

『全員違う大陸、と言うのでゴザルか?バラバラになったでゴザル』
ってことは、全部の大陸を廻れば、全員の力が使えるようになるわ

けか。

「よっしゃ、じゃ、すぐにやってくれ」

『承知!』

そう言うのと、一斬鬼丸（彼）は光となり俺に吸収されていった。その瞬間、彼の持つ装備、技が知識として俺の中に蓄積された。<斬鬼丸の技術をすべて覚えた>

『さて、拙者にできるのはここまででゴザル』

それを最後に、彼の言葉は聞こえなくなった。

で、元の時間軸に戻ったんだが。

やっぱりアイエフが突っ込んできてる最中で。

さて、どうしようかと考えながら剣を捌いていた。

「な、何で？ さっきは手を抜いていたの？」

そう言われ、気付く。

考え事をしながら、剣を捌いていることに。

（技とかだけじゃなく、こういうのも引き継がれるのか）

「手を抜いていたわけじゃなくて、思い出したただけ。捌き方を」

そう言いながら、少し後ろに下がる。

（そういえば、一回やってみたかったんだよね）

そう思いながら、双剣のライトセイバーを消す。

そして、一回り大きなM8ライトセイバーを片方だけ召還する。

「さて、ではこちらから行くぞ」

そして、今度は俺の方からアイエフに突っ込んだ。

アイエフに肉薄したときに、技を放つ。

『虚空……雷撃剣』

剣捌きは左から右へ風ぐだけ。

ただ、剣速が尋常でないほど早い。

すなわち、「雷撃」のように。

アイエフはどうか反応はできたが、そのまま吹き飛ばされてしま

った。

そして木に叩きつけられ、気を失ってしまったようだ。

……SAVE

第3話 少女と双剣と新たな力（後書き）

アイエフに勝ったケース。

そこに、ネプテューヌが現れる。

次回、「第4話 プラネテューヌに血の雨は降ったり降らなかったり（仮）」

今回登場してもらった、爆炎斬鬼丸さんですが、

その昔「POPCOM」というパソコン雑誌に掲載されていた漫画のキャラクターです。

本文にもあったとおり、他の仲間も登場予定です。

彼らのことについては、そのうち説明しようと思います。

それでは、また次回。

第4話 ギルドでの騒動（前書き）

辛うじてアイエフとの戦闘で勝利したケイス。
彼には無事、仕事が与えられるのだろうか？

第4話 ギルドでの騒動

ふう、どうにか勝ったか。

というか、斬鬼丸の力がなかったらヤバかったな。

そう思いながら、木に叩きつけられたアイエフのほうへ向かった。

side アイエフ

イタタタタ。

まったく、よくもやってくれたじゃない。

それに、途中まで手を抜いて戦われちゃうし。

ま、それについては、様子見と油断させる意図があったのかもしれないけどね。

そのとき、目の前に影が現れた。

さつき私をここまで吹っ飛ばしたアイツだ。

アイツは

「大丈夫か？」

と言いながら手を差し伸べてきた。

癪に障るけど、しょうがない。

私はその手を取って、引き起こしてもらった。

side アイエフ END

「本当に申し訳なかった。怪我はないか？」

そう言いながら、俺は頭を下げた。

理由はともあれ、下手をすれば大怪我をさせてしまう可能性があるあつ

たからだ。

けど、アイエフは「大丈夫よ」の一言で片付けてしまった。
やっぱり強いな、彼女は。

「ケイスさん、本当にすごいです。アイエフさんに勝っちゃうなんて」

「そうですね。彼女はプラネテューヌの有効戦力の一人だと言うのに」

ネプギアといーすんさんがそのように言ってきた。

「いやいや、運がよかったんですよ」

俺はそう答えた。

「それでは約束通り、ギルドにご案内しましょうか」

いーすんさんは「では、ついて来てください」というと、ふよふよと浮かびながら中庭を出て行った。

どうやら、ギルドに案内してくれるようだ。

「あ、私も行きます」

そう言って、ネプギアもついてきた。……本当に行く気満々だったのね。

一行がギルドにつくと、中で何かもめているようだった。

どうしたんだろうと思いい中の人に声を掛けると、

「ネプテューヌ様が、一番高いクラスの討伐依頼を受けようとしていたため、みんなでとめていたんですよ」

と返ってきた。

side ネプテューヌ

「だーかーらー、そんなの大丈夫だって。わたしが強いみんな知ってるでしょ？」

「ですから、先ほどから何度も申し上げている通り、何かがあつてからでは遅いのです」

うー、このわからず屋めー。

そんな時、横から割り込みの声が入った。

「だったら、俺と一緒にいこう」

……誰？

side ネプテューヌ END

思わず口を出してしまったが、この空気をどうすればいいんだ。

何か、みんな俺のほうを見てヒソヒソやっている。

「失礼ですが、あなたは？」

「あ、すいません。今日プラネテューヌに来たケースと言います」
俺は正直にそういう。

「そうですか。では、このギルドに来るのは……」

「ええ、はじめてです。ですが、護衛くらいならできるとおもいますよ？」

そういうと、ざわざわとなり始めた。

ま、無理もないか。女神の護衛が簡単とか言っちゃったし。

「貴方は護衛を何だと……」

ギルドの人がそう言おうとしたとき、いーすんさんが口を挟んだ。

「大丈夫ですよ、ギルドマスター。彼なら信用できます」

え???

「先ほど、彼にはネプギアさんの護衛となる試験を受けていただきました。結果は合格でした」

ちょ、おまつ。

「ちなみに、どのような試験だったのですか？」

そこ、いらんことを聞くな。

「アイエフさんとの戦闘。そして、勝利です」

そう言っと、アレだけわざわざしていたギルドの中がピタツと静かになった。

「やー、さっきはありがとね。助かったよー」

ネプテューヌは俺のほうに笑顔を向けてくる。

「あ、自己紹介がまだだったよね。私はネプテューヌだよ。プラネテューヌの女神をやってるんだー」

「私はケイスと言います。よろしくお願いします、ネプテューヌ様」
「固い、固いよケイスさん。もっとフランクにやってもらってかまわないよ？」

「わかった。こんな感じでいいですか、ネプテューヌ？」

「OKだよ」

そんなことをやっているうちに、さっきアイエフと戦ったときの話になった。

「そういえば、アイちゃんに勝ったんだって？強いんだー」

「いえいえ、ちょうど運がよかっただけですよ」

「それでもだよ。私だって結構苦戦するんだから」

「そうなんですか。でも、女神化すれば勝てるんでしょ？」

「まあねー。ってあれ？女神化とか話したっけ？？」

やべっ、知識のしゃべっちまった。
どうしょ。

「いや、あはは。だって、さっき女神様って言ってたじゃないですか。でも、俺たちの知ってる女神様とネプテューヌさんの姿が違うから、変身とかするのかな、って」

脂汗をだらだらと流しながらしどろもどろに答えた。

「すごーい。あたりだよ。」

……通じちゃったよ、オイ。

「そういえば、ギルドで何の依頼を受けたんですか？」

ちよつと興味があり、聞いてみた。

「いやー、山岳地帯に野良ドラゴンが出たって事だったんでその
退治を受けたんだよ」

オイ、マジヤバいつて。それは。

俺、もしかしてそこで死ぬんかな。

s i d e ネプギア

お姉ちゃんにケイスさんを取られちゃった。

私が一緒にクエストを受けるはずだったのに。

でも、次は一緒にクエストを受けられるよね？

s i d e ネプギア E N D

…… S A V E

第4話 ギルドでの騒動（後書き）

ネプテューヌと一緒にクエストを受けたケイス。
そこでは、何が待っているのか。

次回、第5話 初めてのクエスト（仮）

クエストがクエストなんで、おそらくネプが変身すると思います。
うまく書けるか不安ですが。
それでは、また次回。

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装（前書き）

成り行きでネプテューヌと野良ドラゴンの討伐をすることになった
ケース。

果たして、彼に無事明日は来るのか？

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装

「それじゃー、行ってくるねー」

ネプテューヌはみんなにそう声を掛けていた。
対する俺は、

「ああ、なんでこんなことになってるんだろ」

そうつぶやきながら、支度をしていた。

「ま、どうにかなるわよ」

アイエフはそう言うが、なかなか吹っ切れるものでもない。
って、待てよ。

そういえばこのクエストの報酬を聞いてなかった。

「なあ、ギルドマスターさん。このクエストの報酬っていかほど？」

「えーと、ですね。このくらいです」

そう言いながら1枚の紙を出してきた。

何々？成功報酬で100万クレジット？

「よし、ネプテューヌ。早く行くぞ」

そう言つて、支度をする手を早めた。

side ネプテューヌ

うわ。現金だなあ、ケイスさんは。

でも、不思議と嫌な感じはしない。

何でだろう。

そんなことを思っていると、ネプギアが話しかけてきた。

「お姉ちゃん、無理だけはしないでね？」

心配性だなあ、我が妹ながら。

「大丈夫だよ。そんなに危なくないってば。それに…」
そう言いながら、ケイスさんのほうを向く。

「今回はケイスさんも一緒だから。だから、あまり無理はしないよ」
「うん、そうだね」

わたしは、どっちかって言うとかケイスさんが無理をしないかどうか
って方が気にかかってるんだけどね。

side ネプテューヌ END

「じゃ、いつてきまーす」

ネプテューヌがそんな元気な声を出した。

街の方からは、「しっかりねー」とか「怪我しちゃ駄目ですよー」
とか、そんな声が聞こえてきた。

ちなみに行き先はハネダマウンテン。

ハネダシティから少し離れたところにある山だ。

プラネテューヌからだだと、歩いて数時間らしい。

「そういえば、ケイスさんって得物は何を使ってるの?」

ネプテューヌが歩きながらそんな風に聞いてきた。

「アイエフたちから聞いてないか? 剣と銃だよ」

「見せて見せて」

ネプテューヌが目をきらきらさせながら言ってきた。

おそらく、『何もないところから取り出す』って言うのを聞いている
んだろう。

やっぱり、ネプギアの姉さんだ。よく似てるよ。

そう思いながら、ほいっとM4ライトセイバーを取り出す。

そして、それをネプテューヌに渡してやった。

「へえ、軽いし扱いやすいね。わたしにぴったりだ」

「…やらんぞ」

ネプテューヌは「けちー」といいながら返してきた。

「あと、銃のほうだが…」

そう言いながらアルヴォPDW11を取り出し、すぐに引き金を引く。

ダダダダッ。

アルヴォPDW11の向き先には数匹のスライヌがあり、全弾命中していた。

「へー、すごいね。そんなことができるんだ」

ネプテューヌはぱちぱちと手を叩きながらその様を見ていた。

「本当はもうひとつあるんだが、それは後で、な」

で。

そうこうしている間に、目的地に到着。

ちなみに、目の前には数匹のドラゴン。

「ああ、これが今回の討伐対象か」

俺がそう言つと、ネプテューヌは首を横に振りながらこう言った。

「たぶん、このドラゴンは見張りか何かだよ。本命は後で来るよ、多分」

来てほしくないなあ。

と思っていると、4匹のドラゴンがこちらに切り込んできた。

だが、1匹だけ俺たちの来たほうと逆方向に走っていった。

マジで仲間を呼んでくる気が。

だが、そっちを気にしている余裕もなく、切り込んできたドラゴンの対処に追われる。

俺はすぐにM4ライトセイバーを2振り取り出し、両手に構えた。

「よし、行くぞ」

そう言い、ドラゴンを迎え撃つ。

「うお、硬っ」

マジで硬かった。ドラゴンメイルとか、硬いわけだよ。

それでも、何回か斬っているうちに傷を負わせることができ、倒す

ことができた。

「そっちはどうだ？」

「こっちも今終わったトコだよー」

どうにか凌いだな、と思いながら地面に座り込んだが、やっぱりそれだけでは終わらなかった。

「ケイスさん、新しいのが来たよ、多分2〜30匹」

おいおい、勘弁しろよ。

ドラゴンたちは、やっぱりこちらに突っ込んできた。

だが、先ほどの戦闘後ということもあり、おれは少し疲れていた。ネプテューヌもそれは変わらないようだった。

「ネプテューヌ、ここは変身してどうにか時間を稼いでくれ」

俺はそう言っていると、M4ライトセイバーをしまい、チャージの体制に入る。

「わたしひとりで？」

「ああ、凌ぐだけでいい。少ししたら、俺のほうで殲滅する」

「わかったよ！変身！！」

そう言っていると、ネプテューヌは女神化した。

side ネプテューヌ

「さあ、どこからでもかかってらっしゃい」

私はそう言っていると剣を構えた。

それを警戒してか、ドラゴンたちはそこで立ち止まってしまった。そして、ある方向をいつせいに向く。

そう、ケイスがいる方向だった。

「それだけは、絶対にさせない」

そう言いながら、私はドラゴンたちを必死で止めていた。止めようとしていた。

でも、一人では限界があり、数匹は段々とケースに近付いて行ってしまう。

その数匹に対して剣を振る。

そうすると今度は他の数匹がケースに近付いてしまう。

結果的に、全部が近付いてしまうことになってしまった。

「駄目っ。ごめん、ケース」

ドラゴンたちはケースのすぐそこまで近付いてしまった。

そんな時だった。

「サンキュー、ネプテューヌ。どうにかなったぜ」

そんな声が聞こえてきた。

side ネプテューヌ END

「ネプテューヌ、すぐこっちに来い」

そう言つて、ネプテューヌの

手を引っ張り、俺の後ろへ移動させる。

「いいモン見せてやるよ」

そう言つて、俺はLC5レーザーライフルを呼び出した。

すでに、チャージも完了させてある。

「行くぜ、ファイヤー!!」

そう言つてトリガーを引く。

辺りが閃光に包まれ、俺たちとドラゴンはその閃光に巻き込まれた。

数秒後、そこに残っていたのは俺とネプテューヌだけだった。

「ねえ、今何したの？」

ネプテューヌはそう聞いてきた。

「今のは、光の力を溜め込んで、それを暴発させたみたいなものだ」
「ま、嘘は言つてない。レーザーも光だからな。」

「それが奥の手だったんだ。そんなのが相手じゃ私でも勝てないわ」

よ」

「いや、コレはさっきみたいに発射するのに時間がかかってしまった。だから、誰かと協力しないと難しい、ってわけ」

そう言うと、ネプテューヌは妙に納得していた。

「だから、私をスケープおとりゴートにしたのね」

……あ。

……SAVE

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装（後書き）

クエストを無事に終わらせて帰ってきたケイス。
そんな彼に待っていたのは……。

次回、第6話 旅立ち（仮）

ちなみに、羽田山って本当にありますよ、ええ。

まあ、ハネダシティの元ネタの場所ではないですが。

それでは、また次回。

第6話 旅立ち（前書き）

すいません、投稿が遅れました。

野良ドラゴンの討伐を終えたケイス。
その帰り道……。

第6話 旅立ち

「そーいえばさー、ケイスー」

とぼとぼとプラネテューヌに歩いている最中、ネプテューヌが話しかけてきた。

「何？」

「プラネテューヌで働いてみる気、ない？」

「はい？」

「プラネテューヌで働いてみる気って……。」

「それって、仕官のお誘いですか？」

「あー、そんなに堅っ苦しいことじゃないんだけど、大体そんな感じー」

「やっぱりそうか。」

「とりあえず、辞退させてもらいますよ」

そう言うと、ネプテューヌは不思議そうな顔をして「何で？」と尋ねてきた。

「端的に言つと、今の世界を見て廻りたいから、かな」

「プラネテューヌで仕官しても、自由に行動できるよ？」

「おいおい、そりゃ自由すぎやしないか？」

「ネプテューヌはそう思っていて、周りはそうは思わないよ」

そんなフリーダムに行動できるのは、君だけだ。

「でも……。ネプギアも気になつてゐたいだし……」

「そりゃ、気のせいだ。それが、アイエフを負かした人間として興味があるって程度じゃないか？」

「ま、そんなもんだらうなあ。」

「それにさ、ちよつと嫌な予感もするんだよね」

「嫌な予感？」

「ああ。何か悪いことが起こりそうな、そんな予感」

1年後に起るからな、アレが。

「そんなことないよー？ 私たち、女神がいればどうにかなるよ」
「だといいいんだけどね」

「それにね」

「ん？」

「それに、プラネテューヌの女神たちに会ったんだ。他の女神にも会ってみたくなったんだよね」

ネプテューヌは、「そっかー」と言いながら先を歩いていった。
どうやら、諦めてくれ……

「じゃ、他の女神に紹介するから、それだったらいいよね！」

…… なかったようだ。

「まあ、紹介してくれるってのなら吝かではないけど、自分の足でいろんなところを歩いても見たいし」

「そっか。でも、他のところを廻って満足したら、プラネテューヌに来てくれる？」

…… なんか、食い下がるなあ。

「そのときに、プラネテューヌが一番いいと思っていたらね」

「うん、約束だよ？」

「ああ」

プラネテューヌに段々と近づいてきた頃。

「そういえば、プラネテューヌに帰ったらどうするの？」

ネプテューヌがふいにそう聞いてきた。

「そういえば、ネプギアと一緒にクエストに行くって約束してたんだよなあ」

別に嫌なわけではないが、なにやら気が重い。

「何で落ち込んでるの？」

「いや、ネプギアとのクエストどうしようかな、って
そう言いながら、またため息をつく。

「簡単な、スライヌ退治とかでいいんじゃないの？」

「え？」

それは駄目なんじゃね？

「だって、ネプギアは多分ハイキング気分で行くと思うよ？私の妹だし」

いや、自分を基準にしないでくれ。

つて、ちよつと待て。

「つてことは、このクエストはハイキング気分で受けたのか？」

「ギクッ」

まあ、どうにかなったし別にいいよ、今さら。

「別にいいさ。でも、本当にスライ又退治とかで大丈夫なのか？」

「そうだねー。お弁当持ってー、おやつと水筒を持って行くつてのはいいかもねー」

ふむ、それならその手も考えておこう。

そんなこんなで帰ってきました、プラネテューヌ。

「おかえり、ケイスさん。それに、お姉ちゃんも」

俺たちを迎えてくれたのはネプギアだった。

「うっ、ネプギアがケイスさんに取られちゃった気分……」

何を落ち込んでるんだ？ネプテューヌは。

「それで、どうだったの？ドラゴン退治は」

「あっさり終わっちゃったよ。ケイスさんの一撃で」

「へえー、そうだったんだー……つて、ええ！？」

おお、ネプギアが驚いとる。

「え。でも。ケイスさんつて剣と銃しか持ってないですよね？」

「それがねー……」

ネプテューヌがこつちを見てウインクする。

出せつて事が。

「よつと。こんなもんがあつたりする」

そう言つて、LC5レーザーライフルを出す。

「聞いてないですよ、そんな武器」

「話してなかったしな」

「おお、女神様、ご無事でしたか」

ギルドにつくなり、ギルドマスターがそう話しかけてきた。

「うん、大丈夫だったでしょ？それじゃ、換金換金！」

そう言っと、ギルドマスターは店員に指示して、報酬を持って来させた。

「これが、今回の報酬、100万クレジットだ」

そう言っと、テーブルの上にドカッと置いた。

うん、確かにそのくらいありそうだ。

「で、二人で山分けか？」

「ううん。独り占めで」

ちょ。聞いてないぞ、そりゃ。

そう思っていると、ネプテューヌはこっちを振り返りこう言った。

「ね、ケイスさんの独り占めでいいよね？」

「いや、やっぱり山分けだ」

二人で協力して討伐したんだ。そうしないと、公平じゃない。

「分かったよ。じゃ、半分は預からせてもらう（……………）ね？」

で、50万クレジットなんて大金持つてるわけには行かないんで、手元に少しだけ残して後は全部銀行に預けた。

「さて、と。あとは、ネプギアとの約束だけか」

そう言つて、ネプギアのほうを見る。

「え？私ですか？あ…………」

思い出したようだ。

そのときネプテューヌがちよつと離れたところから声を掛けた。

「ちよつと、ネプギア。こっちにちよつと来てー」

side ネプギア

うー、お姉ちゃん。なんて間の悪い。

これから、ケイスさんとクエストに行けるかもしれないっていうのに。

「何？お姉ちゃん」

私は極めて不機嫌そうな顔をしながらそう言った。

「えっとねー、ケイスさんとのクエスト、今回は我慢してくれないかな？」

やっぱり。

「何で？わたし、楽しみにしてたんだよ？」

「わかるわかる。だけどね……」

そう言っていると、お姉ちゃんは急に声のトーンを変えてこう言ってきた。

「多分、今ケイスさんと一緒にクエストに行ったら、迷惑を掛けちゃうかもしれないよ、ネプギア」

「そんなことないよ！」

「ケイスさんは、すごい強いよ。だから、もっと強くなってから一緒にクエストに行ってもらったほうがいいと思うな、私は」

でも、クエストって強くなるために受けるんじゃないのかな？

「だから、約束をするんだよ。再会の」

「再会の？」

「うん、そう。そして、一人前になったネプギアを見てもらったほうが、ケイスさんは好きになってくれるんじゃないのかなー」

え、何でお姉ちゃん……。

「『何で分かるの？』って顔してるね。そりゃ分かるよ、姉妹だもの」

「お姉ちゃんの言う通りかもしれないね」

ありがとう、と言ってわたしはケイスさんのほうへ向かった。

side ネプギア END

「どうしたんだ？」

ネプギアがネプテューヌからやっとな開放された。
何を話してたんだろうな。

「あ。えーとね、クエストの件だけど……」

「どうした？何か要望があるのか？」

「ひとつ、教えてください。ケイスさんはいろんな国に行ってみた
いんですか？」

ネプテューヌに呼ばれてたのはこれが。

「まあ、それに関しては否定はしない」
事実だしな。

「だったら、他の国全部廻った後に、またプラネテューヌに来てく
れませんか？」

ネプテューヌめ、何か言ったのか？

「わたしは、今はまだすごい弱いです。それこそ、ケイスさんと一
緒にクエストに行ったら迷惑を掛けちゃうかもしれない」

「いや、そんなことは……」

「だから、時間をください。ケイスさんに迷惑を掛けなくらいま
で強くなっておきますから」

ネプギアの顔は、真剣そのものだった。

「わかった。だったらさ、俺もその約束を忘れないように」

そう言つて、俺は1振りの剣を召還した。

うまくいってくれよ。

「出でよ、『バルムンク』」

一振りの剣が出てきた。そして、術式固定。

「これを、預かっておいてくれ」

「これを、わたしに？」

「うん、持っておいて欲しい。そして、それで戦えるようになって
いてくれるとうれしいな」

「は……はいっ！」

ネプギアは、うれしそうにその剣を両手に抱えていた。

そして時間は2日ほど過ぎたある日。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

おれは2日ほどかけて旅支度をしていた。

何しろ、地図も良く分らないので色々と頭に入れることが多すぎるからだ。

「うん。それじゃ、元気でねー？」

ネプテューヌは、元氣に見送ってくれている。

それに、彼女には1つ頼みごとをしておいた。

他の国の女神に、俺が会いに行くということを伝えてもらうということだ。

「ネプテューヌ、アレのこと頼んだよ？」

「分かってるよ。みんなに連絡しておくから、安心しておいで」
それが一番心配なんだよ。

「ケイスさん、氣をつけてくださいね」

ネプギアは、いつも通りに話しかけてくれた。

「ああ、ありがとう、ネプギア。そっちこそ氣をつけろよ？」

「もちろんです。ケイスさんと約束しましたから。強くなるって」
そう言いながら、ニコツと笑ってくれた。

「そうだね。それじゃ、劍の手入れも忘れずにね」

「はい、大事に預からせてもらいます！」

そう言いながら、腰に下げている件に目を向ける。

先日預けた『バラムンク』だ。

「それじゃ二人とも、元気でな！！」

そう言つて、2人の女神と別れた。

さて、と。どこに行こうか。

やっぱり順番的にはルウィーかなあ。

新たな国を目指し、俺は歩き始めた

……
SAVE

第6話 旅立ち（後書き）

ルウィーを目指して旅をするケイス。
そこで、新しい出会いが待っていた。
次回、第7話 新たな出会い（仮）

- - -
- - -
- - -

今回は、誰と会おうんだろうねえ。

ケイス「俺が知るか！」

まあ、順当に行けば、ルウィーの双子だろうなあ。

ケイス「他にあんのか？」

そりゃ、ブランってこともあるかもしれないし、道に迷ってラス
ティオンに行くこともありえるし。

ケイス「おい、後者は笑えねーぞ」

ケイス「そういうええさ、ネプギアに渡した『バルムンク』だっけ。
アレって、出せたのか？」

ライトセイバーの電源が切れたら出す予定だったけど、初めのうち
でそんなことあるわけないしねえ。

それに、元々は渡す予定はなかったのだよ。

ケイス「だったら、どして」

いやあ、後々のことを考えて。

- - -
- - -
- - -

それでは、また次回。

幕間 設定のまとめ〜プラネテューヌ編〜 + 駄話（前書き）

祝！初感想を頂戴しました！。

励みになります。ありがとうございます。

と言うことで。

プラネテューヌ編が終わったので、

取得した武器や設定をまとめておきます。

幕間 設定のまとめ／プラネテューヌ編 + 駄話

【取得した設定】

爆炎斬鬼丸の技、能力、装備。

【装備】

転移の数珠、およびそこにしまわれていた武装の数々

転移の数珠：別次元から武装などを呼び出すためのアイテム。
似たものに、四次元ポケットや王の財宝がある。
ゲート・オブ・バビロン

転移の数珠での保管場所に、ケイスの武器も存在している。

転移の数珠は、ケイスの首にネックレスとして装備されている。

【技】

虚空雷撃剣

剣をすばやく横に薙ぎ、敵を切り捨てる技。

剣速が速いため、熟練の剣士でも反応ができないことがある。

【能力】

超高速並列思考

簡単に言ってしまうえば、やろうと思えば右手と左手で別の相手と同時に戦える程度の能力。

そのため、きちんと「見ていれば」どこにどのような攻撃が来るかがすぐに分かる。

3話では、それのおかげでアイエフの攻撃を凌いでいた。

敵の察知

ただし、機械系のモンスターに限る

斬鬼丸自身が機械の塊なので、そのセンサー類で検知している。

- - -
- - -
- - -

ケイス「で、結局『斬鬼丸』って何者なんだ？」

「えと、前にも書いたと思うけど、ポプコムって雑誌に載ってた『リバーサー』って漫画に出てくる、機械剣士」

ケイス「で、何でそれをこの小説に入れようと思ったんだ？」

「カッコイイから。以上」

ケイス「おいおい」

「まあ、3割くらい冗談。本当は、1回このネタで書いてみたかっただけ」

ケイス「ちょい待て。7割くらい真実じゃねーか」

「まあね。それより、本当はその漫画に出てくるセンカつてのとシユンってキャラの力を使いたってのが本当のところ」

ケイス「で、出てくるのか？その2人は」

「もちろん。だって、3話で出したでしょ？それぞれの大陸に1人ずつ仲間がいるって」

ケイス「そこにつながるのか。…あれ？そついえばもう一人の仲間
つてのは？」

「ああ、ダイクっていうさえないおっさん」

ケイス「えー」

「…の姿をした世界最高の魔導師」

ケイス「さっきの『えー』を返せ」

「コイツはコイツですごいんだよ。魔法に強けりゃ機械にも強い。
んでもって、ある装備品のおかげで魔力の消費がほとんどナシ」

ケイス「ちょ、おまつ。魔法戦に関しては最強キャラになるじゃね
ーか」

「そだね。けど、コイツには弱点があつてな」

ケイス「ほうほう。で、その弱点とは？」

「女に弱い」

ケイス「……弱点っていうのか？それ」

ケイス「そついえばさ、前回（6話）の最後に俺、バルムンク出し
て、ネプギアにあげてたけどさ」

「ほいほい」

ケイス「いつ出せるようになったんだ？」

「野良ドラゴン倒した後、レベルが上がって」

ケイス「え？」

「ちなみに現在、数値の上では君はレベル30くらいだから」

ケイス「他には、何が出せるんだ？」

「とりあえず、何でも。使った回のあとがきにでも説明を書くさー」

ケイス「適当だなあ」

「そういえば、書くのを忘れてた」

ケイス「何を」

「この世界の設定」

ケイス「いやいや、設定はあるだろ？原作があるんだし」

「いやいや。ここ、原作の4年前。女神たちがマジエコノ又退治に出かける1年前の話だから」

ケイス「まあ、そりゃそうだけど」

「ちなみに、1〜6話で何か不思議に思わなかった？」

ケイス「何を」

「ん。ネプギアが女神化しないこと」

ケイス「あ、そういえば

「ということ。現時点では、女神候補生は女神化できませんってことで」

ケイス「何で？」

「いやね、不思議に思ってたんだよ。何でネプギアだけマジエコン又退治に連れて行ってもらえたのか。俺の中の答えでは、原作の3年前では女神候補生のうち女神化できるのはネプギアだけだったんじゃないだろうか」と

「ルウィーの2人についてはミナが止めていたって可能性もあるけどな」

ケイス「まあ、あり得るなあ」

「ということ、そんな設定で行きます」

幕間 設定のまとめ／プラネテューヌ編　＋　駄話（後書き）

設定を書き忘れていたので、急遽こんな形で出しました。

今後は、何か新しい要素が出たら、あとがきに書くようにしないで
は。

第7話 新たなる出会い（前書き）

プラネテューヌでの事を終えて、ルウィーに向かっているケイス。
ここでは、どのような出会いが待っているのか

第7話 新たなる出会い

「ああ、ルウィーはまだかー」

俺はそう言いながらプラネテューヌとルウィーを結ぶ街道を歩いていた。

気候的には、どちらかと言えば寒いに属するだろうか。

雪が降っているため、寒いのは当たり前なわけだが。

そのため、先ほど立ち寄った街でコートを買い、それを羽織っている。

「マスター、無理をせず車で行ったほうがよかったのでは？」

そう言つて、胸ポケットから顔を出すアーンヴァル。

え？コイツがどこから来たかつて？

コイツは、斬鬼丸の装備の一部を使って組み上げた、俺オリジナルの兵装。

姿形、声まで武装神姫のアーンヴァルと一緒にだ。

しかも、大きさも15cmくらいときている。

ただ、彼女が装備できる兵装が全くないため、素体状態のままだ。

「いやいや、歩いていったほうが、生の情報を集めやすいだろ？」

それに、原作の誰かに会えても不思議じゃないしな。

side ???

ちよつと街から離れたところまで来ちゃったなあ。

それに、目的のキノコもたくさん取れたし。

「そろそろ、教会にかえろっか。ミナちゃんも心配してるだろうし」

「……うん」(コクコク)

ミナちゃんには、キノコを採ってくるとしか言っていないから、早く帰らないと。

じゃないと、また『そうさくたい』を組織してわたしたちを探しに

行きかねない。

そう思った時だった。

ちよつと離れたところから、

『ギューーン、ガシヨン、ガシヨン』

と機械の動く音が聞こえた。

わたしたちは、咄嗟に岩陰に隠れてその音の主を探した。

前に、お姉ちゃんに教えてもらった、怖いモンスターの一体。

たしか、D S T T って名前だったと思う。

だけど、あのタイプのモンスターは、国際展示場の方にしかない
って聞いてたのに。

「どうしよう、ロムちゃん」

「……こわい」（びくびく）

ほんとに、どうしよう。

教会に帰るためには今隠れてるところから出なくちゃいけないし、
出たらあのモンスターに見つかっちゃう。

そんな時。

「くちゅん」

ロムちゃんがかわいくしゃみをした。

『ピ。ピ。ピ。ピッ、ギューーン、ギューーン』

間違いなく、見つかったみたい。

D S T T は、確実にわたしたちのいるところに向かってきているよ
うだった。

s i d e ? ? ? E N D

何か、ひっかかる。

「どうしたんです？ マスター。変な顔をして」

これは、突っ込まないといけないんだろうか。いやいや、何かそう
も言っていられない状態のような気が。

「いや、機械の探知に何か引つかかったみたいなんだ。アーンヴアル、お前の方の探知に何か引つかからないか？」

「えつとですね、……あ。人が二人近くにいます。大きさを言って子供のようですね」

「方角と距離は？」

「東に500メートルと言ったところでしょうか」

うん、大体あつてゐる。

ん？何か、移動速度が速くなったな。移動方向は南というところか。

「あ、マスター。先ほどの反応ですが、片方だけが動き出しました。東方向へ」

「もう片方は？」

「そのままとどまっています」

あ、こっちの反応も、南東へ方向を変更した。

と言つことは、この二人が危ない！

俺はそこから東の方角へ駆け出した。

side ???

どうにかして、ロムちゃんから引き離さないと。

そう思つて、わたしは隠れていた岩陰から飛び出した。

「マスター、わたしはここよー、追いつけるもんなら追いついてみなさい！」

わたしはそう言つと、一目散に走り出した。

そんなに移動速度の速そうなマスターじゃないし、楽勝よね。

でも、わたしの予想は悪いほうに裏切られた。

モンスターは飛行形態になってわたしのほうに迫ってきた。

そして、目の前にモンスターが来てしまった。

もうだめっ。

わたしはそこで目を閉じた。

side ??? END

やべえ。

目の前では女の子が走っていて、それにロボットが飛行形態で近づいていた。

こうなったら、こっちに注意を引き付けるか。

そう思い、アルヴォPDW11を呼び出す。

そして、女の子に当たらないように、しかも近づきながらトリガーを引く。

キンキンキンツと弾かれてしまったが、注意を引き付けることはできたようだ。

side ???

目を閉じて衝撃に備えていたんだけど、何も来る気配がない。

さっき、なにか金属音が鳴ったみたいだけど、どうしたんだろう。

わたしはおそろおそろ目を開けてみた。

そこでは、さっきのモンスターと見たことのない男の人が銃で応戦していた。

「やっぱ、銃じゃ駄目か」

そう言つて手に持った銃が消え、代わりに剣が姿を現す。

「とりあえず、これでどうだっ!」

そう言つてDSTTに一撃を加え、後退させた。

side ??? END

お。目を開いたな。

「よお、無事か?」

「うん、どうにか無事だけど。アンタ誰?」

うおっ、キツイお言葉。

「俺はケイスってんだ。よろしくな」

「わたしは……って。アイツが何か撃つてきそうよ?」

そう言われてロボットのほうを見ると、何かチャージをしていた。

「アーンヴァル、電磁フィールド展開だ」

「イエス、マスター」

アーンヴァルはそう言う俺たちの前にフィールドを張った。

ロボットは、何かビーム方のようなものを撃ってきたが、電磁フィールドに阻まれ、俺たちに命中することはなかった。

もちろんその後、剣のみで倒してやりましたよ、ええ。

さて、と。

「そつえば、誰かもう一人いたんじゃないのか?」

そんなことを言っていると、こちらに誰かが走ってくる足音がした。足音がするほうを見てみると、ロムが走ってきていた。

そして、ラムに抱きついていた。

「……ラムちゃん、大丈夫?」

「うん、この人がアイツをやっつけてくれたから」

「……ら」

「ら?」

「ラムちゃんを……まもってくれて……ありがとございました」

そう言って、ロムは深く頭を下げた。

顔を上げたとき、顔が真っ赤だったが、噛んだのが恥ずかしかったんだろうか。

こうして、俺はルウィーの女神候補生と出会った。

……まあ、本人たちはまだ明かしていないが。

……SAVE

第7話 新たなる出会い（後書き）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「はい、というわけでルウィーの双子女神候補との出会いの話でした」

ケイス「そういえば、何でアーンヴァルが出てきてるんだよ」

「ということで、アーンヴァルの説明を下に」

アーンヴァル

リバーサー

原作では、バトルユニットという名称で出てきています。姿は、ダースベーターのヘルメットのみ見たいな感じ。型番はど忘れしましたが、愛称は『ちぢこ丸』『かしこ丸』だった記憶が。

本当は原作のままの姿で出す予定だったのですが、諸般の事情で武装神姫のアーンヴァルの姿となりました。

能力としては、索敵能力および電磁フィールド（いわゆるバリアっすね）を張ることができる。

人語を理解し使用することができるため、コミュニケーションをとることができる。

「まあ、今のところは物理攻撃用のバリアを張る係って感じかな」
ケイス「かわいそうに。それだけのために……」

「物語が進むと、実はちよっとしたキーパーソンになる」

ケイス「おお」

「……といいなあ」

ケイス「おい！」

- - - - -

[illegible]

それでは、

次回、第8話　そしてルウィーへ（仮）

でまたお会いしましょう。

第8話　そしてルウィーへ（前書き）

成り行きでロムとラムを助けたケース。

さて、この後彼はどんな行動を取るのだろうか。

第8話　そしてルウィーへ

「へえ、ロムちゃんとラムちゃんって言うんだ」

俺は今、ロムちゃんラムちゃんと一緒に歩いている。

彼女たちがルウィーへ帰る、というので護衛を買って出た次第だ。

「うん、わたしがラムよ。よろしくね」

「……わたしが……ロム。……よろしく（ボソボソ）」

「俺は、ケイスって言うんだ。よろしくな」

「うん。よろしくされてあげる」

「……うん」

あー、原作通りにラムちゃんはお転婆、ロムちゃんは無口って言うか恥ずかしがり屋か。

「そういえば、ケイスはルウィーに何をしに来たの？」

「何をしに、というか。ちょっとルウィーに行ってみようと思ってな」

まあ、本当は力を手に入れるためだが、表向きはこんなもんだろ。

「それに、ルウィーの女神様にも会ってみたかったしな」

そう言うと、ロムとラムは顔を見合わせてニコニコ笑った。

「ケイス、アンタ運がいいわよ。わたしたちが、このルウィーの女神なんだから」

「……正確には、女神候補生」

うん、知ってる。

「へえ。ってことは、今の女神様の妹なのか。ロムちゃんとラムちゃん」

そう言うと、二人そろって「うん！」と答えてくれた。

元気のあることは、良いことだ。

「でもね、おねーちゃんは重い病気にかかってるって、ミナちゃん

が言ってた」

いやいや、それは初耳だぞ。

「……うん、なおりづらい病気だつて、言ってた」

「もしかして、今もベッドで横になつてゐるのか？」

「ううん。ふだんは大丈夫なの。でも、たまに『ほっさ』が起こるつて言つてた」

「……そのときには、近づいちゃいけないつて、ミナちゃんに言われた」

あ。もしかして……。

「ちなみに、なんて病気つて言つてた？」

「「ちゅーにびょう」」

やっぱりか。（笑）

「うん、それは発作が起こつてるときには近づかないほうがいいな主に精神的な意味で。」

「そつういえば、さつき出たミナちゃんつて誰？」

「ミナちゃんは、ルウィーの教祖なの」

「…教祖なの」

「でも、怒るとすつとつこく怖いの」

「……こわいの（びくびく）」

「でも、すごい優しいの」

「……うん、やさしいの」

ああ、確かに怖いだろうなあ。あんな黒いオーラまで出るような怒り方は。

side ミナ

ロムちゃん、ラムちゃんがなかなか帰つてこない。

『きのこをとりについてくるねー』

と言つて出かけてからすでに数時間。

すでに帰つてきてもおかしくない時間なのに、なかなか帰つてこな

い。

「ブラン様、あの二人遅くないですか？」

私は、本を読んでいるブラン様にそう問いかける。

「……大丈夫、多分寄り道をしているだけ」

ブラン様はそう答えるけど、私は気が気じゃない。

「やっぱり、遅いです。もうそろそろ日も暮れるというのに、一向に帰ってこないじゃないですか」

なんと言われようと、心配なものは心配なのだ。

「……だから、大丈夫。そのうち、元気に帰ってくるわ」

「ブラン様は心配じゃないんですか!？」

私がそう激昂すると、ブラン様は読んでいた本を閉じてこう言った。
「……心配に決まってる。でも、あの子達のこと、少しは信用してあげて」

ブラン様がそう言った直後。

「ただいまー」

と元気な声が教会の中に響いた。

「ほら、ね」

side ミナ END

ラムちゃんが元気よく「ただいまー」と言って教会の扉を開けて入って行った後を、小さく「……ただいま」とビクビクしながらロムちゃんが入っていく。

怒られちゃうのかな、二人とも。

その後に続いて、俺が「失礼します」と言って教会の扉をくぐった。入っていったら、すでにミナによるお小言が始まっていた。

もっと早く帰ってきなさい、とかあまり遠くに行かないように、とか言われているようだった。

そして、ひとしきり怒ったミナが顔を上げたとき、俺と目が合ってしまった。

「あ、もしかして見られていました？お見苦しいところをお見せして申し訳ありません」

そう言つて、俺に頭を下げてきた。

「この教会の教祖、西沢ミナと申します。失礼ですが、何の御用でしょうか」

「申し遅れました。私はケイスと申します。冒険者をやっております」

そう言つと、ミナさんは何か思案し始め、「あ」と声を上げる。

「もしかして、プラネテューヌから来た方ですか？」

「え、ああ、はい。まあ、一応」

「そうでしたか。プラネテューヌでのご活躍、聞き及んでおります」
活躍って何だよ。

「活躍って言つと、わたしたちも助けてもらったんだよ、ミナちゃん」

「……うん、かつこよかった」

「助けてもらった！？」

「そうよ。モンスターに襲われているところを助けてもらったの」
「……助けてもらった」

おい、ロムちゃんにラムちゃんよ。

何か、あっさりしすぎじゃね？

「えええつと。本当に、本当にありがとうございました」
ミナさんはワタワタしながら俺に何回も頭を下げてくる。

うわあ、この人本当に真面目なんだなあ。

「ロム、ラム、二人はちゃんとお礼した？」

そんな声がしたほうを向くと、ブランがロムちゃんとラムちゃんの頭を撫でながら、話をしていた。

「うん、もちろん！」

「……お礼、言った」

「……そう」

そう言ったあと、ブランは俺のほうを向いてこう言った。

「私からもお礼を言わせてもらう。妹たちを助けてくれて本当にありがとう」

そう言つて、柔らかな表情で微笑んだ。

「私はルウィーの女神。普段はブランと名乗ってる。よろしく」
そう言つて、右手を差し出してきた。

「冒険者のケースと言います。お会いできて光栄です」
俺もそう言いながら右手を差し出し、握手をした。

……SAVE

第8話　そしてルウィーへ（後書き）

お前、礼儀正しいのな。

ケイス「いや、そりやこの世界で生きていけないといけないんだから、当然っしょ」

まあ、そうかもな。

そういえば、今回アーンヴァルが全然出てこなかったな。

ケイス「アンタが前回あれだけ脅かすから、出て来れなかったんじゃないのか？」

あー、そんなこともあったねえ。

アーンヴァル「『そんなこともあったねえ』じゃないです！（ドゴツ）」

ケイス「おい、あんばる。適度にしとけよ？」

止めるよ。

あんばる「って、何で私の名前が『あんばる』に？」

いいじゃん。ここ、本編じゃないんだし。

あんばる「よくねーです」

それじゃ、次回予告いくよー。

あんばる「また今回も無視っすか」

ブラン「次回、『あぁっ、女神さまっ』」

すまん、ブラン。マジでそれはやめさせてくれ。

ブラン「えー」

えーじゃない。

次回、「女神と明るい食卓と大事件（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「そういえば、なんでいつも（仮）がついているんだ？」

ん？気分によって変わるかもしれないから。

ケイス「んなことで変えるなー」

第9話 女神と明るい食卓？（前書き）

ロムとラムを連れてルウィーの教会へ来たケイス。
ロムとラムの怒られイベントが終わった後……。

第9話 女神と明るい食卓？

「あの、よければ今日はもう遅いので、教会こういで寝泊りされませんか？」

「ミナさん教祖がそう持ちかけてきた。」

今は夕刻だから、そこまで遅い時間ではない。

けど、さすがに今から街で宿を取るには遅すぎる時間だった。

それに、プラネテューヌを発ってからずっと野宿だったため、ありがたい申し出だった。

「お言葉に甘えさせていただきます」

俺はそう言つとミナさんに頭を下げた。

「それに、この二人を助けていただいたんですから。教祖として、人として当然のことをしているだけです」

彼女はそう言つて、祭壇の手前の扉から出て行った。

「腕によりをかけて夕食を作りますので、楽しみにしてくださいくださいね」

と言に残して。

ロムとラムは、ミナを追いかけるように、同じ扉から出て行った。

夕食の準備を手伝うのか。

感心感心。

そんなこんなで気がつけば、教会の中には俺とブランが残されていた。

ブランはあまり饒舌な方ではない——というより、どちらかと言うと無口だろう。ため、物静かな空気が漂っていた。

「……座つたら？ここには、椅子がたくさんあるから」

先に声を発したのは、ブランだった。

「あ、はい。失礼します」

そう言いながら、俺は椅子に腰を下ろすのだった。

俺がそんなことをしていると、ブルンはずっと本を読んでいた。どんな本を読んでいるのか、非常に興味がある。

「あの……。先ほどから、熱心に何の本を読まれているんですか？」俺がそう言つと、ブルンは本から目を離しこちらを見てきた。

そして、本を持ち上げ俺のほうへ見せた。

「これ」

本の表紙にはこう書かれていた。

『家族との団欒。夕食時の会話100選』と。

苦労してるんだなあ、ブルンも。

俺は、ブルンから少し離れた場所に座ることにした。

……邪魔しちゃ悪いからな。

そして、胸ポケットからアーンヴァルを出してやる。

「アーンヴァル、すまん。もう少し早く出してやればよかったな」

「酷いです、マスター。5日間くらい外に出ていなかったような気がします」

気のせいだ、アーンヴァル。

「それで、どうしたんですか？マスター」

「いや、今の武装を確認しておこうと思つてな。お前は、転移の数珠の向こう側が分かるだろ？」

「はい、それはもちろん。そういう設定になっていますから」

設定言うな。

「で、俺の戦い方に合う武器を見繕つて欲しくてな」

いつまでも、M4ライトセイバーとアルヴオPDW11だけでは心許ない。

そこで、アーンヴァルに選んでもらおうと言つ寸法だ。

「そうですねえ」

そう言つて、アーンヴァルは押し黙った。

おそらく現在武装の検索をしているのだろう。

「剣に関しては、ギュリーノスカレーヴァティン、銃に関してはさほど変わりませんが、手数と言う意味ではアルファピストルなどが良いかと。または、今のアルヴォPDW11を光学武装に改造するか、でしょうか」

へえ、結構いいのが出てきたじゃないか。

「あれ？この武装は何でしょうか。私の中のDBに入っていないものがあります」

「お前が把握していない武装？そんなことがあり得るのか？」

「いえ、通常ありえません。それにしても、何でしょうか。この、『種別：魔法の杖』というものは」

「魔法の杖？」

「はい、武装の情報を調べたらその単語が出てきました」
「一体なんだろうか。」

そのうち、呼び出してみよう。

「おねーちゃん、ケイスさん、ごはんできたってー」

ラムちゃんが教会の中に入ってくると、大きな声でそう言った。

「ラム、そんな大きな声で言わなくても聞こえる」

「そうかなー。だって、この間聞こえてなかったみたいだったし」

まあ、本を読んでいると聞こえないこともあるかもな。

「……ケイスさん、ごはん、たべよ？」

俺の近くには、ロムちゃんが来ていた。

「そうだね、それじゃいこうか」

そう言っ立ち上がり、ロムちゃんの頭を撫でてから扉へ向かうとした。

そういえば、どこにどう行けばいいんだろうか。

そう思っていると、ロムちゃんは俺の手を握って、「こっち」と言っ引張っていった。

side ラム

あ、ロムちゃんが頭を撫でられて笑顔になってる。
あんな笑顔、私にもあまり見せてくれないのに！

あのケースって人、どこに行けばいいのか分からないみたい。
しょうがない、案内してあげようか。
つて、ロムちゃんが手を握って連れて行っただけ？
あんなに積極的なロムちゃん、見たことないよ！？
うう、なにがあっただろ……。

「おねーちゃん、私たちも早く行こ」

「ラム、分かったからそんなにせかさないで」

おねーちゃん、早く！

早くしないと、ロムちゃんが取られちゃうー！！

side ラム END

そんなこんなで食堂にて夕食の時間。

今日はロムちゃんとラムちゃんが取ってきたきのこを使ったきのこ鍋だった。

俺の横にはロムちゃんが座っていて、小さな体を一生懸命使って鍋の具を取ってくれている。

「んしょ。これ……と、これ。あと……これ、も」

色々取ってくれているのはうれしいんだけど……。

ラムちゃんからの視線が痛い。

視線で人が殺せるなら即死って感じで。

「……はい、ケイスさん。どうぞ」

そう言いながら色々と盛り込まれた器を渡された。
うん、鍋のお代わりはしなくて済みそうだな。

みんなに鍋が行き渡り、ようやく夕食開始。

「いただきます」

そう言っで、みんなでごはんを食べ始めた。

「うん、おいしいです」

「そうですか。今日はロムちゃんとラムちゃん二人とも手伝ってくれましたからね」

「そうよ。私たちが手伝ったんだから、おいしに決まってるじゃない」

「いっしょうけんめい、お手伝い、した」

「そうか、そりゃおいしいはずだね」

…… おかしい。

ここにいる中で一人だけ会話に参加してこない。

もちろん、ブランさんだ。

さっき、読んでたあの本の知識を生かすのは今ですよ。

そう思い、ブランさんのほうを見てみた。

…… 一心不乱に食べていた。
だめじゃん。

夕食を食べ終えた後、ブランさんが話しかけてきた。

「ケイス。明日、ヒマ？」

「まあ、暇っちゃ暇ですが」

「ちよつと、付き合っで欲しい」

「分かりました」

会話が終わると、ブランさんは立ち上がり、「自室にいるから。用

があつたら来て」と言つて食堂から出て行つた。

……SAVE

第9話 女神と明るい食卓? (後書き)

ケイス「タイトルに偽りがあるが」

いや、しょうがないだろ。こうなっちゃったもんは。

ケイス「やりようはあったんじゃないのか?」

まあね。

本当は、ブランが嬉々として話をしているって話にしようとしたんだが……。

ケイス「したんだが?」

俺の中のブランはそう一筋縄じゃいかなかった。

ケイス「それに、前回の予告にあった「大事件」も削除されてるしさすがに自分の中で、いつもの2倍くらいになりそうだったんで分けた。

ケイス「そういえば、今回新しい武装が出てきたな、言葉だけだが」
うむ。と言うことで、説明行きます。

ギュリーノス

種別：大剣

特徴：基本は金属の剣だが、刃の部分がライトセイバーのようにエネルギーでコーティングされている。

レーヴァテイン

種別：小剣

特徴：炎の剣。ライトセイバーが斬る剣なら、これは溶かして断つ剣。

アルファピストル

種別：ハンドガン

特徴：装填数が多いが威力がアルヴォPDW11には劣る。が、耐久力が高いため別用途で使用することを検討中。

アルヴォPDW11（エネルギー弾モード）

種別：ハンドガン

特徴：威力はアップするが、エネルギーの消費量がぐっと増える。コレを使うのであれば、ライフル銃のほうがはるかに効率的かも知れない。

こんなところか。

ケイス「で、今回出てきた「魔法の杖」って、次回はちゃんと出てくるのか？」

うん、その予定。

ケイス「ってことは俺のパワーアップか」

パワーがアップするか分からないけどね。

ケイス「え」

それでは次回、「大事件発生（仮）」でまたお会いしましょう
ケース「また（仮）」ってつくのな」

第10話 大事件発生（前書き）

ケイスはルウィーの教会で夕食をご馳走になっていた。
そして、その日の宿も提供してもらっていた。
そんな夜のこと。

第10話 大事件発生

side ???

ええと、どこだったかしら

私はそう思いながらとあるダンジョンの中を歩いていた。

たしか、この辺りだと思ったのに。

「どなたか、いらっしゃいませんか？」

私は誰かに向かってそう声をかけた。

だが、通常は誰も答えるはずがない。

先ほどまで存在していたこのモンスターもすべて倒してしまったし。

ま、私がここから出れば復活するんでしょうけど。

「誰じゃ？こんな時間に」

ふと、そんな声がした。

……探し物、ゲット。

「いえ、道に迷ってしまったんですよ、『ゲームキャラ』さん」

「ほう、こんな時間に辛かろう。わしが案内してやりたいのは山々じゃが、如何してもこの地を離れるわけに行かなくてのう」

「いえいえ、良いんですよ。貴方はそこにいれば。」

むしろ、そこから動かないから助かります。

「大丈夫ですよ、もうわかりましたから。だ・か・ら」

そう言って私は得物を振り上げる。

「そこで粉々にしてあげますッ」

そして、振り下ろす。

バキンッ、と音を立ててゲームキャラは割れた。

「……お主、…何者、じゃ？」

ああ、まだ生きてるみたい。しぶといですね。

「…まあ、いいでしょう。私は、『マジエコンヌ』に与るもの、とだけ言っておきます」

言い終わった後、私はゲームキャラだったものを粉碎した。

「さて、これあのキラーマシンの封印を解きました。どう出ますか、ルウィーの女神」

side ??? END

次の日の朝。

まあ、昨日は旅の疲れもあったのか、夕食の後に部屋に案内されそのまま寝てしまっていた。

何回か部屋をノックされたような気はしたが、疲れには勝てず…。

そして、教会のほうに行ったのだが、ミナさんが何やら慌しく動いていた。

「おはようございます、どうしたんですか？」

「ケイスさん、ちょうどいいところに」

そう言つて、ミナさんが駆け寄ってきた。

「実は、『世界中の迷宮』と言うところで、大きなモンスターの発生が確認されて」

「世界中の迷宮？」

「あ、そうでしたね。世界中の迷宮と言うのは、ここから北西にいったところにあるダンジョンです」

「そこでモンスターが発生した、と」

「ええ。すでにブラン様にもお伝えして言ってもらっていますが、念のためケイスさんにも行っていただけたら、と思ひまして」

まあ、モンスターを倒せるのは限られてるからなあ。

「俺でよければ、いくらでも協力させてもらいます」

別に断る理由もないし、それに今日はブランさんと一緒に行動すると約束してたしな。

「ありがとうございます。それで申し訳ないのですが、どのくらいで出発できますか？」

「そうですね、すぐにでも行けますよ」

「それでは、お願いできますか？」

「はい」

そう言つて、俺は教会から出て行こうとした、のだが。

「すいません、何か腹に入れるもの、ありますか？」

……あまりにもカツコ悪かった。

そのあと、ロムちゃんラムちゃんにご飯を用意してもらったのだが、ロムちゃんと帰ってきたら遊ぶ約束を強引に取り付けられた。

だってなあ。「約束しないと朝ごはん抜きです！」って言われて、じゃあいいやと言うと目をウルウルさせて泣きそうになるんだから。

あれは、反則だよ。

そんなこんなで世界中の迷宮。

来たんだが、何か嫌な予感しかしねえ。

だってさ、さつきから機械の駆動音が聞こえてくるんだぜ？

世界中の迷宮と機械の駆動音、って言ったらキラ^{あれ}ーマシンしかない
だろ。

入って見たら、やっぱりだった。

で、ブランさんは苦戦してるわけだ、物理で殴る系だし。

「ケイス、いい所に来たな。あっちのやつらを頼むぜ」

で、「ううおりゃああ」と言いながらキラーマシンの群れに突っ
込んでいった。

ブランさん、やっぱり堅いなあ。

ま、任されたとあっちゃ逃げる訳にゃ行かないっしょ。

「アーンヴァル、レーヴァティンを出してくれ」

「了解です、マスター」

次の瞬間、俺に右手にレーヴァテインが現れた。

それじゃ、行くぞ。

side ????

見たことない人が「キラマシン」と戦ってますね。

かわいそうに。人間には敵うはずが…。

あら。倒されてしまいましたね。

それも、随分あっさり。

ちょっと、興味が湧きました。

「ねえ、貴方」

side ???? END

「ねえ、貴方」

上から、その声が聞こえてきた。

俺が上を向くと、銀髪の少女が空中に佇んでいた。

「誰だ、君は」

少なくとも原作にはこんなキャラは出てきていない。

銀髪で黒いゴスロリ衣装を着ている奴なんて。

「あら、怖い。でもそういう場合は男性から名乗るものではなくて？」

今って、そういう場面でしたっけ。

とりあえず無視を決め込み、キラーマシンを倒すことに専念しよう
と思ったのだが。

「…女性を放っておくなんて、感心しませんわね」

そう言いながら、何か呪文のようなものを唱えはじめた。

そして、その力を解き放つ。

「雷よ、いかすち降れ」

彼女がそう言うと、雷が俺めがけて降り注ぐ。

「アーンヴァル、電磁フィールドを高速展開！」

「了解です！」

アーンヴァルによって電磁フィールドが生成された、が。

「うがあああつ!!」

電磁フィールドを素通りし、そのまま俺に直撃した。

「アーンヴァル、大丈夫か？」

「ど、どうにか、ですが」

そうか、向こうは魔法だった。これじゃ、止められるはずがない。

「あら、あっさり終了ですか？少しは耐えていただかないと」

そう言いながら、第2波を用意しているようだ。

何か、手はないか？

そういえば昨晚、アーンヴァルが言っていたな。

転移の数珠の領域内に魔法の杖があつたつて。
マジックワンド

「アーンヴァル、魔法の杖に武装変更を頼む」
マジックワンド

「え、マスター。魔法が使えるんですか？」

「いや。でも、魔法の杖だつたらどうにかなるかと思つてな」
マジックワンド

そう言つとレーヴァティンが右手から消えた。

「マスター、今先ほどの攻撃であれば私もマスターもあと2、3回が限度です。正直、それ以上は命の保障ができません」

「上等！」

そして、魔法の杖が召還された。
マジックワンド

ん？どこかで見たことあるぞ、これ。

「これは…閃光の杖か！」

そう言った次の瞬間、周りの時が止まった。

「当たり前、か」

「どうやらそのようですね」

「ダイク・ザ・ウィザードか」

「私をご存知でしたか」

この人はダイク。リバーサーという物語で、辺境の大魔道師とまで呼ばれた人だ。

「まあ、ね。それで、貴方も俺に力を貸してくれるのか？」

「ええ、神との契約ですし、それに貴方が面白そうな方だったので」

「面白そう?。」

「ええ。力に溺れず、力を過信せず、あくまで自然に流れているところが」

「アンタ、やっぱりそういうところが『先生』なんだよ」

こうしているうちにも、俺の中にダイクの知識が流れてくる。

この人の外見からは、想像し得ない禁呪もたくさんあるんだなあ。

「さて、これで終わりのようです」

「ああ、ありがとう、先生」

「また会う機会があれば、そのときに色々と話したいものですね」

「はい、そのときには是非」

その言葉に、先生はうなづいてくれた。

それ以降、先生ダイクの声は聞こえなくなった。

そして、また世界に時が戻っていく。

さて、と。

「マスター、反撃の準備はよろしいですか？」

「ああ、もちろん！」

次は止めることができる、はず。

「それでは、こちらから行かせていただきます。雷^{いかすち}よ、穿て」

空中にいる少女から、そのような声が聞こえた。

そして、雷が俺に向かってくる。

「^{ロン・ウォール}
魔力壁」

俺は左手を掲げて、魔法^{ちかひまほう}を唱えた。

次の瞬間、その左手を起点として俺を守る魔力壁が形成される。

これがロン・ウォールだ。

そして、その魔法で雷は止められた。

「なっ……！」

「さて、反撃開始だ」

……SAVE

第10話 大事件発生（後書き）

ケイス「大事件過ぎるんですが」

というか、この事件がやりたいがために女神たちの出撃の1年前からの物語にしたんだから、しょうがない。

ケイス「お前か、お前が黒幕なのか」

どうどう、落ち着け。

俺が黒幕なわけがない。

ケイス「にしても、あのゴスロリ少女は何者だ？」

ああ、彼女の名前くらいだったら次回明らかになるかも。
正体は、まだまだ先。

ケイス「ちなみに、あいつが放った雷は何で電磁フィールドで止められなかったんだ？」

それは、電磁フィールドでは、魔法は止められないから。

ケイス「で、やっと俺がパワーアップしたな！」

うん、やっと魔法を使えるようになったねえ。

とはいえ、あまり多用はしないと思うよ。

ケイス「えー」

基本、君は剣士＋銃士なんだから。

ケイス「まあ、そうだな。今までがそうだったから急に魔道師になれって言われても困るからな」

だから、差し詰め魔法剣士＋魔法銃士ってところか。

とりあえず、今回出てきた人物＋技の説明

人物

銀髪のコスロリ少女

名前は決まっていますが、上で書いたとおり次回でとりあえず、魔法重視の魔道師です。

ダイク・ザ・ウィザード

本編で書いたとおり、リバーサーと言う作品に出てくる主人公の仲間。

かなりの知識人で、今回は魔法以外の知識もケイスに受け継がれています。

ちなみに、持ちネタの禁呪がいくつかありますが、全部命に関わるので封印。

武装

閃光の杖

高速詠唱の補助、詠唱の代替、魔力ブーストが主な機能。

魔力ブーストはケイスの場合、元々の魔力量はそんなに大きくないのですが、魔力量が数十倍に跳ね上がって認識される。そのため、本来の魔力では行使不可能な魔法でも使用することができる。

ただし、閃光の杖を装備している場合に限る。

魔法

ロン・ウォール (Long Wall)

魔力で作成した障壁、と言ったほうがわかりやすいですかね？
基本的に、魔力が介在した攻撃を防ぐことができる。

その強さは魔力量に左右される。

それでは次回、「事件の収拾（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「……突っ込まないぞ」

とりあえず今回、実験的に行間を1行空けてみました。

第11話 事件の收拾（とりあえず）（前書き）

世界中の迷宮でキラーマシンが大量発生。

その收拾を行っていたときに、銀髪の少女から雷撃の攻撃を受ける。

1度目は受けてしまったケースだったが、ダイクの力を吸収したことにより2度目の攻撃は防御成功。

さて、ここからどうなることやら。

第11話 事件の収拾（とりあえず）

反撃開始とは言ったもののどう反撃するか。

俺は悩んでいた。

とりあえず地面にいたのであれば、このまま攻撃してしまえばよい。

だが、今の相手は空中にいる。

だったらどうするか。

……地面に下ろすか。

俺は、閃光の杖を自分の前に掲げた。

side ???

雷撃を防がれた後、下の彼に動きはありません。

一体、どうしたのでしょうか。

そう思ったとき、彼に動きが。

右手に持っている杖を前に掲げて、何か呪文を唱えているのでしょうか？

今が好機のようにですね。

私はキラーマシンに指示を与えた。

あの青年を攻撃しろ、と。

さて、どうされます？

side ??? END

何か、さっきまで動きのなかったキラーマシンが動き始めてるなあ。

「アーンヴァル、すまん。あいつらの攻撃を電磁フィールドで防いでおいてくれ」

「ぜ、全部は無理ですよお（泣）」

だったら。

「一炎熱術式《PSYCHO-FIRE》、LOADED起動」

COMPRESSACKAGEED

「圧縮、外郭作成、一変換《MATEREALIZE》」

呪文を唱えると、俺たちとキラーマシンの間に浮遊する物体が出現した。

「マスター、あれは？」

「いわゆる一浮遊機雷《FLOATING-MINE》、爆弾だ」

「ば、爆弾〜?」

「じゃ、後は頼むぞ?」

「いや、こんな状況で頼まれましても〜」

アーンヴァルが何か泣き言を言っているが、気にしない。

いざとなれば、守れるしな。

さて、と。次はアイツか。

「^{DEAD}重力制御《GRAVITY・CONTROL》、^{MODE・BIND}拘束設定、^{LOA}起動」

^{COMPREHENSIVE}
「圧縮、変換」

呪文を唱えると、俺の目の前に黒い魔力球が出現する。

で、これを。

^{SHOOT}
「発射」

あいつに向けて発射する。

side ????

彼は、聞いた事のない呪文を紡いでいた。

まったく聞き覚えのないタイプの呪文だった。

唱え終わると、彼の前に魔力球が出現し、彼が杖を振るとそれは私のほうへ飛んできた。

「くっ。風よ、我を守れ」

呪文を唱えると、風の結界が私の周りに布かれる。

無駄ですよ。その程度の攻撃では。

side ???? END

ああ、やっぱり止められたか。

そりゃ、防御呪文の1つや2つ持ってるよなあ。

とりあえず、それは想定範囲内、だから。

「一重力制御《GRAVITY-CONTROL》、一圧縮解除《DISCOMPRESS》」

圧縮モードを解除し、その結界ごと拘束する。

黒い魔力が彼女の周り（というかおそらく結界）を包み込む。

包み込んだのを確認し、最後の呪文を唱える。

「拘束、下降」
BINDDOWNSEQUENCE

呪文を唱えると、黒い魔力は中を締め付けながら地面に降りてくる。

さて、ご対面といきますか。

「くっ、何故私がこんなことに」

先ほどまで空中にいた少女がそう言っていた。

ちなみに、まだ拘束は解いてないよ。
BINDING

「で、君は誰？」

「それは、私のセリフです。この国に、貴方のような人はいなかったはず」

勝気な人だねえ。

「えっと、俺が質問してるんだが？」

そう言いながら拘束に魔力を込めていく。
BINDING

「ぐっ。分かり、ました。言いますから、これを解いていただけません？」

「駄目。逃げそうだから」

「くっ」

そう言いつつ、彼女は俺のほうを睨み付けてくる。

だが、観念したのか話し始めた。

「私は、グリ。マジエコンヌに与するものよ」

「マジエコンヌ？」

「ええ、私に何かあればマジエコンヌが黙っていないわよ」

マジエコンヌが黙ってないって。一体、どっちのだろう。

「えーとき、確認。マジエコンヌって、犯罪神？それとも犯罪組織？」

「え？犯罪神？犯罪組織？何ですか、それ？」

「は？」

「だから、マジエコンヌって人が黙ってないっていつてるんです！」

ちよつと待て。

「あのさ、マジエコンヌさんってどういう人？」

「え？電話とかメールとかでしか話したことないですけど」

ちよ、おま。ゲームギョウ界でもゆとり化が進行してるのか？

何でそんな会ったこともない人を信用してるんだよ。

「今回のことは、その人に命令されてやったのか？」

「ええ、そうです」

「何で！」

「一人で生きていくには、そうでもしないと生きていけないんです」

彼女から、色々なことを聞いた。

まず、身寄りだが今は誰もいないらしい。

数年前まではおじいさんとおばあさんと一緒に住んでいたが、今はもう二人とも亡くなってしまったこと。

それから一人でどうにか暮らしていたが、生活費が底をつき始めたため、職を求めてギルドに行ったが、女という理由のみで帰されたこと。

そんな時、ネット上でマジエコンヌと言う人が、能力のあるものを募集していることを知り、それに応募。

それで今に至る、というわけだ。

「少しでも同情できるけど、あまり褒められたものじゃないな」

「はい、すみません」

先ほどまでの彼女はどこへやら。

完全に別人だった。

「まあ、今はそれは置いて、事態の收拾を優先で考えましょう」
俺はそう言つと、ブランさんを探した。

まあ、簡単に見つかりましたけどね。

「ブランさん、ちょっと来てもらっていいですか？」

「あゝ？今戦闘中だ！見てわかんねえのか」

「いや、分かつてるから言ってるんです。それだけの数全部相手にするつもりですか？」

まあ、本編でロムちゃんラムちゃんは2人で相手にしてたけどね。

「…何か策があるのか？」

「ええ、とりあえず」

「わかった。すぐ行くから待ってる」

そう言つと、ブランさんは得物を振り回し出口を作り、こっちに来た。

「で、どうするんだ？」

「逃げます」

「「え？」」

ブランさんとグリさんは声を合わせてそういった。

まあ、そりゃそうなるわなあ。

「とりあえず、彼らを足止めします。お二人は先に出口に言ってください」

そう言くと、俺は先ほどの一浮遊機雷《FLOATING・MIN E》を手元に戻した。

そしてそれを、2グループのキラーマシンへ向かって投げつけた。

それらが地面に落ちたとき、ドゴーンと音が鳴り響き、その後熱風が吹き荒れた。

「……マスター、あんな物を作ったんですか」

アーンヴァルの笑いがすごく乾いていた。

そして、俺はブランさん、グリさんと合流すべく出口へ向かった。

俺が出口に到着すると、二人は待っていてくれた。

「あの、すごい爆発が起こってましたが、あれは？」

「足止め用爆弾ですよ、ただの」

「マスター、足止め用爆弾はあんな火力ではないと思います」

グリさんは冷や汗をかきながら、爆発の起こっていた場所を見ていた。

「さて、それじゃここから出ましょうか」

そう言い、世界中の迷宮から出ることにした。

で、出た後。

「お二人とも、ちょっとだけ待ってください」

そう言って、俺は今出てきた出口のほうを向く。

「何をするの？」

そうブランが聞いてきた。

「この迷宮の時間を止めるんですよ。じゃないと、さっきのキラーマシンが出てきちゃうでしょ？」

「そんなこと、できるんですか？」

「できますよ？」

俺がそう言つと、「私、ケンカを売っちゃいけない人に売っちゃったのかなあ」と涙目になっていた。

とりあえず、聞かなかったことにする。

「一時空間制御《CRONUS・SYSTEM》、ACCESS接続」

「一時空間凍結《FREEZE・MODE》、COMPILEBUILDING構築、実行」

ふう、とりあえずこれでどうにかなるかな？

「さて、終わりました。とりあえず、これから後のことを話しにルウィーに行きましょうか」

そう言つて、俺はルウィーへ歩き始めた

「そ、そうね」「は、はい」

ブランさんとグリさんはそう答えると、俺の後について歩き始めるのだった。

……SAVE

第11話 事件の收拾（とりあえず）（後書き）

ケイス「ちょ。どういう状況だよ、これ」

どれが？

ケイス「全部だよ全部。敵キャラみたいに出てきたグリさんは実はいい人みたいだし、俺は思いつきり魔法使ってるし」

そうだねえ。

まあ、いいんじゃないね？

ケイス「ついでに、魔法が何か普通の魔法と違うし」

うん、けど何やってるか大体分かるっしょ？

ケイス「わかるけどさあ」

魔法は大体こんな使い方になるよ。

こうした方が、使い勝手が良いんで。

さて、それじゃ新しく出てきた人の紹介です。

グリ（GRIS）

銀髪のロングヘアで、服装が黒のゴスロリファッション。

魔法（主に4元素を使役した魔法）が得意な魔道師。

本編では述べられていなかったが、5年以上前の記憶がなく、覚えているのは名前くらいだった。

数年前まで一緒に住んでいたおじいさんとおばあさんも、自分の親戚縁者などではない。

おじいさんとおばあさんは、亡くなった自分たちの孫娘に似ているグリを引き取って暮らしていた。

魔法については、気がついたら使えるようになっていた。（おじいさんやおばあさんが教えたわけではない）

そんな状況のため友達も知り合いも居らず、マジエコンヌ（？）にいいように扱われていた。

グリ「こんな私ですが、よろしくお願いします（ぺこり）」

ケイス「何回聞いても、腹が立つな、これは」

グリ「ひいっ！？謝りますから許してください。本当にごめんなさい（土下座）」

ケイス「いや、君じゃない。この、マジエコンヌ（？）だ。だから、土下座はやめい」

ケイス、……お前何した？

このおびえ方は尋常じゃねーぞ。

ケイス「何もやってない！！」

（あとでグリのフラグ立てとくか）

ケイス「（ゾクッ）何だ、今の寒気は」

それでは次回、「キラーマシン、再度封印」でまたお会いしましょう

第12話 キラーマシン、再度封印（前書き）

迷宮ごと時間を凍結させ、キラーマシンを一時封印したケイス。彼には、キラーマシンを再度封印する手立てがあるのか？さて、これからどうなることやら。

第12話 キラーマシン、再度封印

ルウィーに帰ってる途中なう。

さて、どうしようかなあ。

キラーマシンを封印しないといけないのは当たり前として、どうするか。

まさか、このまま放っておくって手はないよなあ。

「ねえ、ブランさん」

「何？」

「ルウィーに、ゲームキャラってどのくらい残ってる？」

「^{ゼロ}0よ。まったく、何を考えてんだか」

そう言いながらグリさんのほつを睨む。

その睨まれたグリさんといえは…。

「う、ごめんなさいっ！」

俺たちからちよつとはなれて後ろを歩いていた。

あ、今はもう拘束BINDをかけてないよ？

でも、とりあえず「逃げたらどうなるか、分かってるよね?」と言
っておいた。

その後から目を合わせてくれなくなっただが、何でだろ。

「マスター、それは当たり前と言っものです」

ちょ、アーンヴァル。心を読むな。

それはさておき、ホントどうしようかなあ。

ゲームだと、どうだったんだっけ。

確か、ホワイトディスクが
『ネプテューヌに頼まれた』
って言ってたな。

だったら、話は簡単。プラネテューヌと交渉をすれば良い訳だ。

でも、そうするとあとは交渉の材料か。何かあるかなあ。

「何を考えているの?」

ブランさんがそう聞いてきた。

「いや、ゲームキャラをどう手に入れようかと画策中」

「何かいい案があるの?」

「いや、無いんだったら、他の国から貸してもらえば良いと思っ
た」

「宛は？」

「プラネテューヌ？」

「ばっ、お前、それは駄目だ。アタシはネプテューヌに頭を下げる
のは絶対に嫌だからな！」

ブランさんは明らかな拒絶反応を示した。

まあこの二人、水と油だしなあ。

「ですよー」

「だったらステーションとかリーンボックスとかから借りれば」

「交渉の材料はどうします？リーンボックスはまだ良いとして、ラ
ステーションは何か吹っかけてくるような気がしますか？」

「うっ……だったら、リーンボックスから」

「だから、交渉材料をどうするか、って言うてるんです。妹さん、
一人貸し出しますか？あそこは女神様に妹がいないみたいですし」

「それもダメだ！何でロムかラムのどちらかを差し出さなきゃいけ
ないんだ！？それだったら、今のままにすればいいじゃねーか！」

「いや、それはご勘弁くださいな」

「何でだよ！」

「今、こうしてる間も、俺の魔力がガンガン使われてるんですよ。このままじゃ干からびます」

もちろん嘘ですが。

閃光の杖を持つてる限り、このくらいどうにかなる。

「馬鹿野郎！何でそれを早く言わないんだよ」

「や、だってそいう風に心配しちゃうじゃないですか。だから嫌だったんですよ」

side
グリ

うう、何かあの二人の会話がかなりヒートアップしてる。

それに、私が『ゲームキャラ』を壊したことで、何か大変なことになるみたい。

ここは、私が！

「あ、あのお、ちょっとだけいいですか？」

side
グリ
END

「あ、あのお、ちょっといいですか？」

グリさんが、そう話しかけてきた。

どうしたんだろう。

「どうしたんです、グリさん」

「ゲームキャラさんって、蘇らせられないんですか？」

まあ、普通はそう思うだろうなあ。

「俺には無理ですね。グリさんは持つてるんですか？蘇生魔法」

「いえ、持つてない…です」

グリさんがそう言つて落ち込んでしまう。

「大丈夫ですよ、何とかありますって。…多分」

まあ、でも正直俺たちだけじゃ決められない。

とりあえず、ミナさんを巻き込もう。

そう思い、俺たちはルウィーへ向かった。

さて、ルウィーの教会にて。

「ええっ、モンスターってあの伝説に語られているキラーマシンだったんですか!？」

まあ、そうだよね。

それが正しい反応だね。

「それで、この弱そうな人がその封印を解いちゃったの?」

こらこら、ラムちゃん。少しはオブラートに包みなさい。

「それですね、ミナさん。ゲームキャラってもうルウィーにはいないんですよ?」

「そうですね。世界中の迷宮にいたあの方が最後のゲームキャラと聞いています」

うん、ブランさんの話と合うな。

「とすると、ゲームキャラを他の国から借りる、または譲り受けるしかないと思うんですよ」

「そうですね。私も同じ意見です」

「ちなみに、ミナさんだったら、どこの国にはじめに交渉します?」

「そうですね……。私だったら、まずプラネテューヌでしょうか」

「やっぱりそうですね」

まあ、なんだかんだ言って一番交渉しやすいだろうしな。

他の2国に比べて、だけどな。

「お、お前ら……。アタシは絶対にネプテューヌに頭なんか下げないからな」

うんうん、分かってますって。

「でも、どう交渉しましょうか。正直言って、今のルウィーに交渉できる材料なんてないですよ?」

「なら、俺がどうにかして見せますよ。だから、プラネテューヌと通信してもらえませんか?」

最悪、俺が交渉材料になれば良い。

そうすれば、丸く収まるだろ。

そう思っていると、ミナさんとブランさんが一生懸命何かをセッティングしていた。

「それが通信用の機器ですか?」

液晶テレビにマイク、それにビデオカメラ。

小さいテレビ局だな、これは。

「そうよ、今まであまり使ったことがないけど。ほら、ロムにラム、あなたたちも手伝って。それとそこでいじけてる貴方もよ」

そうこうしているうちに、俺を除く4人でセッティングを完了していた。

「さて。それでは、まず私が話をするので、それに続いて話していただいてよろしいですか？」

「ああ、わかった」

さて、一世一代の晴れ舞台、どうなることか。

side イストワール

はあ、平和ですね、最近は。

ネプテューヌさんもネプギアさんも静かになったので、こうして静かに仕事ができます。

そう思っていると、他の国から通信が来たようです。珍しい。

さて、それでは早速この通信を受信しましょうか。

ふふつ。何か良いことがあると良いんですが。

side イストワール END

『はい、こちらプラネテューヌのイストワールです』

おお、いーすんさんだ。

相変わらずちっこいのう。

「お久しぶりです、イストワール様。何年振りでしょうか」

『あら、ミナさんではないですか。お久しぶりです。今日はどうしました？』

「実は、少々お願いがありました。ちょっと変わりますね」

いーすんさんは『はい』と返事をして、こちらを見ていた。

ミナさんというと、俺のほうを向いて、「それじゃ、後はお願いします」と小声でいい、席を空ける。

その空いた席に俺が座り、いーすんさんと対面する形となった。

「お久しぶりです、イストワールさん」

『ケイスさんじゃないですか。お久しぶりですね。元気そうで何よりです』

「はい、イストワールさんもお元気そうです」

『それで、お願いというのはケイスさんからなんですか？』

「ええ。実は…」

と言いかけたそのときだった。

『いーすーん、たっだいまー。あれ？何かお話中？…あーっ！…ケイスさんだー』

間がいいのか悪いのか。

ネプテューヌの登場だった。

「お久しぶり、ネプテューヌさん。お元気そうで何よりですよ」

『うんっ！私は元気だけが取り柄だからねー。で、今日はどうしたの？』

「いや、実はさ」

そのあと、かくかくしかじかで事の顛末を伝える。

『うーん、私としては別にかまわないんだけどね。けど、いーすんが何か見返りが欲しいって言ってるんだよね』

そう言ってる後ろから小さく『私はそんなこと言ってますん！』と聞こえてくる。

『だからね、ネプギアに会ってあげてもらえないかなあ』

「ええ、そのくらいの見返りだったらいくらでも」

『わかった！ちょっとだけ待っててねー』

そう言うと、ネプテューヌは画面から出て行った。

代わりに、いーすんさんが画面に近寄って来て、こう言った。

『ネプギアさん、ケイスさんと別れてから、ずっと剣の練習をしているんですよ、あのときの剣で。だから、褒めてあげてくださいね』

うん、やっぱりネプギアはいい環境で育ってるんだなあ、としみじみ思った。

そうしていると、『お姉ちゃん、私髪乱れてない？』とか『服、汚れてないよね』とか聞き覚えのある声が近づいてくる。

そして、その声があったん途切れる。

そして、バンツと扉が開け放たれ、そこには懐かしい顔があった。

「よっ、ネプギア。久しぶりだな」

『はい、ケイスさん。こちらこそ、お久しぶりです』

「聞いたぞ、一生懸命剣の修行がんばってるって」

『もちろん。ケイスさんに一日でも早く近づくためですからっ！』

「がんばれよ？また会った日を楽しみにしてるからな」

『はいっ。それじゃ、私今からギルドに行ってきますから、これで』

「ああ。またな、ネプギア。気をつけてな」

『ありがとございます。ケイスさんも、体に気をつけてくださいね?』

そう言うのと、ネプギアは画面から出て行ってしまった。

side ロム

今の女の子、誰なんだろう。

「あの、あの娘誰なんですか?」

さっき、ケイスさんが連れてきた女の子の人がミナちゃんにそう聞いていた。

「あれは、プラネテューヌの女神候補生のネプギアさんですよ。それと、その前の人が女神のネプテューヌさんですよ」

ネプギアちゃんって言うんだ。

………注意しないと。

私の中に、ネプギアちゃんは要注意人物として登録された。

side ロム END

side グリ

あー、女神候補生だったんだ、あの子。

それに強そうだし、何しろ『恋するオトメ』の顔をしていた。

それに伴って、何かさっきからロムちゃんが怖いんですけど……。

(; | ;)

side グリ END

『っていうことで、見返りももらっちゃったから、今からゲームキヤラを1人連れて行くよ。数時間だけ待ってて』

数時間後、女神化したネプテューヌが最高速度で飛んできた。

ゲームキヤラを伴って。

「サンキュ、ネプテューヌさん」

「いいわよ、さっきも言っただじゃない。見返りはもらったって」

さて、それじゃ再度封印と行きますか。

「ネプテューヌさんも一緒に来ます？封印に」

「ええ、もちろん。そんな強そうなモンスターと戦うことなんてめったにないことだし」

……やっぱりそっちなか。

女神じゃなくて戦闘狂じゃないのか、本当は。

「足を引つ張らないでね、ネプテューヌ。アタシの邪魔するなら、マッハでぶちのめすわよ」

アンタもですか！

とりあえず、キラーマシンはこの2人の狂戦士バーサーカーに任せて、俺たちはそのキラーマシンの封印を行ったのだった。

「戦い足りないー」

「…右に同じ」

「やかましいわっ！」

「ゲームキャラさん、本当に申し訳ありません。このようなことを今回お願いしてしまって」

「いいですよ、ルウイーの教祖。わたしたちの力は、このような時のためにあるのですから」

あのバーサーカー達がいなければ、もったいい場面だったのに。

そう思いながら、俺達はルウィーの教会へ帰っていった。

……SAVE

第12話 キラーマシン、再度封印（後書き）

祝！ファルコムさん、ケイブさん配信記念！

ケイス「いや、意味が分からないから」

本当はファルコムさん配信までにこの本編にファルコムさんを出したかったんだけどなあ。

ケイス「まあ、でも出しちゃいけないってわけでもなし」

モチロンですよ！

さて、今回ですが。

ケイス「無理やりだったなあ、本当。いつも以上に」

うるせい。

ケイス「でも、久々にネプギアに会えたから、ほっこりできたよ」

そうだねえ、何話ぶりだろうか。ちなみに、プラネテューヌから旅立って1ヶ月くらいって設定でよろしく。

ケイス「ただ、ロムちゃんがずっと不機嫌だったんだけど。何かあったのか？」

…知らないほうが身のためだと思うよ。

ケイス「ま、どうにかキラーマシンを封印できたからいいか」

お前もお気楽だのう。

ケイス「それで、次はどうなるんだ？」

まあ、やることやりましたから、次回でルウィー編は最後。あ、もちろん本編開始前って意味でね。

ケイス「ってことは、また旅立ちか。結局、ラムちゃんとは仲良くなれなかったなあ」

なりたかったのか？

ケイス「ま、嫌われてるよりかはいいだろ？」

……（三角関係がお望み、と。あ、四角関係か？ネプギアも入れると）

ということだ。

それでは次回、「旅発つ者と残る者」でまたお会いしましょう

第13話 旅発つ者と残る者（前書き）

ネプテューヌの協力により、キラーマシンを再度封印することができた。

そして、ケイスは平和になったルウィーを見て回ることにした。さて、これからどうなることやら。

第13話 旅発つ者と残る者

「それじゃ、私はこれで帰るわね」

ネプテューヌはそう言って、ルウィーの教会を後にしようとしていた。

「ネプテューヌ、サンキュな」

「別に、いいのよ。私はルウィーに貸しが作れただけでも満足しているんだから」

そう言いながら、クスリと笑う。

「やっぱりそういうこと、か。だから、私は反対したのに」

ブランさんは呆れたような、諦めたような微妙なかおでそんなことを言っていた。

「冗談よ、ブラン。このくらい言わせて欲しいわね」

まったく、この二人ときたら、仲がいいんだか悪いんだか。

「さあ、早く帰ったら？妹さんが心配してるわよ？」

そう言いながら、ブランさんはニヤツと笑う。
まるで、さっきのお返しだと言わんばかりに。

「そうね、ブランにも早く帰れて言われてしまったし」

ネプテューヌは心なしかシュンとした感じでそう言った。

「いや、あの、誰も本気で帰れなんて、そんな…」

ブランさんはあたふたしながら何か言おうとしているが。

傍から見ると…。

「冗談よ」

…遊ばれてるようにしか見えないのは何でだろう。

「てめっ、ネプテューヌ！早く帰りやがれ、このバカが」

「あははっ、やっとブランらしくなった。それじゃ本当に、じゃあね」

ネプテューヌはそう言うと、協会から出て行った。

そして、教会の中は沈黙に包まれた。

「あははっ、お姉ちゃんとプラネテューヌの女神の掛け合い、面白かったね、ロムちゃん」

「…そうだね、ラムちゃん」

…かのように見えた。

さて、俺もそろそろ次の国に行く時期かな。

キラーマシンの封印もできたし、あとは時間がどうにかしてくれるだろう。

「さて、それじゃそろそろ俺も行こうかね」

「…ケイスさん、どこに行くの？近くのお店だったら、私も一緒に行きたい…」

「ロムちゃんが行くならわたしも。何か買ってくれるんでしょう？ケイス」

ロムちゃんとラムちゃんは、俺がどこかに買い物に行くものだと思うてるみたいだ。

「違うよ、ロムちゃん、ラムちゃん。俺もそろそろ、また旅に戻るのかな、って思ってた」

そう言うと、ラムちゃんは「なーんだ、つまんない」と言って、ミナさんのほうに行ってしまった。

一方ロムちゃんは、「えっ？」と言って俺の顔をずっと見ていた。

「ケイスさん、…あのネプギアちゃんって女の子の所に行くの？」

何故そこでネプギアが出てくる。

「違うよ、ロムちゃん。俺は、ラステイションに行こうと思ってるんだ」

「ラステイション？…何をしに行くの？」

「別に、何をしに行くってわけじゃないんだ。俺は冒険者だからね。いろんなものを見たいだけなのかもしれないけど」

「…だったら、ケイスさんのお別れ会…したい。いい？…ミナちゃん」

そう言ってミナさんのほうを見た。

ミナさんは困った顔で「いいですよ、ロムちゃん」と答えた。

「…うん、それじゃ準備…する。お姉ちゃん、ラムちゃん、ミナちゃん、…手伝って」

「しょうがないなあ。ロムちゃんの頼みじゃ断れないからね」

「うん、しょうがない。私もロムの頼み聞いてあげたいから」

「だったら、善は急げ、ですな」

そして、4人は俺のお別れ会の準備をするために、教会から出て行った。

いや、正確には、

「ケイスさん、グリさん。お二人はどこかで時間をつぶしていただけますか？夕方くらいに教会（教会）に戻ってきていただければ良いですから」

ミナさんはそう言ってから出て行った。

俺、OKしてないのに。くすん。

「さて、どうしましょうか」

おれはグリさんにそう話しかけた。

するとグリさんは、「ちょうどいいです」と言って、俺の手を引いて喫茶店に入っていた。
何でも、相談があるらしい。

「で、何の相談ですか？」

俺は注文してから10分ほど待たされて出てきた珈琲を啜りながらそう聞いた。

お、これ美味え。

「あの、私も連れて行ってもらえませんか？」

「え？どうしてまた」

「私は、前にお話したとおり、身寄りがもつないんです。だから、連れて行ってもらえないかなあ、って」

あ、そういえばそうでしたねえ。
すっかり忘れてました。

「ダメです」

俺は即答した。

「何ですか！」

「グリさん、貴女にはやらなくてはいけないことがあるはずですよ」

「やらなくてはならないこと、ですか？」

俺は「ええ」と答えながらまた珈琲を啜る。

「今回、ルウィーをこんな状況に陥れたのはどこのどなたですか？」

グリさんは「うっ」とうめき声をあげた。
結構、気にしていたようだ。

「貴女には、この状況を見守る義務があると思います」

「確かに、そうですね」

「それと、もうひとつやって欲しいことがあります」

「何でしょう」

「女神候補生……ロムちゃん、ラムちゃんに魔法を教えてあげてもらいたいんです」

「魔法を、ですか？」

グリさんは「女神様には、不要だと思いますが」と続けた。
まあ、普通はそう思うよな。

「いざと言うときの保険ですよ。現在の女神様たちは魔法がほとんど使えないと見て間違いないようですから。それに」

「それに？」

「あの2人は、本から得た知識で魔法を行使しています。そんなものより、生の情報まほうのほうまほうが断然いいと思いませんか？」

「確かにその通りだと思います。でも、私に教えられるでしょうか？」

「大丈夫ですよ、グリさんは優しいですから」

「はい、ケイスさんがそう言うなら、私やってみます！」

そう答えたグリさんの顔は笑顔だった。

まじめな話が終わった後、俺とグリさんは他愛のない話をしていた。

俺からは、プラネテューヌで経験した話やプラネテューヌからルウィーへ旅したときの話、あとはロムちゃんラムちゃんに初めて会った時の話。

グリさんからは、おじいさんやおばあさんが生きていた頃の話やその後俺達に合うまでの話を聞かせてもらった。

俺が一番驚いたのは、グリさんがメドロアを使えることだった。

アレ、使える人いたんだ。

話しているうちに夕方になってしまったので、教会に戻ることにした。

教会に戻ると、すでにパーティーが始められる状態となっており、俺達はすぐにパーティーを開始した。

ブランさんの開会の挨拶から始まって、今は雑談中…のはずなんだが。

誰だ。酒を入れたのは。

「いつもニコニコあなたの隣に這いよる混沌、ニャルラトホテプでっすー！」

「ブラン様。何言っちゃってるんですか！」

「なあ、ラスティションのユニを連れてきた方がいいか？」

「……それは、いろんな意味でダメです」

「世の中の、ニートではない人間のほとんどは、人間の資質がスカラーではなくベクトルであるということを理解できないのだね」

「ロムちゃんが…、ロムちゃんが饒舌にしゃべってる！しかも難しいことを」

「何か、いい具合に混沌カオスだな」

「…………おー←…………」

「今度は壊れたっ！？Σ(□」

色々としつちやかめつちやかだったが、パーティーが終わった。

まあ、ブランさんもロムちゃんも何も覚えていないと言っのが幸いか。

「あ、みんな、ちょっとだけいいかな？」

俺はそう言い、みんなの顔を見渡した。

「俺さ、今までこんなことやってもらったことなかったんだ。本当にありがとな」

そう言って、頭を下げた。

この世界に来る前から、いろんな出会いや別れをしてきたけど、こんなに別れが惜しくなるのは初めてだった。

「そうよ、感謝しなさいよ。女神様じきじきにやってあげたんだから」

ラムちゃんがそう言っくと、ミナさんが後ろからコツンと頭を叩いた。

ラムちゃんは「いたーい」と言いながらその場で頭を押さえた。

そんなラムちゃんに視線を合わせるように俺は立てひざで座り、頭を撫でながら「ありがとね、ラムちゃん」と言った。

そんな俺達を「……むー」と言いながらロムちゃんが見ていることに俺は気づかなかった。

ラムちゃんは、はじめは気持ちよさそうにしていたのだが、ツミナさんやブランさんがニコニコしながら見ているのに気づくと「はっ」となり俺の手を払いのけた。

「なれなれしくしないでよっ」

そう言つと、教会から出て行ってしまった。

…いい空気だったのになあ。

パーティーが終わったあと、ブランさんとロムちゃん、ラムちゃんは自分の部屋に帰っていき、教会には俺とグリさんとミナさんが残された。

「そうだ、ミナさん。ちょっとまじめなお話が」

「どうしたんです？」

「グリさんの話です。実は……」

と言って、昼間にグリさんと2人で話していたことを話してみた。

「そうですね。正直言わせてもらつと、教会にはそれほど欲しいとは思いません」

「そうですか……」

「ですが、必要だとは思いますが。ですから……ルウィーでギルドメ
ンバーになる気はありませんか？」

「私、一度断られているんですよ？」

「それに関しては大丈夫です。ギルドには私のほうから、推薦状を
出します。そして、ギルドのお仕事の合間にでもロムちゃんとラム
ちゃんに、魔法を教えに来ていただければ。それではダメですか？」

「いえ、私には充分すぎるほどです。その依頼、お受けします」

「お礼を言うのはこちらのほうですよ」

そう言つて、ミナさんは右手をグリさんのほうに差し出した。

「これからよろしく願いしますね、グリさん」

「こちらこそ、よろしくお願いします。ミナさん」

「さて、それではもう遅いですから、お二人とももう寝たほうが
いいと思いますよ。お二人とも、昨日のお部屋を使えるようにしてあ
るので、そこを使つてください。」

そついわれたため、俺達は昨日使わせてもらつた部屋へ向かった。

そして、俺の部屋の前に来たとき、2人の人影が見えた。

「あらあら、ケイスさんモテモテですね」

部屋の前にいたのはロムちゃんとラムちゃんだった。

「それじゃ、私も自分の部屋に行きますね。おやすみなさい」

そう言つて、早足で自分の部屋に向かっていった。

さて、俺にどうしろと。

「……ケイスさん、一緒に寝ていい？」

「わたしはロムちゃんがあんたと一緒に寝たいって言つてたから一緒に着ただけなんだからね！カン違いしないでよ」

ロムちゃんの上目遣い＋ウルウルに勝てるわけもなく、陥落しましたよ、ええ。

結果的に、「小」の字になって寝ました。

そして二人ともが俺に抱きついてきて、「あったかい……」と言う始末。

二人とも子供と言うこともあり、すぐに寝てくれた。

ただ、二人ともが寝言で「行っちゃやだ」と言つて俺の服を握つてきたのは印象的だった。

思わず、二人の頭を撫でしまうほどに。

その後「えへへっ」と笑つてくれた時は、思わず「ズキン」と心が痛んだ。

朝。

俺はロムちゃんとラムちゃんを起こし、下へ向かう。

そこでは、ミナさんが朝食の用意をしていた。

「ミナさん、おはようございます」

「おはようございます、ケイスさん。それにロムちゃんもラムちゃんも」

「おはよー、ミナちゃん」

「ミナちゃん、……おはよ」

「さあ、冷めちゃいますから早く召し上がれ」

ルウィー最後の食事、ともなると感慨深いものになるなあ。

「それと、ケイスさん。グリさんから伝言です。今度ルウィーに来たときに、また戦闘おはなししましょう、だそうですよ」

「そうですか。じゃあ、こう返しておいてください。望むところで、と」

ミナさんは「お二人とも不器用ですねー」と言って笑う。
どういう意味だ？

そして、朝食をお食べ終わり、俺は自分の荷物をまとめていた。
そしてこの数日間世話になった部屋に挨拶をして教会に向かう。
教会では、ミナさんとブランさん、ロムちゃん、ラムちゃんが待つ

ていた。

「ありがとう、ケイス。また会いましょう」

「ケイスさん、本当にお世話になり、ありがとうございました。近くに着たら、また寄ってくださいね」

「ケイス、アンタが強いつてのは認めてあげる。けど、わたしはもっと強くなって見せるんだから。そうしたら、アンタのこともわたしが守ってあげるわよ」

「ケイスさん、……ばいばい（ウルウル）」

「うん。みんな、ありがとう。この濃厚だった数日、絶対に忘れないから。それじゃ、またな！」

そして、俺は教会から出て一歩、また一歩と足を進め始めた。さて、次の目的地は、ラストেশヨンだ！

……SAVE

第13話 旅発つ者と残る者（後書き）

やっちまったぜ。

ケイス「中の人ネタのことか？」

うん、そう。

ケイス「でも、これって分からない人が見たら意味不明だよな」

まあ、そうだな。

その場合は、その部分だけ消す？

消しても問題ないようにはしてあるし。

ケイス「まあ、誹謗中傷があったらね。今のところなさそうだから安心してるけど」

ということで、ルウィー編終了です。

ケイス「ってことは、次回からラスティションか？」

まあ、ラスティションって言えばラスティションだな。
けど、まだノワールやユニは出ない。

ケイス「どういう意味だそりゃ」

ということだ。

それでは次回、「空から何かが落ちてきた」でまたお会いしましょう

ケイス「おい、何が落ちて来るんだよ！」

幕間 設定のまとめ〜ルウィー編〜（前書き）

ルウィー編が終了したので、ここまでの設定のまとめをしておきます。

幕間 設定のまとめ〜ルウィー編〜

オリジナルキャラ

ケース

現実世界から転生したこの小説の主人公。

基本的に感性のままに行動する。

現在、剣士、銃士、魔道師の力を駆使して戦闘を行う。

剣士としての力

片手剣、両手剣どちらも自在に扱える。

また、棒術についてもそれなりに使えるらしい

銃士としての力

軽火器から重火器まで扱うことができる。

ただし、重火器の場合移動に支障が出るためあまり多用していない。
これまでの傾向より、まず軽火器で牽制してから突っ込むという戦法を多用する。

魔道師としての力

アイテム創造から空間掌握、時間停止など、多岐にわたる。

ただし無詠唱で使用できるものは限られており、その筆頭が魔力^{LONG・W}
壁^{ALL}である。

使用する呪文は、コンピュータのプログラムに近い。

また、魔術師の力を行使する際に便利な閃光の杖だが、彼自身が剣士として戦うことも多いため、左手首にブレスレットとして身に付けるという方法をとっている。

アーンヴァル

ケイスの中にある剣士の力によって生み出された存在。

彼女自身、自分が何者なのかは理解している。

彼女の中に武装神姫としての知識もあり、装備の解析については問題ない。

また、ケイスの持つ転移の数珠の力を使用することにより、異空間からの武装の取り出しを行うことができる。

だが、基本的に彼女は自分ではその武装を使用することができないため、自分から行動を起こすことは少ない。

グリ

ケイスたちがルウィーで出会った少女。

まあ、少女とはいえ外見年齢は16〜20歳程度なのだが。

某魔法少女も118歳時の物語も「少女」で通していたため…（以下、脱線のため削除）

現在はルウィーにて贖罪行動中。

主に、ゲームキャラの保護、ルウィーの女神候補生姉妹に魔法を教えると言ったことを行っている。

後者については、対象である姉妹が気配なため、あまり進まないようだ。

彼女の魔法は基本的に4大元素を扱う魔法が多い。

火、雷、風、水、氷、土

（雷は風に、氷は水に含まれる）

特殊記述として、彼女には6年以上前の記憶が存在しない。

本人もすでに気にはしていないため、「別に思い出さなくてもいいか」程度の認識。

ケースの使用する武器

近接戦専用

M4ライトセイバー

M8ライトセイバー

剣の部分がエネルギーで構成されている小剣。

M4、M8はエネルギーの消費量の差を示している。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバーを2つ上下に取り付けたダブルブレード。

多数の敵がいる場所に切り込むのに重宝するが、今のところ使用された実績なし。

ギョリーノス

刃の部分がエネルギーで構成されている大剣。
使用実績なし。

レーヴァテイン

剣の部分が炎を模した何かで構成されている小剣。
鉄などの金属であれば、溶かし斬ることが可能。
持っただけでも、別段熱くない。

近・中距離

アルヴオPDW11

普通のハンドガン。通常モードでは通常弾（火薬弾丸）で攻撃するが、エネルギーモードの場合はエネルギー弾を使用する。エネルギーモードの使用実績はないが、それなりに使いやすいハンドガン

アルファピストル

ピストルと名がついている通り、あまり大きくない。ケイスはこれを魔力弾を使用するための銃に魔改造済。そのうち本編に出てくるかも

遠距離

LC5レーザーライフル

今のところ、野良ドラゴン掃討のために1回だけ使用された武装。基本的にケイスが近距離専門なため、あまり出番がない。かつ、エネルギーチャージに時間がかかるため、というのも理由のようだ

幕間 設定のまとめ〜ルウィー編〜（後書き）

とりあえず、ルウィー編が終わりのため、まとめてみましたが…あまり変わっていませんねえ。

ケイス「変わったのはグリさんくらいか」

そうだね。でも、彼女も一応重要な役をしてもらっ予定。

あと、ちなみに地味に閃光の杖をフォームチェンジさせてある。こっちのほうを書きやすいかな、と思って。

ケイス「そうだな。いちいち出して呪文を唱えてゝってのはアレだしな」

ええ、アレです。

と言っことで、今回は短いですがここまで。

第14話 空から少女が落ちてきた（前書き）

予告と題名を変えました

ルウィーから旅立ったケイス。

彼らはルウィーとラスティシヨンの国境に差し掛かっていた。
さて、これからどうなることやら。

第14話 空から少女が落ちてきた

俺ことケイスは、今ルウィーからラスティションに至る街道を歩いている。

すでに、ルウィーを出発してから4日が経過した。

目にする景色も、一面の雪から緑に変わりつつあった。

そろそろ、ラスティションの土地が近いようだ。

「アーンヴァル、そろそろラスティションに入るみたいだ」

「あ、やつとですか。ラスティションに入ったら、私の武装を作ってくれるんですね？」

「ま、作れるやつがいたらな」

そう言っておれは歩を進めた。

…そんな時だった。

「マスター、上から何か来ます！」

上から？

上から何が来るんだ？

「マスター、どうやら人間が落ちてきているようです」

人間！？

「アーンヴァル、その人間の落下予測位置を教えてください」

「はい、南に10メートルほど先がそのポイントとなります」

「予測到達時間は？」

「はい、あと30秒ほどです」

ちいつ、そんなに時間がないか。

そう思い、俺は魔法の準備をする。

GRAVITYMTPROASSISTMODE LOADED
「重力制御、補助設定、起動」

FLOAASSISTSTRAPIBREALIZE
「浮遊補助、高速変換」

そこまで唱えて、その落ちてくる人を目視確認する。

…見えたっ！

RUNNING
「実行！」

そう言っただけ俺は力を解き放つ。

次の瞬間、落ちてきた人の落下速度は遅くなったため、俺は両腕で

受け止めることができた。

「ふう、危機一髪だったな」

まったく、俺がここにいなかったらどうなってたんだよ。

そう思いながらその落ちてきた人の顔を見たのだが…俺は固まってしまった。

「ま、まさか、ファルコムさん？」

ファルコム。

ゲームギョウ界をドラゴンスレイヤー1振りで冒険している冒険者…のはず。

それが何で、空から落ちてきたんだ？

そんなことを考えていたら、ファルコムさんが「うう…ん」というて目を覚ました

「あ、気がつきました？」

「ああ、うん。って私は気を失っていたの？」

「まあ、そうですね。さすがに空から人が落ちてくるとは思っていないんですけどが」

「空から?……あ」

ファルコムさんは、何か思い当たる節があったようだった。

「危なかったですよ、もう少しで地面に激突でしたから」

「あははは、私はいろんなものに守られてるみたいだからね。そんな簡単には死なないのさ」

突っ込んでいいのかなあ。「そういう人は、空から落ちてきません」
って。

「ありがとう、私はファルコム。見ての通り、しがない冒険家さ」

「俺はケイスと言います。貴女と同じように冒険者をやっています」

「へえ、冒険者か。私と同じような人がいてくれて、うれしいよ」

「俺も同じですよ、ファルコムさん」

まあ、冒険者（正確には片方は冒険家だが）同士だから、打ち解けるのも早かった。

「そういえば、何で空から落ちてきたんですか？」

「実は、このはるか上空に、イクスという島が浮かんでるんだ」

俺は、咄嗟のことに「え?」としか答えられなかった。

そんなことを言っているのがファルコムさんじゃなかったら、信じ

ていないだろう。

少しか沈黙が流れた後、俺は会話を再開した。

「それで、そのイクスって島はどんなところだったんですか？」

「信じてくれるのかい？」

「ええ、もちろん。俺だっ行ってみたいですしね、そのイクスという島に」

「君は面白い人だね。こんな与太話を信じるなんて」

「与太話なんですか？」「まさか！」

ファルコムさんによると、地上ではその島はイクスと呼ばれているとのこと。行ったことがある人がいないため、「X」^{イクス}と名付けられたいらしい。

そして、ファルコムさんはある塔に登り、最上階にたどり着いたときに光に包まれ、気がついたらその「イクス」にいた、と言うことだった。

そしてその「イクス」に住む人たちに、その島の本当の名前は「アージェン」だと言うことを教えてもらった、と。

そして、その島を冒険中にモンスターに襲われ、島から落とされ、地上に落ちてしまったと言うことだった。

「まあ、信じるも信じないも君次第だけど」

俺の頭に、ひとつの事柄が浮かんた。

それは……ネタ元はイース、ということ。

「そうですね。信じますよ、俺は」

「本当に？」

「ええ。だって、そっちのほう面白いじゃないですか！」

そう言つて、サムズアップした。

「うん、違うない」

「それじゃ、今度は俺が今回の冒険で経験したことを話してもいいですか？」

「ああ、他の人の話つてあまり聞かないからなあ」

そう言つて、耳を傾けてくれた。

そして俺は、プラネテューヌで女神のネプテューヌと共闘したこと、ルウィーで古の戦闘機械いにしえ、キラーマシンと戦ったことを話した。

「そんなに強かったのかい？そのキラーマシンってのは」

「強い、なんてモンじゃないですよ。そんなのが数十体ですよ」

「あははっ。それは災難だったねえ」

俺は「笑い事じゃないですよ！」と言い、話を続けた。

「まあ、どうにか封印できたからよかったですよ」

「ふうん。君も、面白い経験をしてるんだねえ」

「まあ、ファルコムさんほどじゃないですけどね」

「ちなみにさ、今の話って本にしても大丈夫かな？あ、私実は本を書いててさ」

「そうなんですか？」

俺はそう答える。

もちろん知ってるさ。

クリスティン漂流記はブランさんに読ませてもらったからな。

「うん、それで、今聞いた話を書かせてもらえないかなあって」

「いいですよ、別に」

ファルコムさんは「ホント？」とうれしそうに言っていた。
でも、俺の冒険が小説でかかれるなんて、何かむず痒いな。

そんなこんなで色々な話をしたあと。

「さて、それじゃ、名残惜しいけどここでお別れかな」

ファルコムさんはそう言っつて、荷物をまとめ始めた。

と言うか、バッグに入っていたものを元に戻したただけだな。

「ファルコムさん、どこかに行く予定が？」

「うーん、もう一度あの島に行きたいけど、塔に登りたくないからなあ」

……ダームの塔？

「俺は、ラステイションに向かっている途中なんですよ。よかつたら、一緒に行きませんか？」

そんな俺の誘いにファルコムさんは「いや、私はいいよ」と答えた。結構期待してたんだけどな。

「私は、一度実家に帰るよ。いいタイミングだし」

「実家つて、どこなんですか？」

「プラネテューヌだよ」

「へえ、そうなんですか。俺も今の旅が終わったら、またプラネテューヌに行く予定なんで、もしかしたら会えるかもしれませんね」

「そうだね。そのためのために、また新しい冒険をしないと」

俺は、「それじゃ、会えないじゃないですか!」と言ってツッコんだ。

その後、二人して「あははっ」と笑った。

二人で笑いあった後、ファルコムさんが「そういえば…」と言って鞆をまさぐりだした。

そして、何かを見つけると、それを俺のほうに差し出してきた。

「これさ、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からないんだけど、あげるよ」

そう言っで、俺にそれを渡してきた。

それを受け取ったとき、アーンヴァルが胸ポケットから出てきて「マスター。これ、ラファールですよ」と言った。

…お前、今まで出てきてないのに、何やってんだよ。
ん？ラファール？

「…ラファールだっで!？」

「気に入ってくれたみたいだね」

「え、ええ」

ファルコムさんはアーンヴァルを指差し、「ちなみに、そちらは？」と聞いてきた。

「コイツは、アーンヴァルっていいます。サポートをしてもらっている俺の仲間です」

ファルコムさんは「へえ…」と言って、アーンヴァルを見ていた。一方のアーンヴァルは、居心地が悪そうにその視線に耐えていた。

「うん、君の仲間のことだからとやかくは言わないよ」

「さて、それじゃお別れだ」

「はい、ファルコムさん、お元気で」

「そっちもね。機会があったら、また会おう」

そう言って、俺達は別れた。

side ファルコム

ふむ、面白い人もいたもんだ。

色々な経験をしていることもそうだけど、ああいったものを仲間として連れているとはね。

それに、また会いそうな予感がするから、そのときまでに私もまた面白い話ができるよう、冒険をしておこう。

そう思い、家路を急いだ。

s i d e フアルコム E N D

…… S A V E

第14話 空から少女が落ちてきた（後書き）

とりあえず、はじめに今回出てきたアイテムの説明をしておきます。
ラファール

武装神姫のアーンヴァルの武装をすべて合体させた飛行形態のマシン、と言えば分かりますかね？

ちなみに大きさは、アーンヴァルの大きさと同じため15〜20cm位です。

（あくまで、アーンヴァル用の武装ですの）

さて、と言うことでファルコムさん登場です。

ケイス「まだ、仲間にはならないんだ」

うん、でも再会のフラグは立てておいたよ？

ケイス「だけど、俺がアーンヴァルを持っているのを見て、どう思ったんだろうなあ」

反応を見る限り、『この変態！』とかではなさそうだけど。

ケイス「もしそれだったら、死んでも死に切れん」

と言うことで、今回はやっとラスティションです。

ケイス「ノワールとユニにやっと会える。ここまで長かった…」

そつえば君、この黒の姉妹好きだったね。

ケイス「黒の姉妹言っな」

ということだ。

それでは次回、「黒の女神」でまたお会いしましょう

ケイス「ちなみに、ラストイションでは中の人ネタ禁止だからな」

えー。

第15話 黒の女神（前書き）

空から落ちてきた少女、ファルコムと別れラストেশヨンを目指す
ケイスとアーンヴァル。

彼らはラストেশヨンを目指し旅を続けていた。
さて、これからどうなることやら。

第15話 黒の女神

うーむ、わからん。

この間ファルコムさんからもらったラファールなんだが、何故か動かない。

アーンヴァルに言わせると、「ちゃんと反応は返ってくるんですけどね」とのこと。

反応は返ってくるのに、動いてくれない。

ファルコムさんにこのラファールをもらった当初は、アーンヴァルが「これで私も戦闘に参加できます!」といったはしゃいでいたのに。

何で動かないんだろうなあ。

「なあ、アーンヴァル」

「…なんですか、マスター」

「そう落ち込むな。そのうち、ちゃんと動くようになるさ」

「…私は落ち込んでなんていません。では、いつ動いてくれるんでしょうか、ラファールは」

ああ。もう取り付く島もない。
何でこうなっちまったんだろう。

side アーンヴァル

マスター、本当に申し訳ありません。

私はこんなことが言いたいわけではないのに。

何故か、口を開けばマスターを貶すかのような言葉が出てきてしま
う。

私は一体、どうしてしまったのでしょうか。

あ…れ？段々と…から…だ、が、う………………

side アーンヴァル END

さつきから、アーンヴァルの様子がおかしい。

今まで、あんなことを言ったことなんてないのに。

まさか、精神的ストレス？

…まあ、普通に考えてそんなことあるわけがない…とも言い切れな
いなあ。

「おい、アーンヴァル。機嫌直して出て来いよ」

俺がそう言っても彼女は無反応。

ま、そのうちひょっこり顔を出すだろ。

side アーンヴァル

気がつくと、私は真っ暗な空間にいた。

『ようこそいらっしやいました、マシンドール機械人形』

「誰!？」

聞いたことのない声。

だけど、すごい懐かしい気がする。

『懐かしい、ですか？私達は初めて会うのですけど』

「え!？何で私が考えていることが分かるの!？」

『私はこの空間そのもの。ですから、手に取るように分かりますよ、あなたが感じている恐怖感も、何もかも』

空間そのもの？意味不明。

私は、思考を巡らすのもバカバカしくなり、少しだけ冷静になってみる。

「…で、あなたは誰なの？」

『あら、瞬時に冷静になってしまわれた。やはり面白みがないです

ね、あなた方機械人形^{マシンドール}は」

「誰なのか、…と聞いているのですけど？」

私は少しだけ怒気を含めて言ってみる。

『あら、怖い。私は…』

声の主はそこまで言うと、急に声を発さなくなった。

その代わり、私の目の前にある意味見慣れたモノが姿を現した。それは、あのラファールだった。

『お分かりですか？』

「何で、貴女が意思を持っているの？」

『そのようなことを、私に聞かれましたも。判るわけがないじゃないですか』

彼女（と聞いていいかは定かではないが）は、そう飄々と答えた。まあ、もちろん聞けるとは思っていない。

「それで、私にどうしろと言いたいの？ 貴女が私に成り代わるの？」

『それはそれで魅力的な提案ですが、違います』

「だったら、何？」

『貴女に、わたしの力を受け取っていただきます』

side アーンヴァル END

さて、そろそろラステーションか。

ノワちゃんとかユニちゃんを生で見られるんだ。

うん、この世界に来てよかった。

…とその前に。

「アーンヴァル、ラステーションに着いたぞー」

俺は、アーンヴァルにそう呼びかけてみる。

…無反応。

なぜ？

不思議に思い、胸のポケットに手を突っ込んで、アーンヴァルを出そうとしてみる。

あら？また無反応？

いつもだったら、「いきなり手を突っ込むなんて、何てデリカシーのない…」とか言っただけ怒るはずなのに。

そして、出してみたのだが…。

「スリープモード？」

目が単色の状態となっており、焦点が合っていない状態だった。いままで、こんなことになっていることはなかったのだが…。

side アーンヴァル

「あなたの、力？」

『はい、私の力です』

「拒否権は？」

『すみません。もう形振り構ってられないんです』

そう言つて、ラファールが私の方へ向かってきた。
私にぶつかる寸前、彼女は

「二度とあんな悲劇が繰り返さないよう、力を貸してください」と
だけ言つた。

そして彼女が私の中に入り始めた瞬間、理解した。
彼女の力、そして、私のこれからの戦い方。

『本当に、無理矢理で申し訳ありません』と彼女は詫びた。
そして、『私はすぐに消えますから』とも言つていた。

「何で、私なんですか？」

『貴女が、一番波長が私に近かったから』

「私が悪用するとかは、考えなかったんですか？」

『マシンドール
機械人形にそんな器用な真似はできないと考えました』

「どついうことですか？」

『貴女のマスターは、そんなことができる方ではないでしょう?』

ま、そうですね。

私のマスターに限って、この力を悪用するとかは考え付かないでしょうしね。

「信用、してくれているんですね」

『違います』

「え、それじゃ何で?」

『信用ではなく、信頼です』

その言葉を最後に、彼女は言葉を発さなくなった。

おそらく、先ほど言ったとおり、消えてしまったのだろう。

そして、辺りが眩い光に覆われ始めた。

目覚めの時間、ですね。色々な意味で。

私は、その光に身を委ねた。

side アーンヴァル END

「おい、アーンヴァル。どうしたんだよ」

「……」

「返事しろよ。おい、どうしちゃったんだよ！」

アーンヴァルに声をかけても反応がない。

それに、一緒に入れておいたラファールもなくなっていた。

もしかして、あのラファールって呪いのアイテムだったんじゃないだろうなあ。

もしそうだったら恨むぜ、ファルコムさん。

俺は自分から進んで貰ったのに人のせいにしようとしていた。

「ふああ。。。あ、マスター、おはようございます。どうされたんですか？」

「アーンヴァルが目を覚まसानんだよ。どうすればいいと思う？アーンヴァル…って、あれ？」

「え？私がどうかしました？」

「目を覚まसानえから、どうしようかと思ったじゃねえか」

「心配…してくれたんです？」

「…まあな。俺の唯一のパートナーだからな」

アーンヴァルは「えへへっ」と笑いながら、俺のほうに飛びついてきた。

さて、ラステーションの協会にいたんだが…。

「やっぱり、入らないとダメかな？」

「ここまで来たら、覚悟を決めましょうよ、マスター」

アーンヴァルの言葉に背中を押され、おれは教会のドアを開けた。

「おや。誰かと思えば、空から落ちてきた少女を助けたり、人形を目の前にあたふたしていたケイス君ではないかな？」

もうやだ、コイツ。

やっぱり間者を潜ませてやがったか。
だったら、こっちも。

「おや。誰かと思えば、女だとバレないようにサラシを巻いている
神宮寺ケイスさんではないですか」

「なっ、何で初対面の貴方がそれを知っているんだっ！」

俺は涼しい顔をしつつ、

「おや、やっぱりそうだったか。見事にブラフに引っかけられて
ちゃって」

と言っておいた。

『世の中、情報がすべてを制す』でしたよね、ケイスさん。
こっちには、原作の知識があるんですよ。

ケイスさんは「くっ！」と言いながら、こちらを睨んできていた。
あ、やりすぎちゃった？

「ケイ、貴女そんな顔もできるのね」

そう言いながら現れた人影。
黒髪に赤い瞳のあの人だった。

「はじめまして。私はノワールよ」

「私は…」

俺が自己紹介を始めようとすると、ノワちゃんがそれを止めた。

「ケイから聞いて知ってるわ。ケイス、よね？」

正直、うれしいけどさあ。

自己紹介くらいさせてよ。

まあ、気を取り直して、と。

「ええ。名前を覚えていただいているとは。恐悦至…」

と言おうとしていたのだが、また途中で止められた。
くきくっ。

「ねえ、ケイス。そういう物言い、どうにかならない？正直、ケイ
だけでおなかいっぱいなのよ」

「ノワール!？」

「…こんな感じでいいですか？ノワールさん」

「んー、さんも要らないわね。ノワールって呼び捨てでいいわ」

「わかったよ、ノワール。これで？」

「OK!b」

…この人、こんなにはっちゃけてたっけ？

「それでさ、ケイス」

「なんでしょ」

「1回だけでいいから、戦って!」

Why!?

「何で!？」

「ケイから聞いてね、強そうだな〜って思ったのよ。でも、実際に貴方を見たらそんなに強くなさそうに見えるじゃない？」

悪かったっすね。

「だから、1回戦ってみたいのよ」

「ケイス、…さっきの暴言は水に流そう。だから、ノワールと1回でいいから戦ってくれないか？」

ケイはそう言った後、小さな声で「本当に頼む。じゃないと、暴れて手が付けられなくなるんだ」と言った。
お前も苦労してるのな。

「わかった。ただし、条件がある」

「条件？」

「ああ、女神化は絶対しないこと」

「貴方、私が女神だって知ってたの？」

「まあな。ネプテューヌやブランから聞いてたからな」

「そう、…でも嫌」

何ですと！？

「ちょ。それ、勝負にならないじゃん」

「いいじゃない。ねえ、やーろーおーよー」

良くねえよ。ま、しかし何だ。女神と戦ってみるのも面白いかもしれないな。

「分かった。じゃあ、条件変更だ。俺が勝ったら、ノワちゃんって呼んでいいか？」

「いいわよ、どうせ私が勝つんだし」

うしつ。だったら、気合入れるか。

そう思っていると、アーンヴァルが話しかけてきた。

「マスター、新しい武装があるんですけど、今回試していいですか？」

おお、いいねい。

「よろしく頼んだ」

「はい！」

「それじゃ、人気がない廃工場でもやりましょうか」

ノワちゃんはそう言うと、俺達を案内すべく歩き出した。
さて、吉と出るか凶と出るか。

……SAVE

第15話 黒の女神（後書き）

ケイス「せんせー。タイトル詐欺になってまーす。タイトルが『黒の女神』なのに、ノワールさんが最後までいいしか出てませーん」

大丈夫だ、問題ない。

ケイス「さて、と。何か、アーンヴァルがすごいことになっているんだが」

本当はそこだけで1本書くつもりだったんだけどね。早くノワちゃんを出したいがゆえにこうなった。

ケイス「で、新しい武装ってのは何？」

秘密。

でも、大体予想通りじゃないのかな？
だってさ、アーンヴァルの中にラファールが入ったんだよ？

ケイス「判るか、そんなモン。ちょっとひねくれて考えると、アーンヴァル自身が武器になる？」

そうかもしれないねえ。

ということだ。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ち」でまたお会いしましょう

第16話 ノワールとの一騎討ち（前書き）

ラストイションについたケイスとアーンヴァル。

彼らは、ラストイションの女神であるノワールにケンカを売られてしまった。

さて、これからどうなることやら。

第16話 ノワールとの一騎討ち

さて、ノワちゃんと戦うために廃工場とやらにやって来たわけだが。

「なあ、アーンヴァル。廃工場って戦いにくくないか？」

「大丈夫ですよ、多分。それに戦うの私じゃないですし」

Nooooooooooooo！

「貴方達、余裕あるのね」

そう言いながらジト目で見てくるノワちゃん。
そんな目で見ないでくれ。

「さて、それじゃそろそろ戦^やらない？」

そう言つて、剣を構えるノワちゃん。

絵になるな……っていかんいかん。そんなこと考えてる場合じゃなかった。

「女神化はしなくていいんですか？」

「戦ってる最中で切り替えられるしね。そんなこと気にしなくても大丈夫よ」

そう言いながら、剣をぶんぶん振り回していた。
……よっぽど戦いたかったのね、この人^{ノワちゃん}。

「それじゃ、行きますか。アーンヴァル、剣を」
ギュリーノス

次の瞬間、俺の右手にギュリーノスが姿を現した。
それを手に取りながら、「了解です」と答えた。

では、行きますか！

side 二二

お姉ちゃん達のいる廃工場から少しはなれた高台。
私はそこにいる。

ケイからお姉ちゃんと旅の冒険者が模擬戦をする、と聞いたからだ。
近くにいたら、迷惑をかけちゃうから、遠くから見ることにした。
…もちろん、双眼鏡を持ってきたわ。悪い？

廃工場に双眼鏡を向けると、ちょうど始まるどころだったらしく、
2人が向き合って剣を構えていた。

まあ、お姉ちゃんに勝てるわけないし、一方的な戦闘になるんだろうな。

あの旅の冒険者つても災難よね。

ま、せいぜいがんばって。一応応援しておくわ。

side 二二 END

はじめ、と言う人がいるわけもなく、俺とノワちゃんの戦闘が始ま

った。

というか、剣をお互いに向けて、少ししたらこの人斬りかかってきたよ。

まあ、大振りだったから、後ろに跳んで簡単に避けられたが。

「ま、このくらい避けられるわよね。それじゃ、次行くからね!」

そう言つて、こっちに突っ込んでくる。

そして上から剣を振り下ろした。

ギインと音がし、どうにか剣を受け止めることができた。

だが、今の衝撃でまだ手がしびれてる。

油断したな、マジで。

一撃目は通常様子見だろ？

まさかこんなに力を入れてくるとは。

「あれ、もう限界?」

「ンなわけあるか! ちょっと油断しただけだよ」

そう言いながら俺は少し間合いを取り、呼吸を整える。

「そう、だったらいいわ!」

そっさいながらまた斬りかかってきた。

今度は横から。

キイン。

今回は、危なげなく止められた、ハズだった。

「甘あい」

そう言いつつ、ノワちゃんは鎧の方に剣を滑らせた。
俺は咄嗟に剣を弾き、その攻撃を終わらせた。

「うーん、咄嗟の判断力は合格ラインギリギリ、かな？」

そう言いつつ、今度は剣を構えて動こうとしない。

…誘ってる？

まあ、罠でもいいかと思い、今度は俺の方から攻めることにした。
上から、横から、袈裟懸け、逆袈裟で剣を振ってみるも全部止められた。

「へえ、結構攻撃力あるんじゃない」

そう言いつつ、剣をぶらぶらさせていた。

side ノワール

あ、危なかったあ。

剣をちゃんと持っていたし、ケイス君の剣も見えていたからどうにか捌けたけど、油断したらホントにマズかった。

まったく、私とそんなに変わらない背丈で何て力を持ってるのよ。

さっき優位に立ててたのに、これじゃ笑いものじゃない。
こうなったら…。

side ノワール END

「さて。それじゃ遊びはおしまいね。そろそろ本気でやらせてもら

「うわ」

「ですよー」。

「ってゆーか、今の力量差で女神化されるとマズイんじゃない？」

「アーンヴァル、そういえば新しい武装があるとか何とか言ってたな、前回」

「前回じゃなくて、さっきです！」

「うん、この際どっちでもいい。それって、女神化したノワちゃんに対抗できる？」

「多分、ですが」

「よし、それをやってみるか。…ちょっと不安が残るが」

「ノワールさん、女神化するんですよ？」

「もちろんそのつもりよ。怖気づいた？」

「まあ、怖いのも確かなんですが」

「言った瞬間に、ノワちゃんのコメカミがピクつとした。やべえ。怒らせたかも。」

「…冗談です。こつちもちよつと準備したいんですよ。ちよつとだけ待ってもらっていいです？」

「ダメ…といいたいところだけど、いいわ。それも見せて欲しいし」

ね

ということだ。

「アーンヴァル、それじゃその武装をよろしく頼む！」

アーンヴァルはそれに対して「はい！！」と元気よく返事をした。

s i d e アーンヴァル

さて、それじゃ行きます。
わたしたちの新しい力！

「ゲート オープン
召還陣開放」

私がそう言うと、空に召還陣が作成された。
そして続いて、

「サモン
召還、ラファール」

その召還陣からラファールを召還した。
大きさは、私用のものではなく、もっと大きなもの。
つまり、マスター用のラファール。

「アーンヴァル。ということだ、これ」

マスターがそう聞いてきたので、私はこう答えた。
「あのラファールが力をくれたんです」と。

そして、私はそのラファールの方へ跳躍する。

…私は空を飛ばませんから。

そして、仕上げの言葉。

「融合合体！^{ユニオン}」

こうして私はラファールと融合^{ユニオン}した。

side アーンヴァル END

まじかよ。

そう思いながら、空のラファールを見上げる。
確かに、すごい武装だわ、これ。

side ノワール

…ナニコレ。

なんで、人間がこんな力を持つてるのよ！

女神化してても、こんなので攻撃されたら無事には済まないわ。

私は頭を抱えた。

side ノワール END

『マスター、驚くのはまだ早いですよ』

頭の中に、アーンヴァルの声が響く。

『今度は、マスターの番ですからね』

その言葉の後に、頭の中に言葉、キーワード ユーザーズ使用方法が送られてきた。

「おいおい、マジかよ」

『マジです』

…男は度胸、一丁やってやるか！

「疾風よわれに力を与えん！ラファールコンビネーション疾風合体」

俺がそう言うと、ラファールは俺の方に近付きながら7つの塊に分離し、装着された

2つは腕にガントレットとして。

2つは足にサブスラスター兼ガーダーとして。

1つは背中のスラスターおよび前面のガーダーとして。

1つは右腕のマウントウェポンとして。

1つは左腕のマウントウェポンとして。

「お待ちせしました。これで、こちらの準備は完了です」

side ノワール

き、聞いてないわよ、こんなこと。

まさか、こんな奥の手を隠していただなんて。

あとで、ケイを問い詰めないといけないわね。

s i d e ノワール E N D

s i d e ユニ

何あれ。

何で人間にあんなことができるの！？
意味が分からないわよ！

s i d e ユニ E N D

「え、ええ。それじゃ続きをやりましょうか」

そう言ったノワちゃんの体は震えていた。

まさか、武者震い？

これだからバトルマニアは。ε - () ^ () 1

…… S A V E

第16話 ノワールとの一騎討ち（後書き）

やっちまいしました。

と言うことで、まずは初出の紹介から。

ラファール（つて前々回も出てたな）

元々はアーンヴァル用の武装を変形・合体させた支援機。

この小説の中では、ケイスの支援機となります。

アーンヴァルが異空間から呼び寄せ融合することにより、ケイスの支援を行うことができる。

融合中もちろん意識はあり、ココレットの操作やいつも通りの武器召還をメインに行います。

基本的なスペックは原作と同じ。

違う点は、右腕にマウント式の武器（粒子ブラスター）がついているところ。

左腕のマウント式武器は原作通りランチャー系で。

この武装の名称についてはまだ検討中。

ちなみに、合体方法は2種類あり、今回の合体はペガサスモードと言っらしい。

ココレット：ファンネルみたいなもの、とお考えください。

粒子ブラスター：建物等障害物に遮られずに目標に当てられるランチャー、とお考えください。

ケイス「なんだこれ」

うん、まあそうなるよね。

ケイス「つか、合体のところが適当すぎる」

しょうがないだろうが。
詳しく書きたいけど、資料が家にはないんだよ。

ケース「小説の資料として買ったら？」

考えたけど、さすがに約2万をポンと出す勇氣はない。

ケース「にしても、相当なパワーアップじゃないか、これ」

そうだね。

たぶんこれで女神化状態の方々にケンカ売っても引き分けに持ち込める。

ケース「引き分け？」

そ。引き分け。

話の都合上、そうなった。

ケース「深くは聞かないが、どうせそのうち分かることだからな」

ということ。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ちその2」でまたお会いしましょう

ケース「ま、今回決着つかなかったからな」

それでは。

第17話 ノワールとの一騎討ちその2（女神化ver）（前書き）

ラストイシヨンの女神であるノワールにケンカを売られたケイス。
新しい力のお披露目も終わり、後はノワールの女神化を待つのみ。
さて、これからどうなることやら。

第17話 ノワールとの一騎討ちその2（女神化ver）

「それじゃ、こっちも女神化させてもらっわ」

そう言っで力を集中し始めた。

「見せてあげる。女神の力ってモノを！」

そう言っで、ノワちゃんを中心に光の柱が迸る。

光が収まったとき、そこにはノワちゃんの姿はない。

変わりに、黒をトレードマークとした女神が立っていた。

「プロセスサユニット、装着完了！ブラックハート、推参！」

いやいやいや、推参じゃないから。

多分言いたかったんだろっなあ、推参って。

「さて、それじゃはじめましょうか」

そう言っで、左腕のランチャーの照準をブラックハートに合わせる。それと同時にアーンヴァルにココレットの制御を頼んだ。

『了解です、マスター』

その声と同時に脚部ユニットの先端についているココレットが宙に放たれた。

そして、俺の周りを回るように旋回していた。

「いつでもいいわよ。女神の力を思い知りなさい！」

そう言うと、ブラックハートは斬りかかってきた。

（「アーンヴァル、ココレットで彼女に攻撃。その隙に俺は彼女の後ろに回りこむ！」）

『はい、了解です！』

斬りかかってきたブラックハートにココレットを向かわせ迎撃させ、そのうちに俺は建物の影を利用しつつ彼女の後ろへ回り込む。

「これで、どうだ！」

俺は彼女の後ろからランチャーを打ち込んだ。

今はココレットの対処に追われてこっちには気づいていないはず。

だが。

「ふふん。銃なんかにやられる私じゃないわ」

左腕だけで防御されてしまった。

side ユニ

たしか、ケイスって言ったっけ、あの冒険者。

お姉ちゃんが剣しか使わないと思って銃のみで応戦しているの？

だとしたら、相当な間抜けね。

あの障害物だらけの場所で銃で挑もうなんて。

動きも制限されてしまうし、障害物を盾として使うことができる以上、彼に勝ち目はない。

だけど、銃使いの私としては、勝ってもらいたいつても正直あるのよね。

あー、もー、どっちを応援すればいいのよ、私は！

side 二二 END

移動に時間がかかった以上、防御されることも予想できたが、まさかこれほどとは。

そんな時、アーンヴァルが『何でスラスターを使わないんですか？』と話しかけてきた。

…忘れてた。

だったら。

（「アーンヴァル、スラスターの制御をこっちに」）

『こんなこともあるのかと、マスターの意思で自由に操作できるようにしてあります』

…先に言え、先に。

まあいい。

これで、彼女に高速で近づけるわけだ。

そこで、脚部スラスターを少しだけ吹かし宙に浮いた状態にした。

「さて。じゃあこっちも本気で行かせてもらおうぞ」

そう言って、スラスターの出力を全開にする。

…正直、見誤っていた。あそこまでスピードが出るとは。

気づいたときには、銃口をブラックハートに当てている状態だった。

「!!」

「チェックメイト!」

そう言つて、俺は再びランチャーを打ち込んだ。
今度はゼロ距離射撃。
当たらないはずがない。

「…やるじゃない」

そう言いながら、俺を睨みつけてくる。
よく見ると、さっき撃った場所を押さえつけて、痛みに耐えている
ようだった。

side ノワール

いったあ…。

今何が起こつたのよ。
気がついたらケースが目の前にいて、銃を発射された。

コレじゃ、いくら距離を離してもダメね。
だったら、建物の影に隠れて様子を見るしかないかしら。

side ノワール END

俺は、アーンヴァルにココレットを回収させた。

「さて、立場が逆転ですよ。降参します?」

「誰がよっ!」

彼女はそう答えると先ほどの傷を押さえながらかなりの速さで移動していった。

ですよね!。

多分俺でもそうするわ。

どこかの建物の陰に隠れて、回復を待つ戦術。

でも、そうは問屋が卸しません。

（「アーンヴァル、ココレットでブラックハートの潜在場所の座標特定を頼む。あ、できれば見つからないようにな」）

そう言うと、ココレットは上空に浮かび上がり、ブラックハートの搜索を開始したようだった。

さて、それじゃあ見つかるまでチャージをしておきますか。

そう思い、粒子ブラスターのチャージを開始した。

『マスター見つかりました。今、座標を送ります』

そうアーンヴァルの声が聞こえた後、頭の中に座標情報が流れ込んできた。

さて、と。

俺はその座標に銃口を向ける。

「粒子ブラスター、発射!」

side ノワール

「粒子ブラスター、発射！」

そう、ケイスの声が聞こえた。

まったく、何を考えているのかしら。

こんな障害物の多い場所で銃を撃つても、当たるわけじゃない。

そう思っていたときだった。

地面が揺れている？

何だか波が押し寄せているかのような振動だった。

波？

そう思い至ったとき、私の足元で青白い光が走った。

そして、私を包囲するかのように青白い光の壁が出来上がった。

それは段々と私の方へ近づいてくる。

「きゃあああああつ！」

side ノワール END

「きゃあああああつ」

よし、当たったみたいだな。

さて、これからどうするか、と思い悩んでいたとき、アーンヴァルが話しかけてきた。

『マスター、追撃の必要はなさそうです。今の一撃で決しました』

ええええつ。

だって、まだ序盤じゃん。

ユニコーンモードとかグランニューレとか、やりたいことまだたくさんあったのに。

『今は我慢してください、マスター』

アーンヴァルが冷たい。くすん。

side ユニ

お姉ちゃんが、負けた!?

それも、銃使いに!?

もしかして、あの人に銃の使い方を教えてもらえば、お姉ちゃんより強くなれるのかなあ。

うん、ラステーションに戻る所で声をかけてみよう。
もしかすると、もしかするかもしれないし。

でも、お姉ちゃんが反対するかなあ。

side ユニ END

武装したままノワちゃんがいると思われる座標に行ってみると、確かにノワちゃんが倒れていた。
女神化が解除されて。

「ノワちゃん、大丈夫？」

そう言いながら頬をぺちぺちする。
何か、顔中がびくびくしているが、起きる気配まったくなし。
さらにぺちぺちしてみる。

ノワちゃんは「うん」といいながら、目を開けそうになっていた。
もう少しかな？

「ノワちゃん、大丈夫？」

頬のぺちぺちを繰り返していたら、バツと飛び起きた。

「あ、あれ？私、倒れてた？」

「うん、倒れてた」

「あ…負けちゃったんだ、私」

そう言うと、ノワちゃんは落ち込んでしまった。

まあ、無理もないな。

普通の人間に負けちゃったんだから。

それも女神化して。

「負けたから何だって言うのさ」

「え、だって負けちゃったのよ、私。私を信仰している人たちに申し訳なくって」

あ、ノワちゃんってプライドの塊だったなあ、そういえば。
まったく、扱いにくいことこの上ない。

「ね、ノワちゃん。負けないってことをその信者さんたちと約束してるの？」

「約束はしてないわよ」

「だったらいいじゃん。もっと、気楽に行こうよ」

「でも…」

「だったら、俺の負けでいいや」

「え？」

「俺の負けでいいって言ってるんだよ！はい、コレで決定」

とりあえず、廃工場からラストーションに向かっているんだが。
沈黙が…。

俺、何か悪いことした？

side ノワール

ケイスのことが分からない。

あのとき、何であんなことを言ったのか。

『俺の負けでいい』

何で、そんなことを言えるんだろう。

勝利を望んでないの？

うん、やっぱり聞いてみよう。

side ノワール END

「ねえ、ケイス。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「ん？何？」

「さっき、『俺の負けでいい』って何で言ったの？」

「ああ、そんなことか。だってさ、ノワールは負けられないんだろ？だったら、俺が負けるしかないじゃん」

「でも…」

「それにさ、女の子は落ち込んだ暗い顔よりも笑ってる顔の方がいいと思ったからさ」

そういうとまた俯いちゃった。

こっちは恥ずかしいのを覚悟して言ったのに。

そんな時、「あの、ちょっといいですか？」という声が聞こえてきた。

声のするほうを見てみると、そこにはユニがいた。

「あの…ってあれ。お姉ちゃんも一緒？しかも顔が真っ赤だし」

「ななななな、何言ってるの、ユニ。いいいい、意味がまったく」

分からないわ」

あ、俯いてたのは恥ずかしかっただけか。
あー、よかった。

…って、なんでユニがここにいるんだ？

「君は？」

「あ、すみません。私、ユニって言います。そこのお姉ちゃんの妹です」

なんか、本編と性格が違うな。

「それで、そのユニちゃんがどうしたのかな？」

「単刀直入に言います。師匠と呼ばせてもらってかまいませんか？」

「し、師匠？」

……SAVE

第17話 ノワールとの一騎討ちその2（女神化ver）（後書き）

ということで、ノワちゃんをブッ倒してフラグを立ててみました。

ケイス「何でフラグを立てる必要がある」

実は、うれしいんじゃないのか？

ケイス「…ノーコメントで」

ということで、最後にユニを出してみました。

ケイス「本当に本編と性格が違うな」

まあ、多分今はにゃんこ被ってるだけです。

ケイス「さいですか」

ということ。

それでは次回、「師匠？」でまたお会いしましょう

ケイス「俺はユニの何の師匠になるんだ？」

銃のдар、常考。

第18話 師匠？（前書き）

ラストイシヨンの女神であるノワールにケンカを売られ、ケイスはそれに勝利した。

そして、ラストイシヨンへの道程でユニから師匠になって欲しいと頼まれた。

さて、ケイスの選択はいかに。

第18話 師匠？

「師匠と呼ばせてもらってかまいませんか？」

ユニが俺に向かってそう言ってくる。

ふむ、おそらくどこかで俺達の戦いを見ていたか？

「師匠って呼ぶのはかまわないけど、何で？」

「強い人に師事したいって言うのは当然です！」

うん、間違いない。

多分、どこかで見ていたんだな。

「だったら、お姉さんの方が適任じゃないのかな」

「お姉ちゃんは、貴方に負けちゃいましたし。それに、私の武器はコレですから」

そう言いつつ、ユニは空間から銃^{ライフル}を取り出した。
へえ、ユニはもうそういうことができるのか。

「へえ、ライフルか」

「はい。お姉ちゃんは剣が主体ですから、教えてもらえません」

「わ、私だって飛び道具くらい使えるわよ」

「ちなみに、どんなのが使えるんです？」

「えっと、剣に闘気を集中させてそれを打ち出したり、闘気を集めて宙に浮かせてそれを銃で撃って破裂させて攻撃するとか」

そう言つて、どうだ！とばかりに胸を張るノワちゃん。
デスペラードとスケイッターオリオンか。
つて、それ前作の技ですから。

「ね？お姉ちゃんじゃダメでしょ？」

「ああ、うん、そうだね。これは認めざるを得ない」

「え？え？私、何か変なこと言つた？」

ノワちゃんは、分かつていないようだ。
それは、銃の技じゃない。

「ということ。よろしくね、師匠」

何が『ということ』なのか小一時間問い詰めたいわけだが。

「いや、まあ師匠と呼ぶのはいいが、何も教えられんぞ？」

「え？」とユニは不思議そうな顔をする。

まあ、何か教えてもらえと思うたんだろう。

「だって、お姉ちゃんと戦つて勝つたのよね？」

「まあ、一応な」

俺がそう言つと、ノワちゃんが苦笑いになる。

「一応？」

「ああ、一応だ。あの勝負は、ノワールの勝ちってことになってる」

この言葉に、ユニが激しく反応した。

ユニは「あの状況で、お姉ちゃんの勝ちってどういうこと？」と言つて、ノワちゃんに突っかった。

「え、えーとね、私が負けられないって言ったら、勝ちを譲ってくれたの。でね、私は……たほうが……って言ってくれて（ごにょごによ）」

そう言いながら、ノワちゃんはまた顔が赤くなつていった。
つていうか、なんていう羞恥プレイだよ、これ。

「へえ、じゃあ戦いは師匠の勝ちで、勝負はお姉ちゃんの勝ち？」

「そついうこと」

「わけわかんないけど、まあいいわ。」

ユニはそう言いながら、何か的の準備をしている。

「何をやってるんだ？」

「的の準備ですよ。私のウデを見ておいてもらおうと思つて」

そう言いつつの準備が終わつたのか、少しはなれたところでライ

フルにチャージを始めた。

ああ、チャージって女神化しなくてもできるんだ。

「師匠、それじゃ見ていてください」

そう言つて、ライフルを構えた。

だが、なかなか発射しない。

「どうして発射「しません、ちょっと黙ってもらっていいですか？気が散ります」……」

少しした後、ライフルのトリガーが引かれ弾が発射されたのだが、中心からかなりずれたところに着弾している。

「ちょっと、気が散っちゃったみたいですね」

「ひとつ、教えてくれ。君に射撃を教えたのは誰だ？」

「ケイよ。彼女に言われたのよ、よく狙えつて」

ちょっと気になるな。

そう思い、横にいるノワちゃんに声をかける。

「ねえ、ノワール？」

「ひゃいつ」

…なにを驚いてるんだよ、そんなに。

「どうしたの？ノワール」

「ど、どうもしないわ。それで、何？」

「ユニってさ、運動神経よかったりする？」

ノワちゃんは少し考えてから「うーん、悪くはないと思うわよ？あれでも、女神候補生だし」と言った。

まあ、そうだよな。

「なあ、ユニ」

「何でしょう、師匠」

「ちよっとさ、早撃ちをやってみようか、あの的に向かってそう言つて、さっきの的を指差した。」

「え？何でまた」

「ひとつだけ、教えておこうと思つてね」

「でも、早撃ちだとよく狙えないから外れるんじゃないの？」

まあ、普通はそう考えるよな。

でも、本当は逆。

初心者とかの場合は、当てようとして筋肉が緊張して当たらなくなるってことが多いわけだ。

だから、早撃ちとかで緊張していない状況を作つてやれば、当たる確立が上がる、はず。

「だから、狙わなくていい。当てればいいんだよ。気楽にやってみな」

「分かりました、師匠！」

そう言つて、ライフルを下に向ける。

そして、そこから肩の位置まで上げて、トリガーを引く。
当たるように調整を加えてから。

今回の弾は、ど真ん中を射抜いていた。

「中心に当たりましたよ、師匠！」

ユニはそう言つて喜んでいた。

うんうん、よかった。

当たるようになったのがうれしく、ユニはそこに残つてまだ
撃つていくと言つていた。

だから、俺とノワちゃんは先にラストেশョンに帰ることにした。

「ありがとね、ケース」

急にノワちゃんが俺にお礼を言つてきた。

俺、何もしてないんだけどな。

「ノワール、何のことだ？」

「あの子のうれしそうな顔、久々に見たのよ。いつも、苦虫を噛み
潰したような顔をしていたから」

「なんだ、そんなことか。アレはさ、俺が昔人から言われたことを

言っただけだよ」

まあ、嘘は言っていない。

弓道をやっているときに、度を過ぎた緊張は災いにしかならないって教えてもらったからな。

「それでもよ。なんだかんだ言っつて、あの子の師匠になっちゃうのかな、ケースは」

「それはないよ、ノワール。俺はまだ、旅の途中だしさ。それに、そろそろリーンボックスに行こうかと思っているから」

ノワちゃんは、驚いたような悲しいようなそんな顔で「えっ!？」とつぶやいた。

「それじゃ、教会に行つて荷物を持って、そろそろまた旅に出るよ」そう言つて、教会へ向かおうとした。

が、何者かに服を引っ張られ、進むことができなかった。まあ、犯人は分かつてるけどな。

「ノワール？」

side ノワール

ケースが、どこかに行つてしまう。

そう考えていたら、気がついたら私はケースの服を引っ張っていた。

「…ノワちゃんって呼びなさいよ」

一番初めの約束。

戦いに負けたら、『ノワちゃん』と呼ばれる約束。
そして、私は戦いで敗れた。

「え？だって、俺は勝負に負けたから…」

あなたは負けてない。

優しいあなたはプライドを捨てられない私に表面上の勝ちを譲ってくれただけ。

「そんなの関係ない。これは私の意志。それに、私は戦いで負けているのよ。あなたは、そう呼ぶ権利があるわ」

私は…多分ケースのことが好きになりはじめている。

「ケースは、私のこと嫌い？」

s i d e ノワール E N D

「ケースは、私のこと嫌い？」

なんで、そういう話に行く？

まあ、もちろん嫌いなわけがない。

どっちかと言えば、好きな方に入るだろう。

「嫌いじゃないよ、ノワちゃん」

そう答えた俺は急に恥ずかしくなり、ラステーションへの歩を早めた。

ラストেশヨンの教会。

やっとなつたが、ここではたと気づく。

まさかとは思うが、さっきまでのやり取りはケイの耳に入っていないかな？

入っていないことを願いながら、教会の扉を開けた。

「…これはこれは、女神を落としたケイスさんではないですか」

耳に入ってたー。

「いや、すぐに発とうと思って、荷物をとりに来た次第で。あれ？俺の荷物はない？」

「これのことですか？」

そう言いながら、ケイが鞆を持ち上げる。

紛れもない、俺の鞆だった。

「そうそう、それ。それをこっちに」

「嫌です。とりあえずどういふことか説明してもらってから処遇を決めます」

そんなちやうどいいタイミングのときに

「ただいま、ケイ。ケイス帰って来てる？…って、いたー！」

ノワちゃんか帰ってきやがりました。

「おかえり、ノワール。今、ケイスを問い詰めているところだからちょっと待ってくれ」

ケイのその言葉に、ノワちゃんが顔色を変えた。

「どういうこと？ケイ。ことと次第によっては無事では済まさないわよ？」

「いや、ノワール。ケイスが君を落としたとの連絡があつて、その真偽を…」

「何のために？ねえ、ケイ。そんなに八つ裂きになりたい？」

ノワちゃんが、低い声色でそう言った。
怖え。

「いや、そんなことは。でも…」

「でも、じゃない。今度ケイスにそういうことをしようとしたら…」
そう言つてニイッと笑つて

「わ・か・つ・て・る・わ・よ・ね？」

「あ、ああ。悪かったね、ケイス。引き止めてしまつて」
そう言つて、鞆を俺に渡してきた。

そのとき小声で「さすがにボクも命が惜しいからね」とだけ言つていた。

さて、これで出発かな？

「まったく。ケイも気が小さいんだから」

そう言いながら、ノワちゃんはころころと笑つた。

なんでも、さっきの言動は一芝居打ったと言っているんだが、とても信じられん。

「また、会えるわよね？」

「そうだね。いつかまた、遊びに来るよ、ノワール」
ノワちゃんがすごく不機嫌そうな顔をする。

あ。

「ごめん、ノワちゃん」

「ん、よろしい」

「ユニちゃんには、お別れ言えなくてごめん、って言うておいて」

「ええ、分かったわ」

そして俺は鞆を背負いなおした。

「じゃ、またね、ノワちゃん」

「ええ、今度会うときを楽しみにしているわ」

そして、俺は空港へ歩き始めた。

空港へついてチケットを買おうとしているとき

「師匠っ」

とユニの声がした。

「し、師匠、どこに行くんですか？」

「リンボックスに行くんだよ」

「もっと、教えて欲しいことがいっぱいあるんですけど」

「俺が教えることは何もないよ。それに、後は君のお姉さんが教えてくれるよ」

「お姉ちゃんか？」

「そうさ。この世界に、剣士はすごい多い。そして、君のお姉さんは凄腕の剣士だ」

「そんな剣士を相手に、練習ができるなんてラッキーだよ」

「でも、お姉ちゃんにはまったく当たらないし」

「早々当たるもんじゃないさ。だからこそ、技術を磨くんだ。そうすれば、いつかは当たるようになる」

「あと、俺は師匠でもなんでもないさ。だから、師匠って呼ばなくてもいいよ」

「いえ、私にとっては、師匠は師匠だけです。今度いつか、模擬戦をしてくれるとうれしいです」

「考えておくよ」

そう言って、俺はチケットを受け取り乗船手続きをした。

「ユニ、元気だな」

そう言つて、俺は船に乗り込んだ。

さて、次は最後の国、リーンボックスだ。

……
S
A
V
E

第18話 師匠？（後書き）

ノワちゃんがヤンデレ化？

ケイス「いや、俺に聞くな。と言うか、またタイトル詐欺が発生してるぞ」

どっちかというか、ノワールの恋物語、か？
とはいえこれでラステイション編終了です。

ケイス「今回、早かったなあ」

元々、ノワちゃんのイベントを起こすだけのはずだったからね。
4〜5話くらいで終わらせるつもりだったし。

ということ、次はリーンボックス編だな。

…正直、何を書こうか迷ってる。

ケイス「えええええ。概要的なものもないの？」

ないんだな、これが。

ケイス「…俺、どうなるんだ？」

さあ。

下手すると、ベールさんとゲームやって終了かも。

ということ。

それでは次回、「（タイトル不明）」でまたお会いしましょう

ケース「うわ、本当にタイトル不明にしゃがった」

幕間 設定のまとめ〜ラストेशन編〜（前書き）

ラストेशन編が終了したのでここまでの設定を以下略

幕間 設定のまとめ〜ラスティション編〜

人物

ケイス

われらが主人公。
とりあえず、ルウィー編から成長なし。

アーンヴァル

武装神姫の形をした何か
異空間から呼び出したラファールと融合することにより、ケイスの
武装になることができるようになりました。
標準武装としては、

- ・ランチャー
- ・粒子ブラスター
- ・脚部スラスター×2
- ・リアスラスター

これに加えて、武器を召喚して武装強化することが可能。

ラファールの合体モード

現在、3種類存在します。

1. ペガサスモード

ノワールと戦ったときのモードですね。

基本的に、ラファールと合体するのはこのモードになります。
ここから換装し、別モードになります。

2・ユニコーンモード

ノワール戦でケイスがちよつと愚痴ってましたが、
接近戦ではこっちのほうが強いはずです。

追加武装としてPDW11、M8ライトセイバーを呼び出し、こ
れらを合体させて剣にします。

加えて、腰部の左右についているガーダーを2つあわせ、盾とし
ます。

（所謂、デイコ・シールドですね）

ただ、エネルギーの消費がすごいので、長時間戦闘には向きませ
ん。

3・ライディングモード

ケイスとの合体前に戻る感じですね。

基本は、敵に突っ込む感じになりますが、それ以外の使い方もで
きるようです。

そのときにまた説明を書きますね。

と言うことで、久々の雑談ですよ、ケイスさん。

ケイス「というか、今回またパワーアップしたな」

まあ、今回はやりたいことの1つだったからな。

ケイス「アーンヴァル、好きだもんね」

まあ、BMの方でアーンヴァルだけを育てたからな。

ケース「で、今回の雑談は何？」

このあとリーンボックスに行つて、3話くらいで序章が終わりになるわけだ。

ケース「で？」

そうすると、1章に入っていくわけなんだが、ここでアンケートをとりたいなーと思つて。

ケース「なんのだよ」

1章の一番初めは、ゲームで言うところの序章から始まるわけだ。ここは、女神s vs マジック・ザ・ハードなわけなんだが、ここにケースが加わつたほうがいいのか？ということ。

ケース「俺？無理無理」

あ、ちなみにケースが入っても負けますよー。

ケース「マジか。ちなみに、この戦いに参加しない場合はどうなる？」

ほぼゲーム通りだな。

というか、下手をするときンクリする可能性が高い。で、ケースはというと、ある場所に冒険に行つてもらふ。

ケース「…難易度は？」

まあ、そんなに高くないと思っていいよ。

けど、その場合ある理由からアーンヴァルとの合体ができなくなる。

ケイス「え？」

うん、ちゃんと理由は考えてあるので。

と言うことで、どちらがいいか一言のところに書いてもらえるとうれしいです。

ケイス「で、いつまで募集にする？」

そうだな、11/5あたりまでかな？

一応、締め切ったときに、その旨投稿するようにします。

幕間 設定のまとめ〜ラストেশヨン編〜（後書き）

というところでよろしければメッセージ下さい、よろしくお願いします。

第19話 未来の歌姫（前書き）

ラストイションでの冒険を終え、リーンボックスに向かったケイス。今だ見たことのない景色に思いを馳せていた。さて、これからどうなることやら。

第19話 未来の歌姫

『ご利用ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております』

機械的なメッセージを聞きながら、俺はリーンボックスに足を踏み入れた。

というか、まだ空港内だな。

「まあ、思ったより快適でよかったよ」

「そうですね、これで2人分払っていなければ万々歳だったんですけどね」

…お聞きの通り、アーンヴァルの分も切符代を取られたんだ。しかも、大人料金だぞ。

「私は、大人ですよ！」

地の文にツッコむんじゃない。

空港から出て、景色を見てみたんだが…。

「へえ、かなり未来的な都市なんだな、リーンボックスって」

「そうですね。この間まで黒々とした街にいたからかもですけど、白くてきれいな街ですね。」

確かに、白くてきれいな街だな。

これは夜景がきれいに見えそうだ。

「さて、それじゃ教会でも探しますか」

「そうですね…ってあれ？」

アーンヴァルが何かを見つけたようだった。

「マスター、なんだか歌声が聞こえてきませんか？」

俺は耳をすませてみたが何も聞こえなかった。

聞こえるのは、所謂人ごみが発する音くらいだった。

「いや、何も聞こえないが」

「すごい透き通ったいい声なんですよ。マスター、私、行ってみたんです」

まあ、別に急ぐ旅ではないし。

俺はアーンヴァルの提案に乗り、その声の主を探すことにした。

どのくらい歩いただろうか。

俺達は空港から少し離れた公園に来ていた。

「なあ、アーンヴァル。まだその声の主ってのは見つからないか？」

「うーん、このあたりだと思っんですけど…」

アーンヴァルが言うには、この辺りから聞こえてきていたのは間違

いないらしい。

が、今はその肝心な声が聞こえないらしいんだ。

「歌うのをやめちまったか？それともアーンヴァルが壊れ始めたか？」

「私は壊れてません！」

そんな時、「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」と言う声が聞こえてきた。
明らかに少年の声だったが、『歌』と言うキーワードに引っかかったわけだ。

side ???

「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」

喉が渴いちゃったから水を飲んでた時に、急に男の子に話しかけられちゃった。

ええと、何て答えたらいいんだろ。

「え、えと、あの、その…」

「ほら、このお姉ちゃんも困ってるでしょ？ごめんなさいね、急に声をかけちゃって」

「い、いえ」

多分、声をかけた男の子のお母さん、だと思う。

丁寧に頭を下げてから、男の子の手を引いて歩いていった。
あの男の子に悪いことしちゃったな。
はあ。ボク、何でこんな性格なんだろ。

「お姉ちゃん、バイバーイ」

さっきの男の子が、ボクに手を振りながらそう言った。
だから、ボクも手を振り返したんだ。

…あ、小突かれてる。

side ??? END

青い髪、ヘッドホン…。どう考えても5pb.だよな、あれ。
さて、どうしたもんか。

そんなことを考えていると、アーンヴァルが「ちょっと声を掛けて
きますね」と言っ、5pb.(仮)に近づいていった。
オイ。

「あの一」

「……！」

「あの、すみません。怪しい者じゃないです」

こらこら、アーンヴァル。それじゃ怪しい人だよ。
そう思いながら、俺も5pb.(仮)に近づいていった。

side 5pb.(仮)

ボク、夢でも見てるのかな。
人形がボクに話しかけてくるなんて。

「私、アーンヴァルと申します。先ほど、歌声が聞こえてきたので来てみました」

この人形さんはアーンヴァルさんというらしい。
会った事、ないよね？

「あ、ありがとうございます。ボクは、5 p b . って言います」

夢の中だから、ちゃんと受け答えができるみたい。
本当にちゃんと受け答えができたらしいのにな。

「5 p b . さんですか。マスターから伺っていたイメージと違いますね。ちゃんと受け答えなさってますし」

へ？

もしかして、これって夢じゃない？

「あ、でも、すごい歌が上手って聞いてます。さっき歌っていた歌とか、もう一度お願いできますか？」

「え、いや、あの、だけど…」

夢じゃないって分かった途端、喋れなくなっちゃった。
あはは、やっぱりボクだなあ。

「あ、マスター。5 p b . さんですよ、5 p b . さん」

アーンヴァルさんが誰かに向かつてそう言っていた。

アーンヴァルさんが向いている方向を見ると、男の人が立っていた。

side 5pb. (仮) END

俺はアーンヴァルに「わかってるよ」と言っ
て、5pb. に向き直った。

「はじめまして、ケイスといいます。
アーンヴァルのマスターをや
つてます」

そう、挨拶したんだが…。

5pb. の動きが止まった。

「あの、大丈夫ですか、5pb. さん」

そう言っ
て、肩に手をかけようとしたんだが。

「ボ、ボクは5pb. っ
て言います」

と言っ
て返してくれた。

うん、挨拶は必要だね。

「それで、実は、君の歌を聞くために探してたんだ」

「え？」

5pb. は不思議そうな顔をする。

ま、当然か。

「ボ、ボク有名じゃないし、上手くもないですよ」

「そんなことないよ。なあ、アーンヴァル？」

「はい、そうです！空港から出たところで聞こえました。すごいきれいな、澄んだ歌声でした」

アーンヴァルがそう言つと、5pb. はすごく恥ずかしそうに照れていた。

「だけど、実際空港とこっつて結構離れてるよな。どうして聞こえたんだろうなあ」

「神姫イヤーは地獄耳なんですっ！」

アーンヴァル。それ、某アルトレーネのセリフ…。

「ま、まあ、それはそれとして、歌を聞かせてもらえないかな、君の歌を」

俺がそう言つと、でしたら、とアカペラで歌い始めてくれた。

曲名？

野暮なことは聞くない。

「無理言つて、申し訳なかったね」

「だ、大丈夫です。こちらこそ、聞いてくれてありがとうございます」

した」

そう言つて、5pb.は笑顔で返してくれた。
うんうん、やっぱり笑顔はいいや。

「それで、俺はファン第一号つてことでいいのかな？」

「え？えええええっ！？」

そんなに驚くところか、ここ。

「あ、もうファンがいたんだ。そうだね、あんなに歌が上手いんだし」

「いえ、そう言う事ではなくて。本当に、ボクのファンになってくれるんですか？」

そういう心配か。

「もちろん。こっちからお願いしたいくらいだよ」

「でしたら……はい！」

さて、それじゃ俺達は教会に向かうとしますか。

「それじゃ、俺達教会に行くからさ」

「はい、お氣をつけて」

「うん、ありがとう」

そう言って、俺達は別れた。

side 5pb.

ケイスさん、かぁ。

すごい、いい人そうだったなぁ。

だけど、ケイスさんに挨拶されたときに挨拶返さないといけないって思ったのは何でだろ。

けど、これでボクにもファンができたんだ。

しかも、一度に2人も。

うん、自信が出てきたよ！

side 5pb. END

……SAVE

第19話 未来の歌姫（後書き）

はい、ということで、リンボックス編始まりましたー。

ケイス「おう。ってことで、最初は5pb.か。というか、えらくあっさりだな」

まあね。

一応、5pb.が人見知りを発動しなかったのには理由があったりする。

ケイス「どうせ、ご都合主義とかそんなもんだろ？」

チミは俺のことをどういう目で見てるんだよ。
このページ見れ。

ケイス「へえ、こんなことがあったんだ」

たしか、1年位前に何かあったよなーと思ってググったらこれが出てきたんでそのまま採用した。

ケイス「なんて安直な」

ということ。

それでは次回、「ゲーマーな女神様」でまたお会いしましょう

ケイス「誰のことか丸分かりだな」

第20話 ゲーマーの女神様（前書き）

5pb.と別れた後、ケイスたちは教会へ向かっていた。
そんな彼らに、悪夢が襲いかかるうとしていた。
さて、これからどうなることやら。

第20話 ゲーマーの女神様

俺達はリーンボックスの教会に向かって歩いている…ハズなんだが。

「なあ、アーンヴァル。教会ってこんなに遠いのか？」

「ええ、街の外れのほうにあるみたいなんですよ」

そう言いながら、俺をナビゲートしていた。

まあ、それならしょうがないか。

そんな時、左のわき道からドドドドドドと誰かが走っているような音が聞こえてきた。

「マスター、誰かが走ってきているようなので、注意してくださいね」

「おう、分かって…うばあっ！」

その足音の主は見事俺にクリーンヒットした。しかも、こともあるうか俺を下敷きにしゃがった。

「んー、んー、んー（どけー、どけー、はやくどけー）！」

「どなたですの？私に鉄山てつざん靠かまをかました方は」

なんかこの口調、聞いたことがあるような…。
って、そんなこと考えてる場合じゃねえ。

俺は、「んー、んー」と言いながら地面をバンバンと叩いた。
く、苦しい。息が続かねえ。

「あらあら。下に誰か倒れているみたいですね」

うおー、気づいたなら早くどいてくれー。

俺はさらに地面をバンバンと叩いた。

「私がどいて差し上げればよいのでしょうか」

そう言っで、どうこうしたらしいのだが。

「あ、あら？」

バランスを崩して、再び俺の上に覆いかぶさるような形になった。

むにゅっ。

なんか柔らかいものが2つ押し付けられてるんですが。
う、うれしくなんかないですじょ？

そのあと、やっとどいてくれました。

もうちょっと感じていたかったとか、思っでないからね？

「大丈夫ですか？」

「貴女には、これが大丈夫に見えるんですか？」

「…見えませんわね」

まあ、見る限り服はぼろぼろで擦り傷だらけ。
どう見たって大丈夫には見えんな、これは。

「ちょっと、私の家までお越しく下さいな。治療いたしますので」

まあ、ここは好意に甘えておこうか。

「すみません、ご迷惑おかけします」

「そういえば、自己紹介もまだでしたわね。私はベールと申します」

「私はケイスと申します。冒険者をやっております」

と、お互いに自己紹介をしあつた。
まあ、もちろん分かってたけどね。

「あら、それではネプテューヌ達が言っていたケイスさんと言う方は……」

「多分、私のことではないかと。ネプテューヌさん、ブランさん、ノワールさんと面識ありますから」

「へえー、不思議な縁ですねえ」

そんなことを話しながら、俺とベールさんは教会のほうへ向かって
いた。

「そういえば、何をそんなに急いでいたんですか？」

「えーとですね、今日は実はゲームの発売日です…」

ベールさんの声が段々と小さくなる。

「それで、…その…を買っ…、自分の…でやるのを…」

声がどんどん小さくなって、聞き取りづらい。

多分、女神がそんなことをやっている、と知られたくないのかなあ。だとすると、俺の取るべき行動は…と。

「あ、ゲームですか？俺も結構やりますよ？キンタとかの格闘ゲームがメインですけど」

「キンタですか？あれ、結構難しいんじゃないんですか？」

「いや、ゲーセンで鍛えましたから」

もちろん、前の世界でね。

「それで、今日買ってきたゲームって何です？」

「これは、武装紳士mk2って言うゲームで、紳士の育成ゲームなんです。一年前に武装紳士って言うのが出たんですけど…」

やべえ、語りだしちゃった。

こっちがゲームをやる人間だと知った途端にこれかい。

ちなみに、教会につくまでこの武装紳士と言うゲームがいかに魅力的なゲームなのか、と言うことをずっと聞かされた。

勘弁してくれ。

教会について、ベールの私室らしき部屋に通された。

ベールは、「ちょっとだけ待っていてくださいね」とだけ言い残し、部屋を出て行った。

おそらく、薬などを取りに行ったのだろう。

それから少しして、部屋のドアが開いた。

俺は、ベールが帰ってきたものだと思いそちらを見ると、それはチ力だった。

「お姉さま、帰っていらしてたんですね。今日もまたお一人で出かけるなんて。私に声を掛けていただければ、同行いたしましたのに……ってあら？」

これだけ喋って、やっと気づいたか、この人。

「あなたどちら様ですか？なんでお姉さまの部屋にいるんですか？即刻出て行ってくださいまし！ここは、あなたがいていい場所ではありませんよ！」

はあ、機関銃みたいな人だな、この人。
相手は疲れそうなので、相手にしないことでF.A。

「きいーっ。何で私の言うことを聞こうとしないんですか。大体、あなたはお姉さまの何なんですかっ！」

「私のお客様相手に、何やってるの？チ力」

ここでベールさん登場か。

正直、もうちょっと早く来て欲しかった。

「え？お姉さまのお客様、ですか？」

「さ、早く謝っておきなさい。今だったら許してくれるかもよ？」

そう言いながら、俺のほうにウインクするベールさん。
仕草が、一々色っぽいんだよなあ。

「え、でも……」

「いい事教えてあげましょうか？彼、あのケースって方よ？」

ベールさん、何かその言い方すごい気になるんですが。
何か俺、ひどい事言われているような気がするんだが……。

「え……。冗談ですよ、お姉さま。あのブラックハートを一撃で
粉碎したっていう、あの？」

ぶうつ！

おいおい、何か話が大きくなって伝わってるぞ。

「ええ、そうよ。もし彼の機嫌を損なうのであれば、貴女を容赦な
く外へ放り出しますからね？」

そう言いながらにいつと笑っていた。

こ、怖ええ。ベールさん、マジ怖ええ。

冗談って分かってても怖ええ。

「ひいひいつ。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。命だ
けは勘弁してください」

土下座をして涙を流しながらそういうチカさん。
うん、こういうチカさんは新鮮だなあ。（現実逃避）

「…だそうよ、ケイスさん？」

何か、俺すごい悪者にされてない？

「チカさん？」

「はいっ!？」

そんなに怯えなくてもいいと思うんだけどなあ。（・ω・）
ヨボーン

「俺、そんな人に見えます？」

「はい」

…見えるんかい。

「そうですか、だったら…肅清ですね」

「ひっ!？」

ちょっと、一芝居打ちますか。

「だったら、こっちに来いや」

そう言っつて、チカさんの胸倉をつかんで外に行こうとする。

チカさんは体が硬直してしまっているようで、簡単に持ち上がった。

「ベールさん、ちょっとだけ待っていてください。すぐに戻ってきますんで」

そう、いい笑顔で言っておいた。

と、そうだ。こっちもやっておかないと。

俺は、チカさんの耳に顔を近づけ、チカさんにだけ聞こえる声量でこう言っておいた。

「別に、あなたに何をするわけではないですよ。もう少しだけ付き合ってくださいね。いいものが見れるかもしれませんよ?」

side ベール

え?何がどうなったの?

チカにちよつと反省してもらおうと思ったただけなのに。

だけど、現実になっちゃった。

チカだけは助けないと。

∴私はどうなってもかまわないから。

私はそう思い、ケイスさんの後を追った

side ベール END

さて、そろそろかな?

「お待ちください！」

うん、来た♪

「何です？」

俺は、できるだけ低い声でそう言った。

「チ力を返してください！」

「どうして、と聞いても？」

「彼女は何もしていないじゃないですか！」

「侮辱しましたからね、私のことを」

「それについては、私が謝りますから、ですから！」

「それでは足りませんね。貴女が彼女の代わりになりますか？」

さてベールさん、ここが正念場ですよ。

答え如何では…。

「彼女を助けてもらえるなら、それでもいいです」

即答ですか。

さすがですね、ベールさん。

「だそうですよ、チ力さん。いいもの見れたでしょ？」

「はい」

「それじゃ、2人で私を騙したの？」

「というか、ねえ。ベールさんが悪いんですよ？あんな悪い顔をするから」

「うっ」

流石にやりすぎたと思ったんだろうな。

「ですが、あなたもひどいですわよ？何もあそこまで…」

「だって、意趣返しをしたかったものですから」

まあ、確かにやりすぎた感はあるけど、ちゃんと目的はあったからなあ。

「まあまあ、お二人とも。もういいじゃないですか、過ぎたことですし」

「お前が言っな！」

俺とベールさんの声がハモっていた。

……SAVE

第20話 ゲーマーの女神様（後書き）

…この、ラッキースケベが。

ケイス「え？俺、何もしてないじゃん」

みんなの意見を代表して言っただけだ。他意はない。

ケイス「ちなみにだが。なんでノワちゃんがウォーライクなんだ？」
ウォーライク：W A R L I K E つまり、戦闘狂とか好戦戦士
とか言う意味

いや、真実じゃね？

というか、今回悪い顔だなー、お前。

ケイス「やらせたのが自分だ、っていう自覚はあるのか？」

いや、だってさ。

ベールさんと道でぶつかる

←
ベールさんの部屋に連れ込まれる

←
チ力と鉢合わせ

←
チ力と口論

てな感じにしかならんだろ。

ケイス「いや、だからどうしてああなったんだよ。」

ノリ？

ということだ。

それでは次回、「特命課メンバー」でまたお会いしましょう

ケイス「あ、逃げやがった」

第21話 特命課メンバー（前書き）

ケイスはリーンボックスでの悪夢を乗り越え、その翌日教会でティ
ータイムを満喫していた。

その最中にリーンボックス特命課の話に上がった。
さて、これからどうなることやら。

第21話 特命課メンバー

…まあ、何だ。

この間まで色々あったわけだが。

今は、何事もなかったかのように3人で優雅にティータイムを楽しんでいた。

「流石は女神様、紅茶とゲームには金をかけるみたいですね」

「…私は、どう反応すればよろしいのかしら」

「事実じゃないですか、ベール様」

本当だったんだ…。

まあいいや。

「それはそれとして、だ。紅茶も美味しい、このクッキーも結構いける。で、何を企んでる？」

俺がそう言うと、二人はビクツと反応した。
やっぱりか。

「いえ、別に何も…」

チカさんはそう否定していたんだが。
いずれ分かることでしょうし、とベールさんは話を切り出した。

なんでも、今現在リーンボックスでは治安が徐々に悪化しているらしい。

目に見えて悪化しているわけではないらしいのだが、ストッパーが効いていないらしいんだ。

まあ流石にそうなっていると教会も何もしないわけにはいかず、自衛組織を結成するに至った。

その結成した組織は、リーンボックス特命課というらしい。

「結成したまではいいんですが、この組織のボスが役に立たなくてですね」

ま、よくあることだね。

「街中に女装をして現れ、歌を歌って去っていくと言う暴挙を繰り返してまして」

ちよ。それどこのアイマスCM？

「それなので、この間クビにしたんですが、いい人材が見つからず

…」

「それで、俺にそこに入ってくれってこと？」

「いえ、それはそれで魅力的ですが、そうではないです」

まあ、請われても入る気はないけどね。

としたら、何だろう。

「そのクビにした元ボスなんですが、火山に陣取っているらしいのです」

はい？

「その者は、ボスを任せられるほどに腕が立ちまして、今のメンバーでは、誰も歯が立たない状態なんですよ」

「ですから、その元ボスを倒してきて欲しいのですが、ダメでしょうか？」

なんという。

ま、でもそのくらいの依頼だったら、受けられるかな。

「いいですよ。そのくらいだったら」

俺がそう答えると、2人はお礼を言ってきた。
まだ早いんじゃないかねえ、礼つてのは。

「そうしましたら、案内役を付けさせていただきますね」

そう言つて、ベールさんは手を2回パンパンと鳴らし、こう言つた。
「ケイブ、いるのでしょうか？」

その直後、ベールさんの影が持ち上がり、人の形を取つた。
…ケイブさんだった。

「…ここに」

「あら、ケイブ。今日はそこからご登場ですね」

後から聞いた話だが、ケイブさんはマジで神出鬼没らしく、部屋の隅から現れたり、どこぞの隙間妖怪よろしく空中に裂け目を作りそこから出てきたり、とするらしい。

見てみたいような見たくないような。

「…何？」

「この方に、あの変態を倒してもらおうと思ひまして。道案内をお願いできる？」

「了解。ついてきて」

ケイブさんはそう言うと、どんどん歩き始めてしまった。つていうか、今から倒して来いつてことかよ。ま、いいかと思ひ、ケイブの後を追いかけた。

ケイブはどんどん進んでいつてしまい、なかなか追いつかせてもらえなかった。

それなりに混んでいる場所などを何箇所か通っているんだが、何もなにかのように進んでいる。

まあ、それがケイブなんだろうなあ。

それからもう少し進み、アンダーインヴァースの入り口に着いた。

「…ここ」

そう言つて、入り口を指差すケイブ。

そして、すぐに踵を返して来た道に戻ろうとしていた。

「おい、ちょっと。待つててくれないのか？」

「…べールに言われたのは案内だけ。案内したから、帰る」

いやいや、ドライすぎるだろ、それは。

「んー、10分でいい。少しだけ待っててくれ」

多分、10分もあれば倒せると思い、俺はケイブにそう言った。
ダメかな？

「ん…分かった。10分だけ待とう」

そう言っつて、その場に立ち止まった。

それを確認してから俺はアンダーインヴァースに入り、元ボスを懲らしめるのだった。

所要時間3分。

あっけなかったなあ。

「ユニコーンモードまで持ち出して言っセリフではないですよ、マスター」

元ボスを倒し、ケイブのところに戻ると、彼女は先ほど立ち止まっていた場所で本当に待っていた。

彼女は空を見上げていた。

「…早かった」

「まあ、急いだからな。それより、何か見えるのか？」

「…青い空」

「さいですか」

おれはそう言い、歩き出そうとしたんだが、ケイブが歩き出そうとしなかった。

どうしたのか、と尋ねると。

「まだ、１０分経ってない。それに、まだ空を見ていたい気分」

と言った。

俺は「しょうがねえな」と言い、一緒になって空を見上げた。
空は、高いねえ。

俺が中に入ってから１０分くらいは経っただろうか。

まだ、ケイブは歩き出そうとはしなかった。

不思議に思い、俺はケイブのほうを見てみた。

ケイブは、ちょうど視線を俺の方へ移したところだった。

「行くか？」

「…ん」

そんな会話ともいえないやり取りをし、俺達はリーンボックスへ歩き始めた。

少し歩いたところで、ケイブが俺に話しかけてきた。

「…空は…好き？」

「空？」

「そう、あの空」

そう言つて、上を指差す。

「空、ねえ」

そう言つて、空を見上げる。
好きでも嫌いでもないなあ。

「…好き？」

「わからん。でもまあ、嫌いではないな」

「…そう」

そう言つと、ほんの少しだけ暗い顔をした。
すぐに元の表情に戻ってしまったが。

そんな時だった。

くくく
♪

あの歌声が聞こえてきたのは。

side ケイブ

歌声が聞こえる。

何よりも、透明な。

儚く、それでいて強い歌声が。

私の魂を揺さぶるような、優しい歌声が。

side ケイブ END

歌声が聞こえてきた公園。

俺とケイブはそこへ入っていった。

そこは、前に5pb.と会ったあの公園だった。

「~~~~~♪」

やっぱり、5pb.か。

そう思い、横を見てみるとケイブが5pb.を見ていた。
この歌が終わったら、話しかけよう。

「よ、5pb.。久しぶり」

「え？あ、ケイスさん！」

「やつほー。相変わらず、良い声してるねえ」

「あはは。お世辞でも嬉しいです。…あれ？そちらの方はどなたです？」

5pb.はそう言って、ケイブのほうを見た。

見られているケイブは、何か萎縮しているかのようにも見える。
ゲームとは逆だなあ。

「…きれいな声、だった」

「ありがとうございますっ！」

ここで5pb.とケイブがお互いに自己紹介。
そして、色々な話をしているようだった。

まあ、女の子同士の話だったから、俺は席を外させてもらったが。
そして、この2人は友達になったらしい。

5pb.と別れ、ケイブとリーンボックスへ向かってすこし経った
とき。

唐突にケイブが「…ありがと」と言ってきた。

「何がさ」

「…10分待つてて、得をした」

「そうか、それは良かった」

「…だから、これはお礼」

そう言うと、ケイブは俺の頬にキスをしてきた。

「他意はないから」

そう言ったケイブの頬は、少しだけ赤みがかった。

……SAVE

第21話 特命課メンバー（後書き）

…お前は。

ケイス「俺、今回は本当に何もしてないじゃん」

…俺は何も言ってないが？

ということで、ケイブ登場でしたー。

ケイス「というか、本文でベールさんとチカさんがしゃべっている
と、どっちがどっちだか分からなくなってくるな」

言うな。書いてて、俺も混乱したんだから。

あれ？これどっちが言ってるんだっけ？てな。

まあ、これでリーンボックスも回ったし、あとは…。

????1「ちよーっと待つですよ！」

????2「わたしたちが出てないよっ！」

うん、ごめん。

君達を出す構想は元々なかった。

????1「なんですよ！？」

????2「だって、ファルコムやケイブは出てるじゃん。意味が分からないよー！」

まあ、そういうことで、たぶん次回はリーンボックス最終回です。

ケイス「うーん、長かったんだか短かったんだか。やっと、本編ちよい前まで来た?」

いや、マジでどうしようか考え中。

一応、設定上2〜3ヶ月くらいは残ってそうなので、どこかでゆっくりさせる気でいます。

ケイス「俺としては、ラステーションでゆっくりしたいかなー、なんて」

ということ。

それでは次回、「振り出しに戻る?」でまたお会いしましょう

ケイス「おい、無視すんな。あ、それじゃまた次回で!」

第22話 振り出しに戻る？（前書き）

ケイスはリーンボックスで主要な人物に出会い、しばしの休息を満喫していた。

だが、やっぱり気になるのはあの子だった。

そして、ケイスはリーンボックスを離れる決意をする。

ケイスの選択は、吉と出るか凶と出るか。

第22話 振り出しに戻る？

「…そういえば、これで4国とも回ったんだよなあ」

俺はベッドの上で横になりながらそう呟いていた。

そして、今までのことをいろいろと思い出す。

俺が初めにこの世界に現れたのはプラネテューヌのバーチャフォレストだったつけ。

そこで、スライヌに襲われてた（ように見える）俺をネプギアに助けてもらって。

そのあとギルドに行きたいっていうネプギアの護衛をするためにアイエフと戦ったんだよな。

あの時は焦ったよな。まるっきり戦闘経験ナシの俺が戦闘をさせられたんだから。

まあ、どうにか切り抜けられてたし結果オーライだろ。

それでギルドに行つてネプテューヌに会って、ハネダマウンテンで野良ドラゴンを退治。

あの時のドラゴンは実は結構強かったんじゃないかなー、とか思うんだよね。

今の俺だったら、まあ楽勝なんだろうけど。

次にルウィーに行つて、だったつけDSTTに襲われてるロムちゃんラムちゃんを助けて。

で、教会に連れて行ってもらってブランさんとミナさんに会ったんだよな。

そのあと俺が来たのを狙ったかのようにキラーマシンを復活させたグリさんと戦うことになって。

グリさんも改心（ていうか、多分だまされてたんだろうなあ）して

くれたし、まあ良かったな。

ただ、もうルウィーにはゲームキャラがないってことだったからどうしようかってなって。

結局ネプテューヌに頼んでゲームキャラを貸してもらってキラーマシンを封印してもらったんだっけ。

このまま行くと、キラーマシンともう一回戦うことになるんだろくなあ。

あの時はラファールがなかったから、今だったら剣だけでも倒せるんじゃないかな。

そういえば、ルウィーからラスティションに向かっている時にファルコムさんに会ったんだっけ。

会ったって言うか、空から落ちてきたんだっけな、そういえば。思わずラピ。タを思い出したよ。

で、ファルコムさんは空に浮かぶ島から落ちてきたって言ってたなあ。

でも、原作だとそんなのはなかったはずだし、その島って何だろうねえ。

ラスティションでは、ノワちゃんに勝負を挑まれて大変だったなあ。でも、ラファールを手にした俺には、楽な戦いだったかも。

まあ、ノワちゃんの油断と粒子ブラスターがあつたから勝てたんだろくな。

そのあと、ユニに『師匠って呼んでいいですか？』って言われて。流石にアレは面食らったよなあ。

でも俺は基本は剣士だし、基本しか教えられなかったんだよね。誰か、いい師匠役はいないかなあ。…って、ケイブはどうだろ。

そして、ここリーンボックスでは公園で歌ってる5pb.と会って俺とアーンヴァルでファン1号2号にしてもらったんだよなあ。

原作ではアイドルをやっていたし、そのうち有名になるんだろうな。その後、あのゲーマーに会って、っていうか交通事故になって。

……やわらかかったなあ。

って、そうじゃない。

そのあと教会でチカさんと口論をして、仲直りをして。

で、ついこの間ケイブとアンダーインヴァースに行って、あの変態を倒したんだよなあ。

みんな、どうしてるかなあ。

またみんなに会いたいねえ。

「マスター、そろそろ次のところへ行きませんか？」

ベッドでまどろみの中にいた俺に、アーンヴァルがそう言うてくる。

「次のところねえ。次ってどこなんだろうなあ」

「そうですね。ギョウカイ墓場って所はどうなんですか？」

おいおい、アーンヴァルさん。冗談きついですよ。

「でも、全部回っちゃったしなあ。どうしようかねえ」

うーん、やっぱり堂々巡りになるな。

そう思っていると、アーンヴァルが口を開いた。

「それなら、始まりの場所に行ってみてはどうです？」

プラネテューヌ、ってことか。

そういえば、プラネテューヌでゆっくりした記憶がないからねえ。

「そうだな、それじゃ膳は急げ、だ」

そう言っただけ俺は部屋の中に散らばっている荷物をバッグに押し込み、アーンヴァルに渡す。

「ほい、アーンヴァル、頼む」

「神姫使いが荒いですよね、最近」

そう言いながら、異空間にバッグを投げ入れる。

「それじゃ、行くぞ。いざ、プラネテューヌ！」

そう言いながら俺は部屋のドアを開けた。

開けたとたん、周りからの痛いものを見る視線に打ちひしがれる。しまった。ホテルの中つてのすっかり忘れてたわ。

そして、リンボックスの教会。

「それでは、俺はこれで失礼しますね」

そう言っただけ、出国の挨拶をする。

あ、前回の報告はちゃんとやってるからね。

「あら、もう行ってしまわれるんですか？一回も私の部屋を訪れないままで」

正直、あまり行きたくなかったんで。

だって、どうせBLのポスターとかはってあるんだろうし。
俺はその言葉を飲み込んだ。

「そういえば、次はどこに行くんですか？」

「プラネテューヌに行こうと思ってます。こいつが、まだプラネテューヌを見たことがないんで」

そう言いながらアーンヴァルを指差す。
ま、本当のことだしね。

「あら、そちらは？」

あ、そういえばベールさんとチカさんには紹介してなかったっけ。

「こいつはアーンヴァル。俺の相棒です」

「お初にお目にかかります。私^{わたくし}、アーンヴァルと申します。以後お見知りおきを」

そう言いながら、右手を胸の辺りまで持って行き、お辞儀をした。

「アーンヴァルさんと仰いましたかしら」

「はい、何かご無礼がありましたでしょうか」

アーンヴァルがそう言つと、ベールさんは目をきらきらさせ、こつこつと言った。

「貴女、私の妹になりませんか？」

「お姉さまっ!？」

「姿形も、立ち居振る舞いも可愛かったものですから、つい」

「は、はあ」

俺とアーンヴァルは若干引いていた。

「それにしても、アーンヴァルさんとどこかで一緒に戦ったような記憶があるんですが、気のせいでしょうか」

ベールさん、それは別のゲームです。

さて、と。それじゃ行くか。

「アーンヴァル、ラファールを呼んでくれ」

「何ですか？マスター。ここに敵は居そうにありませんが」

アーンヴァルは怪訝そうな顔をして言った。

「いや、某所だと女神化したりバイクで国間を飛んだりしてるんだ。ちよっと対抗したくてな」

「そんなところで対抗意識燃やさないでください。まあ、わかりました」

そう言うと、アーンヴァルはラファールを呼び出した。

「それじゃ、行きましょうか」

「待て。お前が融合しなくてもラファールコイツは飛べるのか？」

「もちろん飛べますよ。戦闘速度となれば話は別ですが」

…そうだったんだ。
知らなかった。

そして、俺とアーンヴァルはラファールの上に乗り、プラネテューヌを目指した。

…ちよつとだけ、グランニユーレの気分が味わえた。

side ネプギア

「えいつ、やーっ、…たあーっ！」

私は今、アイエフさんに稽古をつけてもらっている。

ケイスさんに借りた剣をもっと上手に使えるようになるために。

「ほら、ネプギア。足の辺りがから空きよ？」

アイエフさんはそう言って私の足のほうに攻撃を放ってくる。

「くうっ」

辛うじて直撃は免れたけど、やっぱりカスってしまった。

「ネプギア、そろそろ集中力が限界なんじゃない？一息入れようか？」

「あと、ちょっとだけお願いします！はあああっ！」

そう言つて。私は気合を入れなおす。

アイエフさんもそれに合わせて身構えてくれた。

多分、私が必殺技を出そうとしてるのが分かったんだろう。

「行きますっ！フォーミュラーエッジッ！」

高速の斬撃がアイエフさんを襲う。

けど、アイエフさんは涼しい顔でそれを受け流してしまっている。まだ、敵わないなあ。

side ネプギア END

ようやく、プラネテューヌ上空に到着。

懐かしいなあ、と思いながら下を見てみた。

そこでは、ネプギアとアイエフが剣を切り結んでいた。

「アーンヴァル、下に降りてくれ。知った顔に挨拶に行くぞ」

「了解です、マスター」

その後、ラファールは段々と高度を落としていくのだった。

s i d e ネプギア

流石に疲れました。

必殺技って、こんなに体力を使うものなんですね。

「どう、ネプギア。一回休憩入れようか」

「そう、ですね。…あれ？」

何か、上から降りてくる。

白い機体が私たちのほうに向かって降りて来ようとしていた。

「何？あれ」

アイエフさんがそう聞いてくるけど、私にもアレが何だか分からない。

「何、でしょうか」

そして、その機体に乗っている人が機体からジャンプし、私たちがいる場所に着地した。

「よ、ネプギアにアイエフ、久しぶり！」

そこには、懐かしくすごく会いたい人の顔があった。

s i d e ネプギア E N D

「ケイスさん！」

ネプギアがそう言っただけ俺のほうに飛びついてきた。

「ネプギア、久しぶりだな。元気してたか？」

そう言っただけ、左手をネプギアの背中に回し、右手で頭を撫ではじめた。

「…私は席をはずしたほうがいいかしら」

「いやいや、ここにいてくださいよ、アイちゃん」

「アンタにアイちゃんって呼ばれる筋合いはないわ！」

「カルシウム、ちゃんと取ってるか？アイちゃん」

「だっそれのせいだと思ってるのよ、まったく」

うん、2人とも変わってないなあ。

で、名残惜しいがネプギアを放して、と。

「おい、アーンヴァル。ラファールをしまってお前もこっちに来てよ」

俺がそう言っただけ、「了解です、マスター」と答え、ラファールを異空間にしまった。

で、アーンヴァルが落ちてくる、と。

「ちゃんと受け止めてくださいよ、マスター」

「はいよ」

そう言って、アーンヴァルをキャッチした。

……SAVE

第22話 振り出しに戻る？（後書き）

お前、前回で懲りずにまたそういうことをするか。

ケイス「いや、今回はしょうがないだろ。頭を撫でようとしたら勝手に左手も動いただけだ」

その所為で、ネプギアはああなってるが…。

ネプギア「（時折何かを思い出したかのようにニヤニヤしている）」

まあ多分、正ヒロインの座ゲット、とか思ってるんだろうなあ。

ネプギア「（ビクッ！）」

ということで、回想回＋リーンボックス終了＋フラグ建設をお送りしました。

ケイス「今回まとめたねえ。というか、これはフラグじゃないだろ、常考」

ネプギア「（何か悲しそうにしている）」

ああ、もう一々うるさいなあ。

次回、君をヒロインで書いてあげるから、あっちに行つてなさい。

ネプギア「（やったあ）」

ふう、やっとネプギアがあっちに行ったか。

ケイス「いいのか、あんなこと言っちゃって」

いいのいいの。元々書く予定だったし。

ということだ。

それでは次回、「ネプギアの成長」でまたお会いしましょう

あ、それとお知らせ。

ルートについてですが、多数決の結果、女神に同行することとなりました。

オリジナルに投票してくれた方々、申し訳ないです。

せっかくなんで、オリジナルの方のシナリオをちょっとだけ紹介。
行き先はファルコムが落ちてきたあの空に浮かぶ島、イクスを舞台にするつもりでした。

ここで、アーンヴァルが使用不能となってしまうため、ケイスの新武装が手に入る予定だったりしました。

実は、この島に行こうが行くまいが関わらせる予定だったので、これ以上のネタバレは控えておきます。

それではー。

第23話 ネプギアの成長（前書き）

ケイスは再びプラネテューヌを訪れていた。

ネプギア「最愛の妹、ネプギアに会うために」

ケイス「最愛の妹って何!？」

ネプギア「ええー、違うんですか？」

…いいからお前ら黙ってる。

と、とにかく。

プラネテューヌでのまったりとした休息の話です。

第23話 ネプギアの成長

「ともかく。久しぶりね、ケイス。他国での活躍は聞いてるわよ」

アイエフがそう言うてくる。

まあ、諜報部勤務だから、色んな話が聞こえてくるんだろう。

「あはは、そんなことないですよ。アイエフさんもお元気そうで」

まあ、キラーマシンを倒したりしてたし、その辺は知ってるんだろ
うな。

「まあ、ね。それなりにやらせてもらってるわ」

同じ諜報部員にも、あのケイスと戦った人、と言うことで一目置か
れるようになったとか。

たはは。

「イストワール様が『あるとき、強引にでも引き止めて国に引き入
れるべきでした』って言うてうるさかったのよ」

…まあ、いーすんさんだったらそういうこともあるんだろうなあ。

「光荣ですね、そう言うてもらえると」

いやあ、あまり褒められなれてないから、恥ずかしいねえ。

「むう~~~~っ」

アイエフさんとばかり話していたら、その横でネプギアが頬を膨ら

ませていた。

心なしか、睨まれている様な気もするが、…気のせいだろ。

「ネプギアも、元気だったか？」

俺がネプギアのほうを向いてそう話しかけると、ネプギアはぱあつと笑顔になり、「はいっ！」と答えてくれた。

「それはそうと、報告があるのよ。ね、ネプギア」

「は、はいっ」

報告？何があっただんだろ。

「じ、実は…女神化、できるようになったんです！」

へえ、女神化できるようになったんだ。

「まだお姉ちゃんみたいに汎用のプロセスサユニットは使えませんがどね…」

そう言つて、えへへと恥ずかしそうに微笑んでいた。

「すごいじゃないか、ネプギア。他の国の候補生は、まだ女神化なんてできなかったぞ？」

そう言つと、ネプギアはちょっとだけむっとしたように

「他の国の候補生じゃなくて、今は私の話ですっ！」
と強い口調で返した。

side ネプギア

うう、やっちゃった。

こんなこと言うつもりなかったのに。

なんか、他の子のことを出されると、胸がモヤモヤして。
私って、ダメな子だなあ。

「ごめんな、他の国の子じゃなくて、今はネプギアの話だったよな」

ケイスさんがそう言って謝ってきた。

ううん、悪いのはケイスさんじゃなくて私。

「いえ、私もちょっと強く言い過ぎちゃったみたいです。ごめんなさい」

そう言って、私は頭を下げた。

side ネプギア END

「それで、ですね。ケイスさんに、私の女神化した姿を見てもらいたいです。いいですか？」

それは願ってもない。

俺はもちろん、2つ返事でOKした。

「それじゃ、いきますっ。はあああああっ！」

ネプギアが気合を入れ、右手を上に掲げる。

そうすると、ネプギアから薄紫色の光が発され、それが光の柱を形作る。

そして、その光の柱が粒子となる中、女神化したネプギアがその姿を現す。

「プロセツサユニット、装着完了！女神ネプギア、ここに参上です！」

うおおおつ。

生で女神化が見られるなんて。
生きててよかったあ。

「どうですか、ケイスさん」

ネプギアが少し恥ずかしそうに、そう聞いてくる。

まあ、出てくる言葉は1つしかないよね。

「…綺麗だ」

今まで他の女神の女神化を見てきたけど（ゲーマー除く）、みんな綺麗だったしね。

それにしても、無反応？

そう思ってネプギアのほうを見てみたんだが。

「（ぼそぼそ）」

何かボソボソと言いながら、左右の人差し指同士をツンツンしていた。
なんぞこれ。

「なあ、ネプギア、武器はどうなってるんだ？」

「え？あ、は、はい。何ですか？」

聞いてなかったのかよ。

お兄さん悲しいよ。

「いや、武器はどうなってるのか、って聞いたんだよ」

「えーと武器は…」

と言って、持っている剣を俺のほうに見せる。

あれ、さっきは木刀を持っていたみたいだったけど、やっぱり変身後は一緒に変わるみたいだな。

「今は、この剣ですね。元が木刀だから使いやすいんですよ」

剣だけ？

確か原作だとその剣が銃にもなってたはずだが。

「その剣、銃とかに変形しないのか？」

「剣が銃に変形する訳ないじゃないですか」

そう言いながら、ころころと笑う。

だったら、それを覆してやろう。

「そつえば、俺が預けたバルムンクはどこに？」

「えっと、変身すると剣の形が変わっちゃうじゃないですか。だから元に戻らなかったら嫌だなと思って、教会に置いてあるんですよ」

そうか。

まあ、アレで稽古をしているかと思ったけど、そういう理由で持っていないかったのか。

それじゃ、ここに呼び寄せるか。

「それじゃ、ちょっと待ってるよ、ネプギア」

俺は一言そう声を掛けると、呪文を紡ぎだす。

Field Fixed Coordinate Realigning
「時間軸固定、空間歪曲、顕現」

俺がそう唱えると、俺の前にバルムンクが現れた。
それを、一度掴み、さらに唱える。

Object Inverse Heavy Addition
「物体変質、重火器追加、変性」

そして、バルムンクが光り始め、その光がパンツと弾ける。
あとは、と。

Field Release
「時間軸解放」

こんなもんだろ。

「あ、アンタ魔法使えたの？」

「あれ、言っただけ。まあ、普通の魔法とは使い方も性質

も違うけどな」

そう言いながら、バルムンクを軽く振ってみたりする。
うん、重さは変わってない。

で、多分これをネプギアに渡すと…変性するはずだ。

「ネプギア、これ持ってみな」

そう言つて、バルムンクをネプギアに渡す。

その瞬間、バルムンクが機械的な白い幅広の剣に姿を変える。

「マシンブレード機械剣だ。けど、これだけじゃないんだぜ、これは」

そう言つて、ある言葉キーワードをネプギアに教えた。

「言ってみな、キーワード」

「はいっ。ランチャーモード！」

『了解、ランチャーモード起動します』

そう機械音声が答え剣が変形を始め、ランチャーに変形を完了する。

「え、えええええっ!？」

うん、予想通りの反応をありがとう。

「それは俺からの贈り物だよ。よくがんばったね、ネプギア」

「ありがとうございます、ケイスさん」

その後、ネプギアが女神化を解除するとともにバルムンクは元に戻って。

残念そうにバルムンクを見ているネプギアがそこにいた。

「ケイスさん、いつもあの変形と違ってできないんですか？」

「まあ、そう造っていないからねえ」

何かかわいそうだなあとはい、この言葉を言ったのが間違いだった。

「設計図なら書くけど、…要る？」

「要りますっ！」

メカフェチの女神、ネプギアが誕生した瞬間だった。

……SAVE

第23話 ネプギアの成長（後書き）

はい、と言うことで無事（？）ネプギアが女神化した話でした。

ケイス「何か、原作と微妙にあってるような違ってるような」

こまけえことは（ry

とはいえ、オリジナルの武器を渡したのは間違いかなあ。

ケイス「まあ、普通の剣で銃撃できる原作のほうのアレかとも思うけど…」

と言うことで、全くのほんとしていない束の間の平和回でした。

ケイス「ってことは、次回から？」

んむ。

次回から、キャプションが移ります。

題して、「第一章 第一次マジエコンヌ大戦」

ケイス「やっと原作に追いつくのか」

追いつくって言うか、原作では序章扱いだからね、ここ。

ケイス「とはいえ、ここからマジエコンヌとの戦闘が始まるんだな」

ということ。

それでは次回、「終わる平和な日々」でまたお会いしましょう。

第24話 終わる平和な日々（前書き）

ケイスが再びプラネテューヌを訪れてから数日後、異変は起こった。世界に、何が起こったというのだろうか。

第24話 終わる平和な日々

side マジェコンヌ

「……やっと、実体化できたか」

ギョウカイ墓場の一角で私はそうひとりごちる。

私は、ただただマジェコンヌ様復活を命ぜられたマジェコンヌ様によつて作られた存在。

マジェコンヌ様は識別子として『マジック』という名前を下さった。

私の名は『マジック・ザ・ハード』。

世界を闇に落とす稀代の魔術師、といったところか。

「さて、祝砲としてこの世界にモンスターを送り込んでやろうか」

そう言い私は、すべての国にモンスターを送り込み、活性化させた。この世界の人間が奏でる悲鳴を、マジェコンヌ様の^{チカラ}栄養とするために。

side マジェコンヌ END

プラネテューヌではのぼのと過ごしていたある日の昼時。

俺、ネプテューヌ、ネプギア、いーすんは教会で昼食を摂っていた。あ、とりあえず今日の昼食は俺特製のナポリタンね。

つて、この世界にナポリタンとかあったっけなあ。

その最中、一人の兵士が教会の戸を乱暴に開け、こう言い放った。

「イストワール様、大変です！街の周りがモンスターで埋め尽くされています」

普段であれば、『食事時です、後で聞きます』というイーすんもさすがにそんな態度は取れなかったようだ。

「分かりました。30分ほど待ってください、今は食事時です」

と言っ…て、あれ？いつも通り？

ここ、突っ込んでいいところかなー！

うん、突っ込もう。

「イーすん、そこは3分じゃないの？」

って、ネプテューヌ。

お前、人の突っ込みどころを取るな。

しかも、突っ込むところが違うし。

「お姉ちゃん、そうじゃないよ」

おお、ネプギア。君は唯一マトモだったか。

「そっけいのは、食事をしながら聞けばいいんですよ。ね、ケースさん」

…期待した俺がバカだったよ。

うん、そうだったよね、君達は。

「あの、それじゃ説明させてもらってもいいですか？」

君も、律儀に待ってるんじゃない。

早く説明して自分の持ち場に帰らないと大変なことになるでしょ？

「プラネテューヌ、ハネダシティの近隣でモンスターが大量に発生しています。現在、各街の防衛団が対処していますが、街中に被害が及ぶのは時間の問題かと」

「なんでそれを早く言わないんですか！」

「いーすんさん……。アンタがそれを言うか。」

まあいい。ここは素早く行動を起こさないといけないだろ。

「ネプテューヌ、ネプギア。とつとと行くぞ」

俺はそう言っただけで席を立ち、扉のほうへ向かった。
そして後ろを振り返ってみると。

「ちよつとまって、これ、食べてからね」

「ネプテューヌ、食べるか喋るかどっちかにしろよ」

「……」

「食べるんかい！」

と、ネプギアは……。

「難しい問題ですね。ケイスさんが作った料理とケイスさんと一緒に行動。どっちも捨てがたいです」

…って、何を悩んでいるんだ。orz

「二人とも、そんなもんいつでも作ってやるから、早く行くぞ!」

「うん!約束だからね?」「はいっ!」

…この回答に一抹の不安を感じるんだが、気のせいかな? まあいい。

そう思い、モンスター討伐に向かう俺達だった。

side ミナ

何か、外が騒がしいですね。

そう思い、私は教会の外に出てみたのですが。

そこには、街の方々が集まって固まっていました。

「どうしたんですか?」

何が起ったのか分からず、私は皆さんに問いかけました。

そして、返ってきた言葉に啞然としました。

何せ、街の外にモンスターが大量発生していると聞いたのですから。

今は、グリさんが街の外にいてモンスターを追っ払っているとか。

だから、皆さんは町の中でじっとしていたんですね。

私は急いで教会の中に引き返し、ブラン様の部屋を訪れました。
コンコン。

「ブラン様、一大事です。ちょっと入りますよ」

そう言つて部屋の中に入つていったのですが、部屋の中は丸められた紙でいっぱいになっていました。

「こつちも忙しいのよ。新刊を落としそうなんだから」

「そんな場合じゃないです！街がモンスターに襲われているんです！」

「なん…だと」

ブラン様はそう言つたその場で女神化されました。

「アタシの国でそんなことするなんて。命が惜しくないみてえだな」

ブラン様は窓ガラスを突き破り、そのまま街の外へ向かったようでした。

外からは、『おお、ホワイトハート様が出られたぞ』という明るい声が聞こえてきました。

ブラン様、せめて窓を開けて出て行ってください。

修理代もバカにならないんですよ（泣）。

side ミナ END

side ノワール

ある日、私はケイに黙って街を出て、リビートリゾートに来ていた。何だかモヤモヤして、何もせずにはいられなかったのよ。

「ふう、何でもいつもアイツのことを思い出しちゃうかなあ」

まあ、アイツってのは、前に女神以外で私に勝った事のある奴のことなんだけど。

あれからアイツ、顔を見せないのよねえ。

元気でやってるかしら。

そんなことを思いつつ、ふと周りを見回した。

なんとなく、周りに視線を感じたからだ。

さっきここに来たときに、全部のモンスターは狩ったんだだけだね。

が、見なければ良かったと後悔した。

なぜなら、私が今いるフロアにモンスターが溢れていたから。

「もう！なんだってのよ！」

そう言つて、私は女神化し、そのフロアのモンスターを殲滅した。けど、何か嫌な予感が止まらない。

「ユニ、ケイ、無事でいて！」

私はそのまま空を飛んでラストेशनへ向かうことにした。

side ノワール END

side ケイブ

何だろう、この感じ。

何か、空気がチリチリするといつか、なんと言つか。
私はそんな違和感を感じつつ、見回りをしていた。

今の私は、リンボックスリンボックス特命課の職員。
日夜この国を守るために働いている。

「ケイブさーん」

そんなに離れていない場所からそんな声が聞こえてくる。
この声、これは、十中八九5 p b . ね。

「あら、5 p b . どうしたの」

「いえ、ケイブさんの姿を見つけたから声を掛けたんです。
…ダメでしたか？」

彼女はシュンとした感じの声でそう言った。
…何か、私悪い事したかしら。
そう思ったときだった。

『グオオオオアアアツ』

「きゃっ!？」「…何？」

あれは、ドラゴン？
しかも、いつもよりも凶暴な奴みたいね。
それに、それだけじゃない。
モンスターに囲まれてる？

「…5 p b . 走れる？」

「…！はい、もちろん」

上出来、ね。

彼女もおそらくモンスターに囲まれていることに気づいた。

「教会まで走るわよ、ついて来れる？」

「ミュージシャンの体力、伊達じゃないことを見せてあげます」

私たちはそう言って笑いあい、教会を目指して走り出した。

この事をチカ、ひいては女神様に伝えるために。

s i d e ケイブ E N D

s i d e マジエコンヌ

ほう、どの国も優秀な人材がそろっているようだな。

初動が早く、対処も早くに終わっている。

ということは、力押しでは無理がある、か。

それに、人間を殺してしまつては意味がないから、な。

神が復活しようと、信仰する者がいなくては話にならないからな。

「だが」

そう言い、私はある国の映像に目を向ける。

「この男、何者だ？それに、コイツが装着しているモノ、どこかで見た記憶がある」

記憶を探ってみるが、何も思いつかない。

おそらく、マジエコンヌ様の記憶にあるのだろう。

「まあ、いいさ。こうなれば、あとは女神どもをおびき寄せ、殲滅するだけだ」

そう言い、私はニッと嗤った。

side マジエコンヌ END

はあ、疲れたぜ。

夕方になってやっとかたがついた。

全く5〜6時間も連続で戦うなんてはじめてだぜ。

そんなときだった。

夕焼けの色だった空は次第に曇り始め、薄暗くなってしまった。

そして、何かくぐもった感じの音が聞こえてきた。

『我等はマジエコンヌ。犯罪神マジエコンヌを崇拝する教団なり』

『人間よ、女神などという矮小なる者ではなく、犯罪神マジエコンヌを崇拝せよ』

『我等の神、マジエコンヌ様を崇拝するのであれば、それなりの見返りを与えようぞ』

その言葉の後、空から何かが落ちてきた。

…これは…マジエコン、か？

『とりあえず、今は挨拶代わりにいくつか贈り物をしておいてやっ

た』

『それから、我等に反旗を翻す者よ、我等はギョウカイ墓場にて待つ』

『我等は逃げも隠れもする必要がないからな』

言葉が終わったあと、空は先ほどと同じ色合いに戻った。

だが、俺の周りにはマジエコンと思しきものが落ちていた。

…これが、ほんとう真実なんだ。

プラネテューヌに帰ると、街の中はすごい騒ぎだった。
特に子供達が。

「これ、すごーぞ。俺、このゲーム欲しかったんだよな」

「うんうん。これで、この子のゲーム代にまわしていたお金を他に使えるわ」

「おおー、隠れキャラがこんなに簡単に出るなんて。すごーんだな、マジエコン又って」

みんな、さつき落ちてきたマジエコンを拾ったようだった。
拾えなかった人たちは、それを羨ましげに眺めていた。

「…マジエコン又を崇拜すれば、マジエコン^{コレ}、もらえるのよね」

「そんな思考、しちゃだめだ！」

俺はそう訴えるが、誰もそんな言葉に耳を貸してはくれない。
やっぱり、人間って欲望には弱いんだな。

そう思いつつ、教会へ帰ることにした。

⋮
S
A
V
E

第24話 終わる平和な日々（後書き）

とうとう、マジエコンヌが動き始めましたよ。

ケイス「というか、戦闘の描写が皆無なんだが」

苦手なんだよう。

ケイス「じゃあ、何でこの作品を書いてるんだよ」

ま、いいじゃん、そんなことは。

ということ。

それでは次回、「4女神、集結」でまたお会いしましょう。

第25話 4女神、集結（前書き）

ケイスはマジエコンヌが送り込んだモンスターを打ち倒し、教会へ戻っていた。

そこで待っていたのは…。

11/13 ちよいと文章いじりました。ヘタレさん、サンクスです。

第25話 4女神、集結

「ただいまー」

俺はそう言いながら、教会のドアを開け中に入った。

だが…そこには、誰もいなかった。

いつもだったら、街のおばちゃんたちといーすんが世間話をしていたのにな。

やっぱり、状況は変わっちまったのか。

そんな時、教会のドアが『ギイツ』と音を立てて開かれた。

「いーすんさん、ただいまー」

「いーすーん、おなか減ったー」

教会でボーっとしている間に、ネプテューヌ姉妹が帰ってきたようだ。

「お疲れ、二人とも」

「あ、ケイスー。ケイスもお疲れー」

「さ、さすがに疲れましたー」

ネプテューヌはほぼいつもどおり、ネプギアは…相当疲れてるみたいだな。

ネプテューヌに肩を貸してもらって、歩くのも億劫な感じだった。

「そついえば、いーすんがどこにいるか知ってる？」

いつもこの時間だったら教会にいるはずんだけどな、と続ける。
ま、多分だが自分の部屋にでもいるんだろ。

「…私が何か？」

「どわあああつ！」

扉のほうを向いていたから、いーすんさんが後ろから近づいてきているのに気づかなかったよ。

「失礼な。淑女^{レディー}に向かってそんな声を発するなんて」

いーすんさんは、いつも通りふよふよと浮いていた。
まあ、顔はげんなりとしていたが。

「とりあえず、今の状況を伝ええておきますね」

そう言つて、いーすんさんは真面目な顔をして切り出した。
要約すると、こんなことらしい。

・プラネテューヌだけでなく、ラステイション、ルウィー、リーン
ボックスもモンスターに襲撃されたこと。

・4国とも、モンスターの襲撃を退け、今は一時的に平和になっていること。

・小型機械（まあ、おそらくマジエコンのことだろう）が空から降
つてきたこと。

・その機械のおかげで暴動が起きている地域が存在していること。
・4国のシェアが減少し始めていること。

「つてゆーことは、ゲームギョウ界全土でプラネテューヌと同じ状

況が起きてるって事？いーすん」

「そう思っで間違いないかと」

「で、それらを打破するには、奴らの招待を受ける必要がある、って事ですか」

「そうですね、おそらくそれしかないでしょう」

だけど、未知数の敵相手には、方策が立てにくいということか。

「だったら簡単だよー。わたしがひとつ飛びギョウカイ墓場について、誰かを倒してくればいいんでしょ？」

おい、ネプテューヌ。短慮にも程があるぞ。

「お姉ちゃん、誰を倒せばいいか分かってるの？」

「そんなの…全部倒せばいいんだよっ！」

ガクッ。

そうじゃないだろ、ネプテューヌ。

「まったく。戦力が分かってないのにどうやって戦うんだよ。ブランさんとかベルさんが100人ずついても、勝てるのか？」

「…そこは気合で」

「気合だけじゃ、どうしようもないだろ」

まあ、実際はマジック・ザ・ハードー人なんだろうけどな。
原作どおりであれば。

しかも、4女神でかかってても勝てない相手だぞ。

「そこで、提案があるんです。ネプテューヌさん、聞いてもらえますか？」

そう言つて、いーすんさんがネプテューヌに耳打ちを始めた。

「い、いーすん。なんかこそばゆいよお」

あ、終わったみたいだ。

「ということですが、いかがです？ネプテューヌさん」

「他の女神に協力、か。…うん！いいんじゃないかなっ！」

「それじゃ、通信室に急ぎましょうか」

そう言つて、俺達はその通信室とやらに来たんだが。

「とりあえず、教祖と女神だけで話をします。だから、ケイスさんとネプギアさんはここで待っていてくださいね」

そう言つと俺達二人を残し、いーすんさんとネプテューヌは通信室へ入っていった。

side イストワール

「こちら、プラネテューヌのイストワールです。皆さん、聞こえていたら返事をお願いします。それから、できれば女神様も同席願います」

私は通信機のスイッチをオンにしてそう問いかけた。

しばらくしてから、それぞれのスピーカーから返事が返ってきました。

「こちら、ラステーションのケイだ。珍しいね、イストワール自ら連絡してくるとは」

「リーンボックスのチカよ。ほんと、珍しいわね」

「すみません、ルウィーのミナです。今組み上げてる最中なので、ちょっとだけ待ってください」

ルウィーの映像だけ『SOUND ONLY』と表示されています。あそこだけ、組み立て式ですからね。

「すみません、終わりました」

ミナさんのその声を皮切りに、話を始めました。

「さて、要件は分かっておいでとは思いますが」

「まあ、そうだね。あんな状況の後では、それくらいしかないだろう」

流石はケイさん。

もつすでに情報を集めている、といったところですか。

「一応、イストワール様が何を言おうとしているかは分かっているつもりですが」

「まあ、世界の危機、と聞いて黙っているわけには行きませんかからね」

ミナさん、チカさんのお二方も大体分かっているようですね。

「わかりました。それでは、単刀直入にお伺いします。女神様方の力をお貸しいただけますか？」

私はそう言いながら、頭を垂れる。

「そうだね、見返りはどうなっ……」

「この、バカケイ！……私で良ければ、いくらでも貸すわよ」

ラストেশションはOKですか。

「ルウィーも異論はありません」

「ですが、女神様不在時の戦力は？」

「それについてはご安心を。女神様には劣りますが、有能な方が居りますので、心配はご無用です」

「そうですか、ありがとうございます」

ルウィーもOKのようですね。

「リーンボックスも、問題なしよ」

「あら、一番抵抗するかと思っていたのですが」

「それについては大丈夫ですわ。そのために、あとでお姉さまの写真を撮りためておきますから」

「は、はあ。そうですか」

リーンボックスもOK...のようですね。

「そういえば、プラネテューヌは大丈夫なのかい？」

他の国は出す、と明言しましたが、私は出すとは明言してませんか
らね。

「はい、プラネテューヌはネプテューヌさんとネプギアさんをお出し
しようとしています」

「ほう」「ええ?」「ふーん」

まあ、他の国は出るのは女神だけのようですからね。
候補生は出せないでしょうからね。

「それでは、集合はいつにしましょうか」

「正直、早いほうがいいとボクは思っている。明日でどうだい?」

ケイさんがそう発言する。

これは願ってもない発言ですね。

「問題ないと思います」「わかったわ、今夜中に何とかするよう、努力するわ」

「こちら問題ありません。それでは、明日の昼くらいにプラネテューヌの教会でお会いしましょう」

「わかった」「はい」「ええ」

これで、準備は整いましたね。

side イストワール END

時間は少し戻って、イストワールとネプテューヌが通信室へ入って行った後。

「どんな風になるんでしょう、ケイスさん」

「多分、どこの女神様もみんなのことを考えてるし、賛同してくれるんじゃないかな」

多分ね。

一番の心配はリーンボックスだけど。
チ力さん、お姉さま離れがちゃんとできるか心配だ。

「そういえば、ケイスさんは4国全部の女神に会ったんですね？」

「そうだね。みんないい人だったよ」

みんなシスコンだけだね。
って、ここもそうか。

「…皆さん、美人でした？」

「うーん、どうなんだろう。美人って言うより、かわいって方が
近いかな。でも、みんな綺麗だったよ」

そう言ったあと、ネプギアから黒いオーラが出る幻覚を見たんだが
…。
幻覚…だよな？

その次の日。
運命の日がやってきた。

まず現れたのは、ルウィーからの4人だった。
…4人？

「へえ、ここがプラネテューヌの教会なんだ。結構いいところじゃない」

「……」

「ロム様、ラム様。いい子にしてるって約束、忘れてないですよね？」

「もちろん！」「うん、約束…した」

ああ、あの2人がついてきたのか。

「お久しぶりです。ブランさん、ミナさん」

「…ケイス?」「ケイスさん、どうしてここに?」

「いや、今ここで厄介になってるんですよ」

うんうん、家族四人、水入らずって感じが。
あれ、そういえば…。

「グリさんはお元気ですか?」

「まあ、とりあえず。流石に昨日の襲撃が思いのほか厳しかったみたいで、今日は寝入ってますけど」

グリさん、がんばったんだねえ。
もう信用されてるんだ。

くいつ、くいつ。

大体分かってるけど、ね。

「ごめんごめん、ロムちゃんにラムちゃん。無視してたわけじゃないんだよ」

「どーだか」「…うん」

この二人は…どうしよ。

とりあえず、ネプギアに預けるか。

「ネプギア、ちょっと来てもらえるか?」

俺は少し大きめの声でネプギアを呼んだ。

「ケイスさん、何です…か？」

「すまん、この二人の相手をお願いできるか？確か、冷蔵庫にジュースがあつただろ」

「は、はい。それじゃ二人とも、こちらへどうぞ？」

ネプギアは何かグクシャクしながらロムとラムを連れて行った。

「あ、そうだ。イストワールさんがあつちで待ってます。早く行つたほうがいいのでは？」

「そうですね、そうさせてもらいます」「…じゃ」

s i d e ラム

客間に通された、まではいいんだけど。

「……」

「……」

さつきから、ネプギアと呼ばれた子とロムちゃんがずっと睨みあったままだったり。

「…この、泥棒猫」

ロムちゃん！？

誰か助けて…。

ケイス、本当に恨むわよ。

side ラム END

次に到着したのが、リーンボックスの2人だった。

「ケイスさん、久しぶりですわね」

「お久しぶりです、ケイスさん」

って、何で二人とも目の下に隈があるんだよ。

「疲れてるみたいですね…」

「ええ、ちよつとの間ゲームできませんから、一晩中ゲームを」

…アンタって人は（笑）

「私は、昨日撮ったお姉さまの写真を現像していたら…もう陽が上ってました」

…アンタもか。

「ま、まあ、何も言わないでおきます。イストワール様が奥で待ってますから、そちらへ」

そう言うと、二人は歩き始めた。

…ヨロヨロ、と。

あとは、1国だけだな。
そう思ったときだった。

「ケ、ケイス!？」

不意にそんな声が聞こえた。

「ノワちゃん？」

その声は、どう聞いてもノワちゃんのものだった。

「元気だった？」

「ああ、うん。俺はね。ノワちゃんは？」

「…うん、私も」

それだけ言葉を交わすと、お互い無言になってしまった。
ノワちゃんの顔は真っ赤だけど、俺の顔も負けずに真っ赤なんだろうなあ。

「はあ。ボクは先に行かせてもらっよ。ごゆっくり」

ケイはそう言うと、先に教会に入っていつてしまった。
逃げたな、奴め。

「じゃ、じゃあ、入ろうか」

「う、うん。そうね」

な、なんか変な空気だな。

そう思い、照れ隠しにちょっとしたことをした。

「お嬢様、お手をどうぞ」

「はい／＼／」

うわ、何コレ。

自分で言っておいて何だが、すごい恥ずかしい。

俺達は顔をさらに真っ赤にして、教会に入ってしまった。

「さて、本日はお集まり頂き、ありがとうございます」

いーすんさんのそんな言葉から、集会が始まった。

「早速ですが、皆さんすでに今の状況は把握していると思ってよろしいでしょうか」

いーすんさんのその言葉に、その場にいる全員が首を縦に振り、肯定の意を表す。

無論、俺も。

「ですので、今考えうる最強のパーティーでことに望みたいと考えています」

そう言って、いーすんさんは手元の紙に目を落とす。

「私が考えているのは、4女神様および、ネプギアさん、ケイスさんの6人ですが。異議がある方は？」

いーすんさんのその発言に、ケイが反応し、手を挙げた。

「ひとつ、確認させてくれないか？なぜ、ケイスがそのメンバーに入っているんだい？」

「ケイスさん、私は先ほど、『今考えうる最強のパーティー』と言いましたよね」

「ああ、そうだったね。それが何か？」

「であれば、女神に勝利したことのある方を入れるのは当然と思いますが、いかがですか？」

「——ッ」

うわ、いーすんさん、えげつなっ。

「他には……ないようですね。それでは、ネプテューヌさん、ノワールさん、ブランさん、ベールさん、ネプギアさん、ケイスさん」

「……はい」「……」

「辛い戦いになるかもしれませんが、よろしくお願いしますね」

「うん！」

「ええ、もちろん」

「……できる限り」

「もちろんですわ」

「はいっ！」

「ああ」

全員、それぞれの言葉で答えた。

だけど、心は一緒のはずだ。

打倒、マジエコヌ！

そして、俺達6人はそのまま転移室へと向かった。

side ロム

さっきあそこの部屋でネプギアちゃんと色々話した。

オレンジジュースや色んなお菓子を出してくれた。

ネプギアちゃんは、私の敵だけど…そこまで嫌いじゃなくなった。
そうしたら今度はラムちゃんがむっとしてきて。

変なの。

「…ねえ、ミナちゃん」

「何です、ロム様」

ミナちゃんがそう優しい声で答えてくれた。

「ケイスさんとお姉ちゃんとネプギアちゃん、無事に帰ってくるよね？」

「そうですね。きっと、すぐに帰ってきますよ」

「うん！」

私はその言葉を信じて疑わなかった。

side ロム END

side イストワール

「それでは、今から皆さんをギョウカイ墓場へ転移します」

後は、このスイッチを押すだけなのですが。

なのに、やけに憚られます。

そんなとき。

『おっけー、いーすん。いつでもいいよー』

そう、ネプテューヌさんの声が聞こえました。

いつもながら、間延びしている声。

この人は、こんな状況でも不安を一切感じないのでしょうか。

「皆さん、くれぐれも気をつけてくださいね」

そう言いながら、コンソールのスイッチを押す。

その後、部屋の中を映すモニタが紫色に染まっていく。

そして、色が正常に戻ったとき、そこには誰も残っていなかった。
おそらく、転送が成功したのだろう。

「無事、皆さんが帰ってきますように」

私は何かにそうつぶやいた。

s i d e イ ス ト ワ ー ル E N D

... S A V E

第25話 4女神、集結（後書き）

うわぁ、書きたいこと全部入れたら、こんなことになった。

ケイス「うわぁ。いつもの1・5倍くらい？」

まぁ、そんな感じ。

けど、長さに削ったものもいくつかあるんだ。

ケイス「たとえば？」

ノワちゃんの告白シーンとか。

ケイス「作者、何で削りやがった！」

いや、書いていて、何回か砂糖を吐きそうになったんで、その部分全部削った。

俺、恋愛モノ無理みたいだわ。

ということだ。

それでは次回、「激突、マジエコソヌ」でまたお会いしましょう。

第26話 激突、マジエコンヌ（前書き）

ギョウカイ墓場…。

マジエコンヌのザ・ハードが待っていると思われる場所。

そこにネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ネプギア、ケイ
スの6人が足を踏み入れる。

だが、そこは想像を絶する場所だった。

第26話 激突、マジエコンヌ

「ここが、ギョウカイ墓場…」

俺はそうつぶやいていた。

確かに、原作で見たことのあるような景色。
打ち捨てられたゲーム機、カセット、CD…。
そんなものがあたりに散乱していた。

「嫌な場所だね、やつぱり」

ネプテューヌも、いつものような覇気がない。
心理的に、ここに来るのは嫌なんだろう。

「そうね。正直、長居はしたくないわ」

そう言いながら、ノワちゃんあたりを見渡す。
まあ、彼女も同じなんだろう。

「…マジエコンヌを倒したら、すぐに帰る」

ブランはそう言いながら、持っていた本を開く。
…ここまで来て、読書ですか…。

「夢のような場所ね、こんな空気さえなければ」

ベールはあたりを見渡しながらそう言った。

確かに彼女にとって天国かもな。薄汚れた空気が漂っていなければ。

「……」

ネプギアは一人、放心していた。
無理もない。まだ開眼したばかりの女神^{ハイド}だしな。

「ネプギア、大丈夫か？」

俺はちつとばかり心配になり、ネプギアにそう声をかけた。

「…は、はい。なんか、怖いところですね、ギョウカイ墓場って」

「ま、そうだな。所謂、死者の集まる場所だからな」

「お、脅かさないでくださいよお」

ネプギアは泣きそうになりながら、そう抗議をしてきた。
脅かしてるわけじゃないんだけどな、事実だし。

「さて、それじゃそろそろ行きましょうか」

ベールのその言葉に皆が頷き、全員がばらばらに歩き始めた。
ネプテューヌが先行し、ノワちゃんとベールはあたりを警戒し、ブランは殿を務める。

なんだ。皆、なんやかんや言って、チームワークいいじゃん。

そんな時、先行していたネプテューヌが俺達のところに戻ってきた。

「みんなー、なんか開けてる場所があったよー」

俺達はネプテューヌの声に従い、その場所へ急いだ。

ネプテューヌが見つけた開けた場所。

それは、原作では4女神がマジック・ザ・ハードに敗れた場所だった。

こういう流れにだったのか。

そんなことを思っていると、向こうから人が歩いてきていた。

というか、この状況で歩いてくる奴なんて、一人しか考えられない。

「やっと来たか、女神共」

そう言っていると、こちらを見渡す。

そして、俺のところで視線が止まった。

「ほう、お前が一緒だったとはな。面白い戦いになりそうだ」

「ねー、ケイス。あの人のこと知ってるの？…もしかして、元カノ？趣味悪いなあ」

「ケイスって、ああいうケバケバしいのが好きだったんだ。メモシとかなくちゃ」

「…正直、どうでもいい」

「だったら、二人にしてあげようではありませんか」

「…ケイスさんの、不潔」

「だーっ。お前ら、そんなわけないだろうがよ。どう考えてもマジエコノミの奴だろ、あいつ」

どうしてこうなった！？

「それじゃ、みんな。気を取り直して、行くよ！」

ネプテューヌのそんな掛け声で、ネプテューヌ、ノワちゃん、ブラン、ベール、ネプギアは変身をする。

「……変身っ！」「……」

「アーンヴァル、こっちも行くぞ」

「了解です、マスター！」

俺も、アーンヴァルにそう言葉をかけ、アーンヴァルもそれに答えるようにラファールの召還を行う。

「ゲート オープン 召還陣開放、サモン 召還ラファール」
「ユニゾン イン 融合合体！」

そして、ラファールにユニゾン融合し、待機状態となった。
次は、俺の番か。

「疾風よわれに力を与えん！ラファール コンビネーション 疾風合体」

ラファールは空中で分離し、俺はそれを纏う。

ラファール・ペガサスモード、合体完了。

そして俺は地面に降り立つ。

「話には聞いていたけど、それが貴方の新しい力なのね、ケイス」

そうネプテューヌが聞いてくる。

そつえば、ノワちゃん以外は初見だったな、この姿。

「ああ。これが俺の射撃モードだよ、ネプテューヌ」

「射撃モード？貴方は…」

ネプテューヌは何か言いたそうだったが、それを遮り

「さて、敵さんは待ってくれないみたいですよ」

と一言だけ言った。

まあ、マジック・ザ・ハードが襲い掛かってきている緊急事態だったしな。

「ケイスは下がってて。ここは私たちが止めるわ。ベール、行ける？」

「誰にモノを言ってるのですか？もちろん大丈夫ですわ」

ガキイインと音がし、マジック・ザ・ハードが振るった鎌はノワちゃんの剣で止められていた。

そして、ベールの槍が突き出されていたが、それはマジックハードの左手によって掴まれ、止められていた。

「隙あり、うりゃあああっ！」

ブランがそう叫びながら後ろから襲い掛かる。

それと同時に、ネプテューヌが正面から斬りかかる。

「はあああああっ！」

そんな2人の連携攻撃に、マジック・ザ・ハードは鎌を振り回し凌いだ。

「ふん、女神とはその程度の存在か。これならば、私一人でも充分だ」

な」

そう言うと、不敵な笑みを浮かべた。

「言わせておけばっ！」

ブランはそう言いながらマジック・ザ・ハードに襲い掛かった。だが、すべての攻撃は紙一重で避けられ、逆に攻撃が加えられていた。

「私たちも行くわよっ」

ネプテューヌがそう言うと、ノワちゃんとベールもマジック・ザ・ハードに襲い掛かった。

だが結果はあまり変わらず、全員の攻撃は避けられたり背中 of 羽を上手く使い凌がれていた。

そして、鎌を横一文字に振られ、女神達が吹っ飛ばされていた。

その後、マジック・ザ・ハードは俺のほうを向き、こう切り出した

「さて、貴様はいつ来るのだ？まさか怖気づいたか？」

「さて、ね」

俺はそう言いながらランチャーを構える。

そして、マジック・ザ・ハードは俺の方へ突っ込んできた。

「スラスター全開、後ろに下がる。アーンヴァル、ココレットで奴に牽制をよろしく」

『了解です、マスター』

俺はスラスターを吹かし、後ろに下がる。

それと同時にココレットが射出され、マジック・ザ・ハードに牽制を行う。

そして俺自身は、ランチャーを奴に向け、ぶっ放す。

「行けえっ！」

ランチャーから射出されたエネルギー弾は奴に当たったが、奴にはあまり効いていないようだった。

「お前もその程度か。ならば、死ね」

そう言つて、また突っ込んでくる

今度はさっきよりも疾い！？

俺は、マジック・ザ・ハードの攻撃をランチャーで受ける。

元々攻撃を受けるように作られていないランチャーは、ギシギシと嫌な音を立てる。

『マスター、ランチャーの耐久力が持ちません。このままでは誘爆を起こしかねません！』

アーンヴァルの言葉は聞こえているが、今はこれで手一杯だった。だが、そんな俺の元に援軍が現れた。

「隙だらけよっ！」

ノワちゃんはそう言つて、マジック・ザ・ハードに横から斬りかかった。

マジック・ザ・ハードは、そのまま横に吹っ飛んでいった。

「大丈夫？ ケイス」

「サンキュ、ノワちゃん。助かった」

そんな俺達のところに、他の女神達も駆けつけてきた。

「さて、どうします？ 形勢逆転ですわよ？」

「よオ、マジック、随分苦戦しているみてエじゃねエか」

不意にそんな声が、マジックが飛んでいった方向とは違うところから聞こえてきた。

ちよつと待て、この口調は…。

「ジャツジ、か。覗き見とは、随分イイ趣味してるじゃないか」

「へへッ。随分いいカッコだなア、マジックよオ」

そう声が響いてきたかと思うと、ドオオオオンツと上から巨体が落ちてきた。

何で、ジャツジ・ザ・ハードがこの場面にいるんだ！？

「さアて、俺にも戦わせろや、マジック」

そう言つて、自身の得物であるハンマーを構えた。

「はアアアアッ！」

そう言いながら突っ込んできたかと思うと、俺達の少し前でハンマーを振りかぶり、

「ウリヤアアアアッ」

と俺達のところに振り下ろしてきた。

それにいち早く気づいたのはブランだった。

「どっせええええいつ」

そう言いながら彼女のハンマーを下から振り上げる。
だが、そんなこともものともせず、ジャッジ・ザ・ハードのハンマーは俺達の元に振り下ろされるのだった。

「うわああああっ」

気がつくと、全員が吹き飛ばされてしまっていた。
これは、ヤバいな。

「みんな、あのジャッジって呼ばれてる奴は、俺一人で相手する。
マジックって呼ばれてる奴は、任せた」

「無理よ、ケース。全員でアイツを先に倒しましょ？」

「…勇敢と無謀は違うのよ、ケース」

「危険ですわ、そんなこと」

ノワちゃん、ブラン、ベールは俺を心配してそんな声を掛けてきた。
だがただ一人、ネプテューヌだけは違った。

「何か奥の手があるのね。貴方の得意な剣を、まだ使っていないからおかしいとは思ってたのよ」

さすが、ネプテューヌ。

相変わらず勘が冴えてるな。

「「「え?」」」

あ、そうか、この3人は、俺が剣で戦ってるの見たことないや。

「ま、そういうこと。それじゃ行くぞ、ユニコーンモード」

そう言うと、ラファールが一度俺の体から外れ、装備の組み換えが行われた。

より接近戦重視に、より速度重視に。

そして組み換えが終わったとき、ランチャーなどの銃器は格納され、変わりに剣が装備されていた。

さて、ここから反撃だ。

…… SAVE

第26話 激突、マジエコノヌ（後書き）

戦闘シーンですが、ちゃんと書けてるかなあ。
ちと心配。

ケイス「だけど、ジャッジがここに出てくるなんて予想外だぞ」

うん、俺も予想外。

書いてたら何故かこうなってた。

あと、戦闘中なのにネプギアが空気。

ケイス「あ、ホントだ。戦闘に参加してねえ」

一応理由は考えているんですが、それがこの戦闘終結までにかける
か心配だ。

ということだ。

それでは次回、「ケイスの本気」でまたお会いしましょう。

第27話 ケイスの本気（前書き）

原作とは違い、マジック・ザ・ハード戦でジャッジ・ザ・ハードが乱入。

全員が吹き飛ばされた後、ケイスは装備を接近戦用モードユニコーンに変更し、ジャッジ・ザ・ハードに挑む。

彼は、ジャッジ・ザ・ハードに打ち勝つことはできるのか。

そして、女神達の運命は…？

第27話 ケイスの本気

「へエ、一人で俺に勝つつもりでいるのか？」

ジャッジは俺にそう言ってくる。

だが、こちらにも勝機はある。

『マスター、ユニコーンモードでの活動限界まで残り20分程度です』

アーンヴァルの言葉が俺の頭の中に響く。

そういえば、ユニコーンモードはエネルギー消費が激しいとか言ってたな。

武装神姫にそんな設定あったか？

そう思ったが、俺は「了解」と返しておく。

まあ、20分以内にこの2人を倒せば問題ないわけだ。

「何やってやがる。来ねエなら、こっちから行くぜ」

ジャッジはそう言い、ハンマーを振りかぶりながらこちらに突っ込んできた。

「アーンヴァル、あの攻撃にシールドは保つか？」

後ろに女神達がいるため、俺はそう確認した。

保つなら、一撃くらいは受けてみてもいいかと思ったんだが。

『受けてみないと分かりませんが、多分無理です。それよりも剣で捌くほうが効果的かと』

ジャッジって、そんなに強かったか？

それとも俺のほうが弱いのか。

まあ、考えるのは後だな。

そう思い、俺は剣を構える。

「逃げねエのは、褒めてやる。だが！」

ジャッジはそう言いながら、ハンマーを振り下ろす。

「それは、選択ミスって奴だアアアツ」

ガキインと金属同士がぶつかる音が響く。

ハンマーを剣で受けながら、俺は後ろに目を向けながらこっぴどく叫ぶ。

「みんな、早くアイツのほうに向かってくれ。こっちは、俺一人です。どうにかする」

「分かったわ、気をつけて」

「あつちは、アタシ達にまかせろ」

「分かりましたわ」

ネプテューヌ、ブラン、ベールはそう答え、マジック・ザ・ハードの方へ向かおうとした。

だが、ノワちゃんだけは、こう言った。

「私は残るわ。ケイスだけじゃ心配なもの。みんなは、先に言っただけで、すぐに追いつくから」

その言葉を聞き、3女神はマジック・ザ・ハードの方へ向かった。

まあ、苦戦するかもしれないが、こちらを早めに終わらせればいい話か。

ノワちゃんは剣を持ち直し、無防備なジャッジ・ザ・ハードに斬りかかった。

その攻撃に、俺に振り下ろされていたハンマーが一瞬緩む。

俺は剣をナナメにしハンマーを荷重移動させ、ハンマーを地面に落とさせた

「ノワちゃん。礼は言わないぞ」

「いいわよ、そんなの」

「テメエら、正義の味方が一人で戦うって言ってるのに、実は二人で戦うとかやっていいと思ってるのかよッ!？」

斬りつけられたジャッジ・ザ・ハードはそう叫んだ。

まあ、ごもつとも。

だが。

「残念だったな。俺達は…」

「正義の味方じゃないのよ」

俺達は顔を見合わせ、頷きあう。

そして、ジャッジ・ザ・ハードに向かって剣を掲げる。

「ここからが、俺達のターンだ」「ここからが、私達のターンよ」

side ネプギア

「みんな、すごいな」

私にはそんな声しか出せなかった。
だって、お姉ちゃんを含めた女神はマジックって呼ばれた人と戦ってたし。

ケイスさんだって、女神に引けを取らない。
ううん。もしかしたら、もっとすごいかもしれない。

「私、ここで何をしてるんだろ」

ふと、そんな言葉がポロつと出てしまった。
これが私の本心。

だって、私はまだそんなに経験を積んでないから、みんなの足を引っ張っちゃうからここでじっとしてた。
けど…。

「やっぱり、私も戦わないとダメ、なんだよね」

怖いけど、それを乗り越えて初めて女神になれるのかも。
そう思い、ケイスさんのほうを見る。

今、ケイスさんと一緒に戦ってるのはノワールさん。
私もあそこに立ちたいな…。

私は、成長するためと自分に言い聞かせ、自分の中の勇気を奮い立たせる。

恐怖に押しつぶされないように。

そして、少しでもみんなの役に立つ様に。

そう思い、私はお姉ちゃん達の方へ向かった。

side ネプギア END

「このヤロウ。チョコマカ動きやがって。俺の攻撃を受けやがれエッ」

ジャッジ・ザ・ハードはそう言いながら、得物のハンマーを振り回していた。

俺達には当たらなかった。まあ、二人とも速度重視だしね。

「さて、ノワちゃん。どうする？」

「まあ、ヒットアンドアウェイを繰り返すしかないんじゃないかしら」

そうだよなあ、と呟きながら攻撃をかわしていく。けど、こっちも活動限界がある身だしな。

「まあ、レールアクションRAでどうにかするか」

そう言つて、俺は剣を構える。

「やっとヤル気になりやがったか！」

残念ながら、ちょっとだけ違う。そうは思っても声は出さないが。

「アーンヴァル、小剣ソードプログラムロード」
『了解。RA小剣、ロードしました』

それじゃ、行くか。

「覚悟しやがれ、ジャッジ！」

そう言いつつ、スラスター全開で反時計回りにジャッジ・ザ・ハードに右側から迫る。

「そんな軌道はすぐ分かるんだよ！」

ジャッジは左からの攻撃に備える。

速度が速いから反応できないとも思ったが、きっちり反応しやがったか。

そして、ジャッジに迫る寸前に軌道を派生させもう一度回り込み、今度は左側から迫る。

そして、左側から攻撃を加える。

流星に今回は反応できなかったようだ。

「なんだとオッ！？」

「上手いつ」

だが、致命傷を与えることはできず、俺は再びノワちゃんのところへ戻った。

「さて、次はどうするかね」

「それじゃ、今度は私が行くわ」

そう言つて、ジャッジ・ザ・ハードに向かっていく。

「食らいなさいーインフィニットスラッシュー！」

そう言うと、ノワちゃんのスピードが上がり、縦横無尽に動き回りジャッジ・ザ・ハードを斬りつけていった。そして。

「これで最後よ」

そう言って斬りつけた後、指をパチンツと鳴らした。次の瞬間、たった今斬りつけられたかのように、ジャッジ・ザ・ハードにダメージが入っていく。

「グオオオオオツ。何でオレがこんな目にイ…」

まだ倒れないのか。

それじゃ、こつちも必殺技で行くか。

「アーンヴァル、先々の閃改プログラムロード」

『了解。RA先々の閃改、ロードしました』

俺は腰を少しだけ落とし、タイミングを計る。…今だっ！

「全スラスター全開を維持、行っけえ！」

今の俺が出せる最高速を出し、ジャッジ・ザ・ハードに迫る。

そして、斬りつける瞬間に剣にエネルギーフィールドを発生させる。それもフルパワーで。

最大の攻撃力を備えた剣での剣戟と、最高速での衝撃力。それをすれ違いざまに放った。

先々の閃を受けたあと、ジャツジ・ザ・ハードは沈黙し立ち続けた。
いた。

「…ど、どうだ？」

手ごたえはあった。

もう一回同じ技を放つ力は残ってないぞ。

そう思っていると、ジャツジ・ザ・ハードの体がズズウンと地面に沈んだ。

どうにか、勝ったみたいだな…。

「すごいじゃない、ケース」

「…ノワちゃんに残ってもらって正解だったみたいだな」

俺とノワちゃんは、パンと掌を打ち合わせ、お互いを激励していた。
た。

だが…。

「喜び合うのは結構。だが、こちらの状況は分かっているか？」

俺たちに向かって、マジック・ザ・ハードがそう言葉をかけてきた。
声が掛けられた方向を向いて俺たちは愕然とした。

そこには、ボロボロになったネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギアが横たわっていた。

ユニコーンモード活動限界まで、残り5分。

⋮
S
A
V
E

第27話 ケイスの本気（後書き）

何はともあれ、今回初出の技の説明から。

RA小剣

武装神姫BMに出てくる、汎用のレールアクション。

小剣を持っているときに発動することができ、動きは本文中を参照。大体同じ動きのはずです。

RA先々の閃

同じく武装神姫BMに出てくる特殊レールアクション。

動机的には小細工抜きで真っ向勝負、けどスピードが尋常じゃないって奴。

避けるのが大変なんですよ、原作（武装神姫）では。

ケイス「なあ、ちなみに派生ってのは何？」

ああ、通常のRA小剣の場合は、敵を右側から攻撃するわけだ。だが、防御とか避けをされた場合はダメージを与えられないから、確実にダメージを与えるために再度RAを発動するイメージかな？

ケイス「ってことは、今回はその派生版を出したのか」

そゆこと。

さて、ケイスとノワールがジャッジと戦っている間に、他の女神がマジックにノされてしまいました。

まあ、4人でも苦戦していたのに、3人じゃ…ね。

ケイス「4人だろ？ネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギアの」

ああ、ネプギアは数に入っていないよ。

ガツチガチに固まって、本来の動きができない的な意味で。

ということだ。

それでは次回、「誤算」でまたお会いしましょう。

第28話 誤算（前書き）

ジャッジ・ザ・ハードを倒したケイスとノワール。

だが、他の女神達はマジック・ザ・ハードに倒されてしまった。
加えて、ケイスにタイムリミットが忍び寄る。

この戦いの結末は如何に…。

第28話 誤算

ネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギア。

マジック・ザ・ハードの前には、4人が横たわっていた。

「貴様あつ！」

俺はそう叫び、奴に一太刀浴びせようと剣を振りかぶった。

「そう焦るな。こいつらの命までとろうとは思っていない」

そう言いつつ、俺たちの前までやってくるマジック・ザ・ハード。
ああ、少しだけ浮いてるから足音がしないのか。

「ひとつだけ聞きたい。お前は何者だ？」

マジック・ザ・ハードは俺にそう尋ねてきた。
戦いの最中に何を考えているのかわからない。
そこが、すごい不気味だ。

「…俺は、ケイス。この世界の人間だ」

「なぜそんな力を持っている？」

「…答える義務はない」

これは、神様からもらった力。
少々胡散臭かったけどな。

「そうか…。まあ、聞けるとは思っていなかったが…」

マジック・ザ・ハードはそう言い、鎌を構えた。

「ならば、死ねッ」

そう言つて、鎌を横一文字に振ってきた。

俺はそれに対して剣を縦に構え、鎌を受け止めた。

「ますます、殺すのが惜しいな」

そう言いながら、マジック・ザ・ハードはさらに力を込める。

「私を忘れてないかしらっ！」

そんなマジック・ザ・ハードにノワちゃんが後ろから斬りかかる。
だが…。

「女神よ、無粋な真似をするな。こいつの相手が終われば、次に相手をしてやる」

そう言つて、後ろの翼(?)を器用に動かし、ノワちゃんの剣を受け止めていた。

そして、俺の方に振るっていた鎌で攻撃し、ノワちゃんを吹き飛ばしていた。

「きゃああああっ！」

「ノワちゃん！」

吹き飛んでいったノワちゃんの元へ向かおうとしたんだが…。

「私の相手は、まだ終わっていないぞ？」

と鎌を連続で振り回し攻撃をしてきた。

俺は防戦一方となつてしまい、仕方なく一旦後ろへ下がる。

こうなつたら、もう1回先々の閃でダメージを与えるしかないか？

そう思い、アーンヴァルに確認を取ってみる。

「（アーンヴァル、もう1回先々の閃行けるか？）」

『無理ですマスター。エネルギーが不足しています』

先々の閃は無理か。

そうなると、普通のRAくらいしか使えないんだが。

結局、グランニユーレは何故か使えなかったしな。

「（残り稼動限界時間は？）」

『すでに、5分を切っています』

ラスト5分で、マジック・ザ・ハードを倒せつか。

どんな無理ゲーだよ、それは。

…腹を括るしかないか？

「さあ、どうした。逃げてばかりでは、私は倒せんぞ」

そう言いながら、マジック・ザ・ハードが攻撃を仕掛けてくる。

考える隙も与えないって感じだな。

俺はどうにか攻撃を掻い潜り考える時間を作ろうとする。

しかし、奴はそんな俺をあざ笑うかのように特攻を仕掛けてくる。

対抗策が見つからないまま、刻一刻と時間が過ぎ去っていく。

『稼動限界2分前です』

アーンヴァルの非常な通知が伝えられた。

あと2分で、俺は丸腰か。

…丸腰？

そう思ったとき、1つの閃きが頭の中を駆け抜けた。

グランニユーレはできなくても、擬似的にあればできるだろう。

「アーンヴァル、ココレットで奴の周囲を攻撃して土煙を上げてくれ」

『了解です。すぐに動きます』

アーンヴァルの回答からすぐにココレットが動き始め、マジック・ザ・ハードに攻撃を始めた。

正確には奴の周辺に、だが。

思惑通り、土煙が上がり、奴の視界を狭めることができた。

「それじゃ、行くぞ！」

そう言つて、俺はスラスターを吹かし、上空へ上がっていった。

side マジック・ザ・ハード

土煙で何も周りが見えないが…。

奴は、初めからこれを狙ったのか？

うん？

上へ上がっていくようだが、何を考えている。
…特攻か！

そんな幼稚な手が私に効くとも思ってたか！

side マジック・ザ・ハード END

現在、高度5000メートル程度か？

この辺りからでいいだろ。

そして俺は、ラファールのモードを変更する。

「ライディングモード、チェンジ」

ラファールは再び合体前の状態に戻り、その上に俺が乗った形になった。

ここから特攻を仕掛ける。

重力＋加速力なら、速度は先々の閃と同等になるだろうか。

ただ、防具が薄くなるのが痛いな。

そして、俺はラファールのスラスターを吹かせ、下へ、マジック・ザ・ハードの元へ特攻を開始した。

高度がぐんぐん下がる。

それに伴い、速度も上がっていく。

「アーンヴァル、スピードは落とさずそのままマジック・ザ・ハードに攻撃できるよう調整頼む」
『了解です』

やっと、マジック・ザ・ハードを肉眼で確認できた。

だが、その眼はこちらをずっと伺っていた。
やっぱり、バレてたか。

だが、今やめるわけには行かない。

俺は黙って武器を準備する。

マジック・ザ・ハードまで後もう少し、というところまで来た。
これで一太刀浴びせられる。

そう思ったときだった。

「チェストーツ！」

俺とラファールは横から襲撃を受け、そのまま吹き飛んだ。
な、何が起こった？

俺たちが飛んできた方向を確認すると、そこには。

「武士道には反するが許されよ。これも同志のため」

そう言いつつ仁王立ちするブレイブ・ザ・ハードの姿があった。
そんなのアリかよ…。

俺とラファールは地面に叩きつけられ、ラファールは行動限界時間
オーバーのため粒子化。

そして、融合していたアーンヴァルは投げ出され、意識不明。
最悪の結果だ。

s i d e ノワール

「ケイスーツ」

私は、声の限りそう叫んでいた。

ケイス、どうか無事でいて…。

そう思いながら、私はケイスの元へ急いだ。

side ノワール END

体中が痛え。

地面に叩きつけられたおかげで、あちこちが擦り傷だらけになっていた。

そんなところに、マジック・ザ・ハードとブレイブ・ザ・ハードがやってきた。

「人間。答える気になったか？」

「全然」

「そうか。なら、死ね」

そう言つて、マジック・ザ・ハードは鎌を振り上げた。

…一巻の終わりが。

そう思い、俺は目を閉じた。

side ???

あらら。

覚悟しちやつたみたい。

でも、約束だから一度だけ助けてあげる。

そして、わたしは目の前に魔法陣を展開する。
彼をわたしの元に召喚するために。

side ???

side ノワール

マジックの鎌がケイスに振り下ろされようとしていた。

「やめてえーっ!」

私はそう叫びながらケイスの方へ向かった。

そして、振り下ろされた瞬間ケイスの体が光り、光が収まった後には何も残されていなかった。
ケイス…。

そして私は、抵抗空しくマジックたちに捕まってしまったのだった。

side ノワール END

いつまで経っても、衝撃がやってこない。

どうしたんだろうか。

そう思い、目を開けてみると、景色が一変していた。
目の前には…。

……SAVE

第28話 誤算（後書き）

ケイス「結局、誤算って何？」

マジック・ザ・ハードに先々の閃を撃てなかった事。
ブレイブ・ザ・ハードの出現。
この辺りかな。

ケイス「最後に出てきた人って誰？」

今は秘密。

次回分かるから。

ということ。

それでは次回、「約束の場所」でまたお会いしましょう。

第29話 約束の場所（前書き）

マジック・ザ・ハードに敗れ、武装も失ったケイス。
そのケイスを転移させ救ったのは、とある少女だった。
彼女の正体とは…

ちょっと、というか最後のほうを変えました。
ヘタレさん、アイディアをありがとうございます。

第29話 約束の場所

目を開けた俺の前に、少女が立っていた。
だが、今いるこの空間が暗く、彼女の顔も見えない。

「君は…誰だ？」

「……」

彼女は寡黙に何も語らなかった。

俺は何とか立ち上がり、彼女にもう一度尋ねた。

「君は…誰なんだ？暗くて良く見えないんだが」

そう言うと、彼女は指をパチンツと鳴らす。

そうすると、今まで暗かったこの場所に明かりが差した。

そこにいたのは…。

「お前は…マジック・ザ・ハード！」

俺はそう言うつと間合いを取り、マジック・ザ・ハードの動きを警戒し始めた。

だが、奴はポリポリと頬を掻き、まいったなあとも言いたげな顔をしていた。

そしておもむろに画用紙を後ろから取り出すと、何かを書き始めた。
きゅきゅきゅつ。

そして、今まで何か書いていた画用紙をこちらに見せる。

【やほー。あぶなかったねえ】

画用紙にはそう書かれていた。

俺はコケそうになるのを必死に堪え、こう切り出した。

「お前、マジック・ザ・ハードじゃない…のか？まあ、縮んでるみたいだが」

【ちっこいっていうな】

いや、言ってねえし。

だとしたら、コイツは何者なんだ？

「で、お前は誰なんだ？」

ちっこいのはちょっと考えるそぶりを見せ、何かを書いてこっちに見せた。

【わたしはゆにみです。ってゆーかちっこいってゆーな】

地の文に突っ込むなよ。

ゆにみです？

………はあ！？

ユニミテスって、もしかして前作でマジエコンヌが騙ってた魔王の名前？

【そー。そのゆにみです。ほんとのなまえはまじつく・ざ・はーどだけどね】

だから、地の文に突っ込むのはやめい。

【やだ】

「…っていつか、マジック・ザ・ハードであることは認めるのか？」

俺がそう言つと、ユニミテスと名乗ったそいつは首を縦に振る。
そして、画用紙をこちらに見せる。

【こことはちがうせかいの…だけどね】

ま、面倒臭いから、ユニミテスで統一させてもらおう。

「で、なんでユニミテスがここに？」

【かみさまにたのまれた。いつかだけたすけてやってくれって】

神様？

俺をここに転生させたあの神様なんだろうか。

【そそ、そのかみさま】

…もう突っ込まないからな。

まあ、話が潤滑に進むからいいか。

【ちっ】

……。

「で、どう助けてくれるんだ？」

【とあるばしょに、きみたちをおくりとどければいいっていわれた】

とある場所？

どこだ？

【きみに、というよりも、きみのしたでぐったりしているのにかん
けいあるみたい】

「アーンヴァルに？」

アーンヴァルに関係するところ、ねえ。

…思い当たらん。

【そしたら、おだちゃんもらうね。いつもはあめしかもらってないけ
ど、きょうはこれで】

ユニミテスはそう言う俺の左手についているブレスレットを取り
外そうとしていた。

「ちょ、おま。俺、それがなくなると魔法が使えなくなるんだが」

【だいじょうぶ。だって、たぶんふようになるよ。それに、かみさ
まがくれるっていつてたし】

俺に画用紙を見せながら、器用にブレスレットを取り外したユニミ
テス。

神様、アンタ誰に何を渡してるか分かってます？

【それじゃ、おくるよー】

彼女がそう言うと、俺の足元に魔法陣が展開した。

「何はともあれサンキュな、ユニミテス」

【どーいたしましてー】

彼女はやっぱり、画用紙に文字を書き、それで答える。
ま、予定調和だな。

「この世界の君達と俺は分かり合えないのかな」

【たぶん、むりじゃないかな】

「そか」

【ん】

【さて。じゅんぴはととのったけど。さいごになにかある？】

「また、会えるかな？」

【たまにあってんじゃん。うちのさくひんで】

…最後の最後に、そんなメタを言うな！

【ま、うちのごしゅじんしだいかな。しょうじき】

「それじゃまた、いつか、どこかで」

【はいはい。それじゃ、いってらっしゃいませー！】

彼女のその文字が見えた直後魔法陣が強く光だし、俺は別の場所に転移した。

転移する場所がどこか分からないけどな。

side ユニミテス

行っちゃったねえ。

これでよかったの？神様。

『願いをきいてくれてありがとな、まじっくさん』

さて、それじゃこのブレスレットはゴミ箱にぽーい、と。

それじゃ、今色々忙しいから帰るねー。

『ほいほい、リアねぶさんによろしくー』

じゃねー。

そして、私はまた次元を超えて帰っていった。
自分の世界へ。

side ユニミテス END

さて、転移後俺はどうなっていたかというところ…。
わけの分からない場所に来ていた。

何もない、白い空間。

その言葉が一番しっくり来る。

また、あのときの神様のところに来ちゃったのかな？

そう思っていたとき、人の声が聞こえてきた。

「ケイス様、でしょうか？」

声が聞こえてきた方を見ると、そこには所謂神官服を着た女性が立っていた。

…誰？

「はい、そうですが。貴女は一体…」

「申し遅れました。私はここで神官をやっております、アルと申します」

なんとなく似ている人を見たことがある気がするんだが…。

…誰だっけ？

そしてアルさんは、こちらに構わず話しかけてきた。

「下界での戦闘、拝見させていただきました。マジエコンヌの腹心に敗れてしまうのは想定内でしたが…」

アルさんはそこで一度言葉を切り、俺のほうを見ながらこう言った。
「ですが、貴方の能力は想定外でした」

この人、俺が戦闘をしていたのを見ていたのか？
だったら、あの後どうなったか知っているはずだ。

「なあ、アルさん。不躰で申し訳ないけど、俺があそこで負けて消えた後、どうなったか教えてもらえないか？」

アルさんは何か手を動かしながら、こちらの質問に答えてくれた。

「多分、ご想像の通りですよ。あの後黒き女神は負け、女神達は幽閉されてしまったようですね」

俺と一緒に行ったってのに、原作と一緒になっちまったってことか。

「さて、と。準備ができました。こちらへお越しください」

アルさんがそう言い、他の部屋への移動を促す。

俺はそれについていった。

そして、その部屋の中で信じられないものを見た。

「神…姫？」

そう、そこには所謂神姫たちの武装が鎮座していた。

それも、1つではなかった。

全部で8体の神姫が設置されていた。

「神機、ですか。言い得て妙ですね。こちらには神の鎧が設置されているのですよ」

そう言い、アルさんは神姫たちを見渡した。

「意図的に神の鎧の模造品を下界に落として正解だったようですね。あの、ファルコムという方には悪いことをしましたが」

ファルコム？

落とした？

神の鎧の模造品？

『これさ、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からないんだけど、あげるよ』

あの時にもらった、ラファールのことか！？

「もしかして、ここは…アージェンという空に浮かぶ島ですか？」

「ご名答です。そして、貴方にこれらの神の鎧を託します。この力で、マジエコンヌを封印してしてください」

アルさんは、こちらに向き直り、俺に頭を下げてきた

俺は、今一度神姫を見渡す。

そして、左端に設置されている赤の神姫、アークに手を触れる。

「これからよろしくな」

『はいっ、もちろんです』

うん、アークはやっぱりいい子だ。

「神の鎧が…喋った！？」

「アルさん、この子たち変形とかできます？」

「い、いえ。今まで誰も操作できなかったので分かりません」

よっし。

んじゃやってみますか。

「アーク、トライクモードに変形！」

『トライクモード、発動！』

アークはそう言い、トライクモードに変形した。

「へ、変形した！？」

アルさんはそういいながらかなり驚いているようだった。
まあ、今までは鎮座していただけだからな。

「ケイスさん、初見でこんな扱いができる貴方は、何者なんですか
！？」

「ただの、一戦士ですよ」

この後、ハウリン、ゼルノグラード、アルトレーネ、ツガル、ベイ
ビーズ、ラプティアスにも挨拶し、最後は。

「アーンヴァル、これからよろしくな」

『……………』

アーンヴァルからの返答はなかった。

そのかわり、胸のポケットに入っていたアーンヴァルが光りだし、
アーンヴァル型の中に吸い込まれていった。

「アーンヴァル、大丈夫なのか？」

『……………』

返答はなかった。

でも、そのうちひょっこり顔を出すだろう。

「修行にて3年経過」

「ふう、ようやく全部の武装を使いこなせるようになったのか」

俺はそうひとりごちる。

初めは相手が強くて、しかも使いこなせなかったけど。

今なら、マジック・ザ・ハード相手に、あんな無様な戦いをしなくて済みそうだ。

「ケイス様。ようやく、すべてモノにされたんですね」

アルさんが俺の横に来てそう言った。

「ええ。これで、マジエコンヌとの戦闘が楽になります」

アルさんは俺が修行をしたいと言ったときに、色々と世話を焼いてくれたんだ。

モンスターの召喚をしたり、ターゲットを作ったりして。

「でも、3年とはあつという間ですね」

「…3年？」

俺、そんなに修行してたのか！？

「ええ。つい先日、紫の大地の女神候補生が帰ってきたらしいのです」

ってことは、もう原作突入してる？

「アルさん。俺、下界に行きます。行つて、今度こそ…」

今回は、ザ・ハードに負けるなんて失態は演じない。
そして、絶対にノワちゃんを助け出す。

「下界に行かれるのでしたら、1つ頼まれてもらえませんか？」

「俺にできることであれば」

「グリに、たまには帰ってきなさい、と言っておいてください。知り合いだと、前に仰ってましたよね」

「けど、前も言った通り記憶喪失ですよ、彼女」

「ですから、ケイスさんがここまで連れてくればいい話ですよ」

はあ。

忙しくなくなつたらね…。

「それでは、行きますね」

「はい。この世界を頼みます」

「任せてください、とは言えませんが善処します」

さて、まずはプラネテューヌに行つて、いーすんさんに状況を聞こう。

そう思い、俺はプラネテューヌへと向かった

……
SAVE

第29話 約束の場所（後書き）

はい、ということで今回はゲストに「リアルではねぶ子タイプ」さんのところのマジック・ザ・ハードさんこと、まじっくさんに来てもらいましたー。

まじっく「……」【とりつく、ぶれいう、まーべる、みてるー？】

今回は、ありがとね、まじっくさん。

まじっく「……」【ま、そーゆーけいやく？だったからね】

ところで、今回はケイスのパワーアップ回だったんだけど、勝つ自信ある？

マジック「……」【のーこめんとで】

と言うことで、新装備の説明行きます。

アーク

地上での高速戦闘を得意とする。

重火器での攻撃から牽制まで基本的に何でもこなす。

高速射撃戦闘中の命中率はピカイチ。

超高速移動モードのトライクモードへ変形することができる。

ハウリン

地上での肉弾戦を得意とする。

拳での接近戦が主となり、火器の扱いは不慣れなためあまり使わない。

ゼルノグラード

地上での遠距離戦闘を得意とする。

どう考えても固定砲台。

攻撃力特化のため、移動しながらの射撃の命中率は低い。

アルトレーネ

空中での近距離戦を得意とする。

剣での攻撃がメインとなっており、遠距離戦闘は不得意。
防御能力がハンパない。

ツガル

空中戦での遠距離戦闘を得意とする。

火力はあまり大きくなく装甲も薄い、回避性能が高い。

武装を合体させレインディアバスターとし、高速離脱することも可能。

中の人がツンデレ。

ベイビークラス

移動可能なアリ地獄型戦闘を得意とする。

あまり使い方が見出せない…。

ラブティース

空中戦での近距離から遠距離まですべてこなすオールマイティ型。

このメンバー内では、空中でのスピードが一番速い。

アーンヴァル

現在、マジック・ザ・ハードとの戦闘でのダメージを回復中。

前回までが模造品であったために、すべての能力が使えなかったことを考えると、

かなり戦闘能力が上がることが予想される。

こんな感じかな。

まじつく「……」【ちーなんてもんじゃねーぞ】

まあ、全員合わせると確かにフルレンジになるからね。
けど、基本的に使えるのは1人だから。
それと、あとから2人ほど合流します。

ということだ。

それでは次回、「雪の中の再会」でまたお会いしましょう。

まじつく「……」【らしいしゅうも、でてるかもよー？】

第29・5話 ケイスの修行風景（前書き）

いや、加筆しようとしたら、全部追加しなくちゃいけないことに気づいて。

次から章が移るので、まとめ的な意図もあります。

それでは、どうぞ。

第29・5話 ケイスの修行風景

<アーク>

『マスター、何やってんですか。敵は待ってくれませんよ』

アークの激が飛ぶ。

「アーク、やっぱりGがきついつて。G抑制システムをONにしてくれよ」

『ダメです。まず、Gに慣れてください。話はそれからです!』

「うおおおつ、死ぬうううつ」

side アーク

本当に、今まで感性だけでやってきたんですね、マスター。であれば、私がそれを覆さなくては。

本当は、あまりこんなことは言いたくはありませんが…。

『マスター。前に仰っていた、ノワちゃんさんという方はマスターの大切な人ではなかったのですか?』

その瞬間、マスターを取り巻く空気が変わるのを感じた。

「そうだった。悪い^{わり}」

そこからは、全く弱音を吐かなくなっていた。

マスター
この人になら、すべてを預けられる。

そう感じた瞬間だった。

side アーク END

Gはまだ感じる。

けど、そんなことで弱音を吐いてたら、ノワちゃんに笑われちゃう。
だから、我慢する。

次は、絶対に失敗できないから。

…数ヶ月後

「アーク、トライクモード発動！」

『了解。ロードファイター、ロード完了』

アークはそう答えるとトライクモードに変形する。

そして、ターゲットの横を通り抜け、反転した瞬間。

「シュート」

トライクモードのノーズに使用されているシルバーストーンが火を
噴く。

そして、そのまま自分も突進していく。

「うん、ようやく形になったな。これなら、相当な武器になるな」

通常のロードファイターEX版の派生に加え、反転中に相手を狙撃しそのまま突進を行う。

名付けて『ロードファイターAD』
アドバンスド

『マスター、正直私にはマスターと言う人が解りかねます』

アークは口ではそう言っていたが、言葉が弾んでいるように聞こえた。

<ハウリン>

『ボクが言いたいののは、相手を自分の射程距離に入れて何回も殴るってことだけです』

無理難題をおっしゃる。

「で、相手がカウンターを打ってきたらどうすればいい？」

『え？避ければいいじゃないですか』

「だから、それが難しいって言ってるんだよ」

俺はそういうが、ハウリンには伝わってない様子。

『だからですね、ダダダダッってこっちが拳を入れるでしょ？それで向こうがヒュッて打ってきたら、サッと避けるだけですよ』

だから、擬音で説明するなとあれほど。
でもまあ、それができないとドッグサーカスができないってことな
んだろうなあ。

<ゼルノグラード>

バレットカーニバルがなかなか当たらなくて悩んでいた時。

『マスター、もっとメリハリをつけましょう』

ゼルにそう言われ、はっと気がついた。

『バレットカーニバルは、静と動を組み合わせたRAなんです。それに、ボクは基本的には止まらないと当たらない。だから、撃つ時は完全に止まっている必要があるんです』

ゆっくりやってみると、良く分かる。

最低でも、打つ瞬間は止まっている必要があるのか。

『そうです、マスター。すいませんね、こんなに癖のある神姫で』

「大丈夫さ、ゼル。俺も結構癖が強いからな」

<アルトレーネ>

『マスター、すごいです。私が言うことは何もないのです』

「んなことないだろ。俺は、今自分の腕しか使っていないんだ。本

当は、このもう2本の手を使う必要があるんだろ？」

そう言つて、アーマーについている手を両方ともひらひらとさせてみる。

『そうなのですが…。つて、動かせるじゃないですか！』

「まあ、別々ならな。でも、一緒につて訳にはいかない」

『だったら、この2本の手は私が動かすことにするのです。特訓をするには、二人羽織がうつてつけなのです！』

ちよ、アルトレーネ。

どこでそんな言葉仕入れてきた！

『アルさんが言つてたのを聞いたのです』

あーのーひーとーはー！！

<ツガル>

『だから、レインディアバスターにして、爆弾をぱぱぱぱーと撒けば、どどどどーんつてなるんだよ』

お前も擬音派か、ツガルよ。

「まあ、言いたいことはわかるが、そうじゃなくてな。どう撒けば効率的にダメージを与えられるかを…」

『まあまあ、そんな硬いことは言わないでさ、もっと気楽にいきましょう』

はあ、疲れる。

けど、爆弾ばら撒きスキルは上昇したからよしとしようか。

<バイビークラス>

『攻撃にも防御にもロックは必要じゃん？』

まあ、確かにそれはカッコいい事は認めよう。

「どうすればいい？」

『フィールドをステージにすればいいじゃん。それが、私のRA、We Will Rock You じゃん』

この辺は、どうにもならんな。

そのうち、5pb. にでも聞いてみようか。

<ラブティマス>

『いつも言っていますが、勝てばいいというものではないのですよ』

そう、俺はラブティマスによくお叱りを受ける。

解ってはいるんだけどな。

「ああ、解って...」

『マスターは解つてません。先ほどマスターが倒されたとき、私がどれだけ心配しているか知っていますか!?!』

何か、いつもと方向性が違う?

『少しは、私たちを頼ってください!そんなに私たちは頼りないですか!?!』

「そんなことは…」

『だったら、次はちゃんと頼ってくださいね。もう1本行きましよう!』

えーー。

<アーンヴァル>

アーンヴァル、いつになったら起きるんだ?
お前の仲間達も、みんな心配しているんだぞ。
もちろん、俺もな。

また、一緒に戦おうな、絶対、約束だぞ。

『…………』

アーンヴァルから、返事が聞こえた気がした。

第29・5話 ケイスの修行風景（後書き）

特訓の風景と言うよりも、ある日の情景って感じだな。

ケイス「アークとラプティアスへの愛を感じる」

ま、実際にゲームで育ててるキャラだからな。
愛情はあるさ。

ケイス「他は？」

ツガルとベイビースも育ててるけど、どうしても先送りになっちゃうねえ。

ベイビースもかわいいんだけどね。

台詞回しとか。

それでは、次回こそちゃんと本編に繋がりますので。

ケイス「そういえば、次章のタイトルは？」

『それぞれのセイギ』でいこうかな、と。

それではー。

第30話 雪の中の再会（前書き）

新しい力を取得し、修行を終えたケイス。

だが、すでに原作が始まっていることを知ったケイスは、

ネプギアと合流するためにプラネテューヌを目指すのだった。

第30話 雪の中の再会

急げ、急げ。

俺はツガルをレインディアバスターに変形させ、一路プラネテューヌを目指していた。

ギョウカイ墓場でマジック・ザ・ハード以外のザ・ハードも出てきたんだ。

どこでどんな改変があるか解らないから、早く合流しなくちゃならない。

「ツガル、もっとスピードは出ないのか？」

『それでも私の最高速なのよ、マスター』

そんなことをしていると、ようやくプラネタワーが見え始めた。

「もう少しだ、ツガル。がんばってくれよ」

『神姫使いの荒いマスターよね、まったく』

ツガルはそう言いながら、スピードを維持する。

なんだかんだ言いながら、従ってくれるんだよな。

そして、教会の上空まで到着した。

「ツガル、下に降りてくれ」

『了解』

そして、ツガルは垂直に降り始める。

だが、俺は失念していた。

ここがプラネテューヌの繁華街だってことを。

『マスター、皆さんの視線を感じるのですが』

「まあ、珍しいんだからしょうがないだろ。空飛べるのなんて、女神と船くらいなモンなんだから」

そして、下に降りると、すぐにツガルを待機状態に戻し、教会に入っていた。

「どなたです？表が騒がしいようですが。…って、ケイスさん!？」

「いーすんさん、しばらくです。お元気でした?」

俺はいつも通りにそう挨拶する。

だが、いーすんさんにはそれが一大事だったようで。

「どこに行ってたんですか!皆さん心配していたんですよ!」

と、怒られた。

でも今は、ネプギアたちの方が優先だな。

「その話はまたいつか。今は、ネプギアの方が優先です。今、どこにいるんです、彼女」

その言葉にいーすんさんは驚き、

「ネプギアさんが帰ってきたことをご存知なんですか?」

と聞いてきた。

「ええ、つい先日風の噂で聞きました。各国を訪ねていると聞いていますが」

まあ、原作の知識だが、その辺は変わっていないと思うんだが。

「そうですか。今、彼女はルウィーにしていると報告を受けています」

みんな、今はルウィーにいるのか。

「じゃあ、俺もそちらに向かいます」

俺はそう言って立ち去ろうとした。

その俺をいーすんさんは呼びとめ、NPGを渡してきた。

「これは、NPGという情報端末です。何かあれば、これで連絡してください」

「わかりました。それじゃ、行ってきますね」

「ええ。ネプギアさんを頼みます」

そんな会話をし、俺は教会を出た。
さて、ルウィーに向かうか。

プラネテューヌの郊外に出て、俺はアークを呼び出す。

『マスター、ワタシの出番かい？』

「ああ。ルウィーまで行くぞ。お前の速さが必要なんだ」

『くうくうっ、嬉しい事言ってくれるねえ、マスター。それじゃ、いくよ。トライクモード！』

そしてアークはトライクモードに変形し、俺はそれに乗り込む。

『マスター、ちゃんとつかまってくれよ、ぶっ飛ばすからね』

そういうが早いか、アークはルウィーに向けて走り始める。

『やっぱ、走るってのは最高だねえ、マスター！』

やっぱ、アークは早え。

近道をしたとはいえ、こんな短時間でつくとは。

流石に、変形解除したときには消耗がすごかったけどな。

「ご苦労様、アーク。また走ろうな」

『ええ、…マスター。…でも、こんな…長距離は…勘弁して…ください』

アークも流石に長距離はダメか。

と言うより、長距離過ぎたか。

そして、街を見ると道の隅で少女が心配そうな表情である一点を見ていた。

あれは…。

side ロム

ネプギアちゃん、大丈夫かな。

ラムちゃんは『そんなの心配することない』って言ってたけど。それに、世界中の迷宮の方で雷が鳴ったのを聞いたし…。

「…ネプギアちゃん」

ラムちゃんを説得して、わたしもネプギアちゃんの手助けをしたいよ。

side ロム END

「ロム…ちゃん？」

俺はさっき見かけた少女にそう声をかけていた。

「…え？ ケイス…さん？」

「おお、やっぱりロムちゃんか。久しぶり、元気だったか？」

ロムちゃんは俺の顔を見ると、駆け出してきた、足にしがみついてきた。

「…ケイスさん、ケイスさんだ。ぐすつ、ひつく」

俺は、ロムちゃんが泣き終わるまで待ち、落ち着いたところで一回離れてもらった。

そして、目線を合わせて頭を撫でながらこう言った。

「ロムちゃん、何かあったのかい？」

そしてロムちゃんはちよつとずつ話し始めた。

3年前のあの日から、ブランさんが帰ってきていなくて寂しかったこと。

そして、ついこの間ネプギアが帰ってきたこと。

そのネプギアが、今世界中の迷宮に向かっていること。

…ん？このタイミングってことは。

「ロムちゃん、ネプギアが世界中の迷宮に向かったのはいつ？」

「…今日の朝」

遅かったか。

話から推測するに、もう封印が解かれてるだろうな。

今から追いついても意味はない、か？

そう考えている俺に、ロムちゃんが服の裾をくいと引っ張った。

「…ケイスさん。ネプギアちゃんを助けて！」

「え？」

「…すごく嫌な予感がする。だから…」

ロムちゃんが、そう悲痛な表情で訴えてくる。

これは、男として答えないといけないものだよな。

「わかった。それじゃ行ってくるよ」

そう言い、俺は踵を返し、世界中の迷宮に向かった。

side ロム

ケイスさんがいなくなったのを確認して私は呟いた。

「ネプギアちゃん、貸し1だからね」

ネプギアちゃんが心配なのは本当だけど、それとこれは別。
私はそのまま教会へ帰ることにした。

side ロム END

side ネプギア

「何でそう、ひどいことするんですか！」

私はそう下っ端さんに話しかける。

「うつせえ。さーて、そんなこと言ってる場合かなって」

下っ端さんがそう言うと、天井に魔法陣が映し出され、そこから口
ポットが5体出現した。

ロボット!?

かっこいいけど、今はおいておこう。

「わー、悪役の癖にかっこいいー」

…日本一さん、あとで殴っておこう。

「さーて、キラーマシンさん方、やーっておしまい」

しーん。

下っ端さんがそういつても、キラーマシンと呼ばれたロボットはうんともすんとも言わない。

下っ端さんだから、言うこと聞かないのかな。

「動かないロボットなんか、怖くもなんともないわね」

「です。今のうちに、下っ端さんをやっつけるです」

アイエフさんもコンパさんも、そう言いながら下っ端さんのほうへ近づいていく。

「お前ら、いい加減動きやがれー」

下っ端さんはそういうと、キラーマシンの頭を叩き始めた。
コンコンカンコンベチャッ。

最後、ベチャッていったよ!?

まあ、そのおかげで動き始めちゃったわけで。

「「「「ガアアアアッ」「」「」」

「くられ、日本一キーク」

日本一さんがキックをするけど、全く効いていない。

「ソウルズコンビネーション！」

アイエフさんもスキルを発動するけど、全く効かない。
だったら私が！

「変身！」

そう言って私は女神化する。

「フォーミュラーエッジ！」

高速の剣で何回も斬りつける。

けど、キラーマシンには効いてないようだった。

「さて、ここでジ・エンドか？女神さまよお」

下っ端さんはキラーマシンに命じて私に攻撃をさせようとしていた。
もうだめ、なのかな…。

そんな時、キラーマシン達に砲撃が加えられた。

side ネプギア END

「キラーマシンか、懐かしいなあ」

そう言いながら、俺はゼルを展開して砲撃を行った。

そして、5体すべてのキラーマシンに命中させた。

そういえば、原作だところって1体だけじゃなかったっけ。

…来て正解だったみたいだな。

「誰だ、テメエ」

「お前こそ誰だよ」

「効いて驚くなよ。私はマジエコノヌの、マジパネエ戦闘員、リケイスさんっ！」…毎回言うが、最後まで言わせろってんだ！」

やっぱり、名前を言わせてもらえないんだ、下っ端。

「おう、ネプギア。無事だったみたいだな」

「ケイスさんも。今までどこに？」

「その話は後だ。まず、こいつらを片付けてからだ」

俺は、キラーマシンたちを見る。

やっぱ、一発だけじゃダメだよな。

「へっ。テメエ、こいつらを倒すつもりなのか？無理無理、やめとけって」

あ、下っ端が復活した。

「貴女にいい事教えてあげるわ」

そう、アイエフさんが口を開く。

「この人は、前回のキラーマシン事件を解決した人よ」

「…マジ？」

「はいです」

ああ、言っちゃった。

…でも、前と同じ戦いはできないけどな。

「だ、ただど5体同時は難しいと思うけどな」

「あら、ケースを見くびってもらっちゃ困るわ。10体くらいまで
だったら平気じゃないかしら」

アイエフさん。

俺に何か恨みでもあります？

ま、できないことはないと思うけど。

「さて、と。みんな、しばらくぶり」

「…言いたいことは山ほどあるけど、後においてあげるわ」
そりゃどーも。

「で、勝ち目は？」

「あると思います？」

「なけりやここまで来ないんじゃない？」

そりゃそうか。

「ケイスさん、アーンヴァルさんは？」

「ああ、未だにマジエコンヌとの戦いの傷が癒えなくてね。治療中」

そう言うと、ネプギアとアイエフの顔が引きつる。

「ね、ネプギア。もしかすると、まずい？」

「私もそう思いました。どうしましょう」

「二人とも、ひどいなあ。俺がアーンヴァルがいないと何もできないと思ってる？」

「「そ、そんなことないですよ（わよ）」」

ふーん、まあいいや。

パワー戦になるから、アルトレーネかな？
ハウリンだと、防御に難があるからね。

「アルトレーネ、スタンバイ」

『了解したのです』

「変身っ」

そう言って、アルトレーネを纏う。

「さて、戦闘開始っ」と

……SAVE

第30話 雪の中の再会（後書き）

はい、ということで初めの再会者はロムちゃんでした。

ケイス「というか、どこにも雪の描写がされてないが」

いつもの事じゃん。

ケイス「それで、そのロムちゃんに要請されてネプギアを助けに行
ったんだ」

まあ、相変わらずロムちゃんが黒くて安心した。

ケイス「で、キラーマシンが一気に5体出てきてるんだが…」

お前なら大丈夫だろ？

それに、接近戦特化＋防御力最高のアルトレーネがパートナーなん
だから。

ケイス「多分大丈夫…かな？」

ということだ。

それでは次回、「情報交換」でまたお会いしましょう。

第31話 情報交換（前書き）

世界中の迷宮にて、キラーマシンに襲われようとしていたネプギアたち一行。

それを、間一髪のところでは助けに入ったケイス。さて、キラーマシンの運命は…。

12 / 5 文章を微妙に修正

第31話 情報交換

キラーマシンか。

前に戦ったことがあるけど、あの時はともに戦ってないんだよなあ。

そう思いながら、キラーマシンに剣を向ける。

「ま、恨みは…あまりないが、倒されてやってくれ」

そう言い、俺はキラーマシンの方に突っ込んでいく。

そして、剣を一閃。

ガキインと音がし、剣が止められる。

「ヘンツ。デカイ口叩いても、コイツ等には敵いつこないのさ」

下っ端がそんなことを言うてくる。

ブラオシュテルン

小剣じゃ、まあダメージは与えられんわな。

ジークムント

だったら、大剣に変えるだけだ。

そして、ブラオシュテルンを空中に投げ、粒子化させる。

「そうか、そうか。敵わないと見て、覚悟を決めやがったか」

…下っ端の癖に生意気だな。

そう思いながら、一振りの剣を召喚する。

「来いつ、ジークムント」

俺がそう言つと、俺の前に一振りの剣が現れる。

この剣は、ジークムント。

俺の力では扱えないが、アルトレーネの力なら。

「モード、トレース」

『了解なのです。アームをトレースモードで動かすのです』

そして、肩から伸びるアームがジークムントを掴み、再び構える。
トレースモードの場合は自分の腕を動かせば一緒に動いてくれるから、楽なんだよな。

「ヘッ、デカけりやいってもんじゃないぜ」

下っ端はそう言いながらこっちを見ながらニヤケている。
そんな顔をしていられるのも、今のうちだけだぜ？

「よい、しょつと」

そう言いながら、大剣を振り下ろす。

うん、本当に振り下ろしたただけなんだが。

ガシヤアアンと音がし、一体のキラーマシンの腕が地面に落ちた。
斬った場所はバチバチと火花が発されていた。

「「「「えええええっ！？」」「」「」

そんな、多重で叫ぶようなことじゃないだろ。
さて。

「まだ、やるかい？」

答えはあまり期待していないが、キラーマシンに対して言ってみる。

「キケン、キケン。キョウセイハイジヨタイショウハツケン。ゲイ
ゲキジュンビ」

…あら？

まさか、怒らせなくてもいいものを怒らせちゃった？

「ヘッヘーン。自分から攻撃対象になってくれるとはな。これだから、バカは扱いやすいぜ」

…よし、ブチ殺す。

コイツ等を片付けたらテメエの番だからな、下っ端。

side アイエフ

「アイツ、何自分で墓穴掘ってるのかしら」

私は、そんなことを言いながらコンパの入れてくれたお茶を飲んで
いた。

人間、たまには息抜きが必要よ。

ネプギアは「いいのかなぁ」なんて言ってたけど。

まあ、ケイスだから大丈夫でしょ。

「お前ら、そんなところでのんびり観戦とか、してんじゃねーよ」

ケイスのそんな声が聞こえてくるけど、どこ吹く風。

だって、私たちじゃ太刀打ちできないじゃない。

そんな時だった。

キラーマシンが口をあんぐりと開けて、何かを出そうとしていた。

…って、あれはミサイル！？

さ、流石にケースでもあれは無理かしら…。
私には、笑うことしかできなかった。

side アイエフ END

ミサイル！？

キラーマシンたちが口を開けたから何か出すのかと思ったら、ミサイルかよ。
しかも、5体同時に。

…これは、ちとまずいかな？

「アルトレーネ、ゲイルズゲイグル、行けるか？」

『はいなのです。…ゲイルズゲイグル、ロード完了なのです』

それじゃ、行ってみようか！

「ゲイルズゲイグル！」

俺がそう叫ぶと、宙へ舞い上がる。

そして、ジークリンデを投擲用に変形させ、それをキラーマシンたちの中心に投げ込む。

ドオオオオンと地響きがし、キラーマシンたちがいたところには、何も残っていなかった。

「さあて、まだやるかい？」

そう言いながらさっきまで下っ端がいたところを見てみたのだが…
誰もいない？

「キラーマシンは、まだたくさんあるんだ。覚えとけー…」

そう言いながら、どこかへ走って逃げていった。
ホントに、逃げ足速いなあ。

「さて、改めて。久しぶりだな、ネプギア。元気そうで安心したぞ」

そう言いながら、ネプギアの頭をポンポンと撫でる。

すると、ネプギアが目から涙を流し始め、俺の胸に飛び込んできた。

「うわあああん、ケイスさあん。生きててくれて良かったよお」

そう言いながら、俺の胸に顔をうずめ、泣きはじめた。

俺は、ネプギアが泣き終わるまで、背中を抱え頭を撫で続けていた。

「ぐすつ、感動の再会なのです。ギアちゃん、よかったですね…」

「コンパ、今はそつとしておいてあげなさい」

「はいです。で、あいちゃん。あの人がケイスさんって人ですか？」
「そうよ」

「ま、さっきも言ったけど久しぶりね」

アイエフが俺にその声を掛けてくる。

「そうですね、本当に久しぶりですね。それに……」
「といって、あたりを見渡す。」

ゲームでは見たことあっても、コンパと日本一には初めて会うからな。

「仲間が増えたんですか？」

「そうよ。二人とも、私たちの仲間よ」

そう言つて、コンパと日本一を紹介してもらった。

「そつえば、今までどこにいたんですか？」

ネプギアがそう聞いてきた。

まあ、嘘を言つても仕方ないから、本当のことを言っておこうか。

「今まで、空に浮かぶ島にいたんだ。そこで、修行してたんだ」

「修行！？」

日本一がそう反応した。

ああ、確かそういうキャラでしたね。

「アーンヴァルさんは？」

「アーンヴァルは、まだあいつらとの戦いのダメージが抜けてないみたいだね。まだ、目が覚めないんだ」

未だに目覚めないんだよなあ。

もうおきてもいい頃なんだが、何でだろ。

「それと、その鎧は何ですか？」

コンパがおずおずと聞いてきた。

…とって食ったりしないから、そんなに怯えなくてもいいよ。

「これは…」

『私はアルトレーネと言つのです。よろしくなのです』

「」「」「鎧がしゃべった!？」」「」

「まあ、というわけ。アーンヴァルと同じ存在だね」

そう言いつつ、アルトレーネを待機状態に戻し、服にしまった。

「そういえば、今どんなことが起こってるんだい？またキラーマシンが復活するなんて」

原因は知っているけど、あえてそう聞いておく。
だって、普通は知らないはずだからね。

「ゲームキャラさんが…壊されちゃいました。こんな風に」

ネプギアはそう答えながら、バラバラになったゲームディスクの破片を見せてきた。

結構、クルもんがあるな。

「ねえ、ケイス。貴方の魔法で何とかならない？」

「無理だな。もう、魔法使えないし」

まあ、取られちゃったしね。

「これから、どうすればいいんでしょうか…」

「とりあえず、ルウィーに戻らないか？みなさんに報告した方がいいだろう」

「そうね。まずは、そうしましょうか」

そして、俺たちはルウィーの教会に来た。

「おじゃまします」

そう言いながら、協会の扉を開ける。

そこには、ミナさんとグリさんが神妙な顔つきで話し合いをしていた。

が、こちらに気づき、返事をしてくれた。

「はい、何の御用でしょうか…って、ケイスさん!？」

「お久しぶりです。ミナさん、グリさん」

俺はそう言って、頭を下げた。

「ロムちゃんが『ケイスさんが帰ってきた!』と言っていました、本当だったんですね…」

グリさんが、俺の顔を見ながらしみじみとそう言った。けど、今はそんな場合じゃない。

そう思い、俺はネプギアに報告をするように促した。

「ミナさん、グリさん。大変なことになっちゃいました」

ネプギアはそう切り出し、ゲームディスクが壊されたことを2人に伝えた。

「そうですか。マジエコンヌが…」

「また、マジエコンヌなんですね…」

2人とも、同じような反応をする。

特に、グリさんは前回の当事者だしなあ。

「一応、壊された直後に出てきたキラーマシンは倒しておきましたけど、まだまだ出てくるでしょうね」

「今回は、どうしたらいいんでしょうか」

ミナさんは頭を抱え、考え始めた。

そんな時、誰かが教会のドアをノックした。

「こんにちわ、ですの」

……SAVE

第31話 情報交換（後書き）

と言うことで、31話をお送りしました。

今回ケースが使った技は、下の通り。

ゲイルズゲイグル

ジークムントを投擲用に変形させ、敵に投げつける技。

基本的には直接相手に投げつける技だが、今回のように対象物なしで投げつけ、爆風で攻撃する方法も使える

ケース「爆風で、つてのはオリジナルだよな」

だつてさ、当て辛いんだよアレ。

爆風くらいの補正がないと、当たらないってば。

そういえば、アルトレーネとコンパって会話の語尾が似てるよね。
二人だけで話をさせると、気が狂いそうだ。

ということだ。

それでは次回、「錬金術師」でまたお会いしましょう。

第32話 錬金術師（前書き）

ゲームキャラが壊され、封印を失った世界中の迷宮。

世界中の迷宮にはキラーマシンが続々と召喚されている。

この危機を脱する方法は…。

第32話 錬金術師

「こんにちわ、ですの」

俺たちが教会の中で色々と模索している中、そんな声が聞こえた。

「どちら様ですか？」

ミナさんは突然の来客にそう答える。

今は、一分一秒が惜しい状況だしな。

でも、この声は…。

「がすとは、がすというのです。街から街へ旅をしているのです」

がすとはそう言いながら、俺たちが固まっているところまで歩いてきた。

そして、俺たちの近くへ来たとき、彼女はこう言った。

「何か、困っていることはないのです？」

そう言いながら、俺たちの話の中に入ってこようとする。

まあ、彼女の性格からしたら、積極的に関わってきそう…かなあ。

そう思い、助け舟を出そうとしたんだが…。

「実は…」

ミナさんががすとに今回のいきさつを話し始めていた。

ミナさん、口軽っ。

「そういつことだったですよ」

がすとは、そう言いながら自分が持っているカバンジッパーをおもむろに開け、その中をまさぐり始めた。

「えーと、確かここに入っていたはずですよ」

そう言いながら、カバンの中をずっと探っていた。
しばらくして、手をカバンから出して、こう呟いた。

「なくなってたですよ」

そう言いながら、カバンのジッパーを閉めていた。

「何がなかったんですか？」

「ゲームキャラの補修剤ですよ。でも、取ってくればどうとでもなるですよ」

そう言うと、ミナさんに紙とペンを要求し、それを受け取る。
そして、何かを書き始めた。

それは、ゲームキャラの補修剤を作るための素材リストだった。

「レアメタルにデータニウム、この2つが必要です」

そう言い、その2つの素材の採取場所について説明を始めた。

「レアメタルは、この辺だとルウィー国際展示場あたりのモンスターが落とすですよ」

「データニウムは、世界中の迷宮あたりのモンスターが落とすですの」

そう言っつて、一息つく。

「この2つの素材を集めてくれば、補修剤が作れるですの」

「誰がよ」

アイエフががすとの言葉に噛み付く。

だが、がすとは涼しい顔で「がすとですの」と答えた。
知ってる身からするとアレだが、普通は信用できないよなあ。

「それを取ってくればいいんだな？」

俺はがすとに対してそう言葉をかける。

「ですの。物分りが早くて助かるですの」

「と言うことらしい。ここは、協力してこの2つの素材を集めようか」

俺がそう言っつと、そこにいた全員がうなずいた。

さて、どうやって集めようか。全員で一緒に行動するのもあれだしなあ。

そう思っていると、ネプギアが声を掛けてきた。

「ケイスさん、ここは私と2人だけで充分だと思いませんか？」

まあ、確かに女神化したネプギアと俺だったら、そこまで時間をか

けずに集められるな。

俺がそうだな、と返事をしようとした直前に、「ちょっと待ったー」と声が聞こえた。

この声は、ラムちゃん？

そう思った瞬間、足のあたりに『とんっ』と何かがぶつかってきたのを感じた。

何だろう、と思い見てみると、そこにはロムちゃんがそこにいた。

「…ケイスさん、わたしと…行こう？」

「ロムちゃんが行くなら、当然私も一緒に行くわよ？」

気がつくと、ラムちゃんも俺の近くにいた。いつの間に…。

「ロム様、ラム様、ご立派になられて…」

ミナさんは、そんな二人の姿を見ながら涙を流していたり。

まあ、原作だとずっと遊んでいようとしていたしな。

「ロムちゃん、ラムちゃん。遊びじゃないんだよ？2人はお留守番してて。私とケイスさんで取って来るから」

「…私たちの国の問題だから。ネプギアちゃんは、みんなと一緒に待っていていいよ？」

そう言いながら、ネプギアとロムちゃんは『私が』『ううん、わたし』を繰り返している。

side ネプギア

もう少しだったのに！

もう少しで、ケイスさんと2人だけで行けたのに！

ロムちゃんもラムちゃんも何で空気を読んでもくれないのかなあ。
でも、ケイスさんなら、私を選んでくれるよね？

side ネプギア END

side ロム

もう少しで、ネプギアちゃんに持っていかれるところだった…。
ラムちゃん、GJ！

ネプギアちゃんには絶対に負けないから。
お姉ちゃんの本にあった、『アレ』を試してみようかなあ？

side ロム END

「まあ、ネプギアが言うことも一理あるね」

俺はそう言つて、ロムちゃんとラムちゃんを諭すために、彼女達の
目線に合わせるように屈んだ。

「ね、二人の気持ちも良く分かるけど、危険なんだよ？だから、今
回はお留守番してくれないかな？」

そう言いながら、2人の頭を撫でる。

俺の後ろでは、ネプギアが首を縦に振っているのが解った。

うん、ネプギアは相変わらずやさしいんだなあ。

そう思っていたとき、ロムちゃんが下を向き小さな声でぶつぶつと呟いていた。

「ロムちゃん、どうしたの？」

そう言いながら、ロムちゃんの頭を優しく撫でる。

「ケイスさん、わたしのこと、嫌い？」

俺が「いいや、そんなことないよ？」と答えると、ロムちゃんは顔を上げ、俺のほうを見つめてきた。

その目には、涙が溜まっていた。

「ルウィーのために、何かしたいって言うのはわるいことなの？わたし、今まで何もできなかったから……」

そういう彼女の目からポロボロと涙が次から次へと溢れてきて…。

俺は、罪悪感に苛まれ、気がついたらロムちゃんを抱きしめていた。「ごめんな」と呟きながら。

side ロム

お姉ちゃんの本にあった『アレ』、こうかはばつぐんだった。

うん、でも何回も使えないね、これは。

私はケイスさんに抱きしめられながら、ネプギアちゃんにこっと笑いかけたのだった

side ロム END

「それじゃ、2手に分かれて、素材集めをしようか」

ネプギアは未だにロムちゃんとラムちゃんが前線に出ることを快く思っていないようで、ずっと口を尖らせたままだった。

「ネプギア、大丈夫だよ。2人は、俺が責任を持って守るから」

ネプギアの心配を払拭しようと言ったのだが、ネプギアはピッとそっぽを向いてしまった。

やれやれ、本当に心配性だなあ、ネプギアは。

向かう先は、ネプギアたちがルウィー国際展示場で、俺とロムちゃん、ラムちゃんが世界中の迷宮となった。

俺たちが世界中の迷宮になったのは、キラーマシンが出てきたときの対処のためだった。

side ネプギア

「全く、ケイスさんは女心ってのがわかってないです!」

私はそう言いながら、歩を進める。

レアメタルを落とす敵を探しながら。

「それが、ケイスって奴よ」

アイエフさんがそう言いながらウサベーターを切り裂く。

「そう言われても、なかなか納得できないんですよ」

「だったら、告白しちゃえばいいのに」

そ、それは難易度が高いですよ、アイエフさん。

私は顔を真っ赤にしながら、アエルを攻撃するのだった。

side ネプギア END

俺とロムちゃん、ラムちゃんは世界中の迷宮を冒険中。

さて、川鳥教授はどこかなー。

そう思いながら、目に付いたモンスターを3人で片っ端から倒していく。

「にしても、ケイスって結構強いわよね」

ふと、ラムちゃんがそんなことを言い出した。

「まあ、色んな仲間が俺を助けてくれるからね」

今回は、高速離脱も考えて、ラプティアスを纏って行動している。

一番フットワークが軽くて、攻撃力が高いからな。

そんなこんなで川鳥教授のところへ到着。

俺はすぐさまスーパーダブルナックルを発動し、川鳥教授を瞬殺。

そして、データニウムを手に入れ、すぐにルウィーの教会へ帰った。

そこには、すでにレアメタルを入れたネプギアたちがいた。

……SAVE

第32話 錬金術師（後書き）

と言うことで、32話でした。

今回ケースが使った技は、下の通り。

スーパーダブルナックル

いわゆる、乱舞系必殺技。

1発1発の攻撃力が高い。

ガードすることは可能だが、そう長くは続かない。

ロムちゃん無双状態。

どうしてこうなった…。

ということ。

それでは次回、「ゲームキャラの復活」でまたお会いしましょう。

第33話 ゲームキャラの復活（前書き）

ネプギア組とロムラム組に分かれて補修剤の素材を集めてきた。
これでゲームキャラ復活の舞台は整った。

第33話 ゲームキャラの復活

「これなら、素材としてはばっちりですの」

がすとはネプギアと俺から受け取ったレアメタルとデータニウム確認するなりそう言った。

まあ、ここからはがすとに任せるしかないか。

「さて、教祖殿。先ほどの部屋に案内して欲しいですの」

そうみなさんに言っつて、案内を頼んでいた。

何でも、俺たちが素材集めをしている最中に、調合を行う部屋を見繕っていたらしい。

まあ、広い部屋はあったが散らかっていたため、さっきまでみなさんとグリさんで片づけをしていたとか。

そして、俺たちはみなさんに案内されるまま、その調合部屋へ案内された。

「さて、調合釜をセツトするですの」

そう言っつて、カバンのジッパーを開き、調合釜を取り出そうとしていた。

「やっぱり、調合釜は、少し、重いです、のっ！」

ドカツと音がし、調合釜が床に置かれた。

…俺は夢でも見ているんだろうか。

なんで、カバンの容積より大きい調合釜が、カバンから出てくるん

だろうか…。

「なあ、がすと。ひとつ聞いていいか？」

「なんですの？」

「その釜、カバンより大きいよな？」

「ですの」

がすとは『それが何か？』と言いたげな顔で俺のほうを見てきた。

「ひとつだけ言えるのは、『錬金術はそれなりに万能』、ですの」

そう言いながら、調合の準備を進めていつていた。

「へえ、これが調合釜なんだー」

「…すごい、本格的？」

ロムちゃんとラムちゃんは興味深々に釜を見ていた。

そして、その興味がカバンの方に移る。

「でも、このカバンもすごいよねー。こんな大きいものが入っちゃうんだー」

「…（コクコク）」

そう言いながらラムちゃんがカバンに手を伸ばそうとしたとき。

「ダメですの。そのカバンに触っては、ダメですの」

作業を行いつつ、ラムちゃんにその声を掛ける。

「えー、何でよー」

「けち」

ラムちゃんは、頬を膨らませながら、がすとをじつと睨んでいた。

「触ってもいいですけど、この手袋をしてないと触った場所から腐っていくですの」

がすとはそう言いながら、自分が装備している手袋を見せる。

あの手袋、そんな機能があったんだ。

「そ、そんな脅しになんて引つかからないわよ。でも、興味なくなつたから、触らないでおくわ」

ラムちゃんは、そう言いながらカバンから離れていった。

内心、すごい怖いんだろうなあ。

ラムちゃんがそんなことになっているとき、ロムちゃんはいつと。

「…ネプギアちゃん、触ってみる?」

「え、遠慮しておきます」

「…そう」

ネプギアにカバンを触らせようとしていた。

ネプギアも、自分に振られるとは思っていなかったようで、狼狽していた。

「…そりゃ、そうだよな。」

調合の準備も終わり、後は調合するだけ。
そんなとき、近くでドオオオントという音が鳴り響き、教会が揺れた。

「何があつたんだ？」

俺はそう言い、教会の外へ飛び出た。

飛び出た先で俺の目に飛び込んできたのは、街を蹂躪するキラーマシンの大群だった。

ぱっと見、数十体はいるだろう。

俺は、急いで調合部屋に戻りみんなにそのことを伝え、俺は迎撃に出ると言うことも伝えた。

「ケイスさん、私も行きます」

そう言ったのは、グリさんだった。

グリさんは魔法も使えるから、実際ありがたい。

「ケイスさん、私も……」

「ネプギア。君たちはゲームディスクが復活したらすぐに世界中の迷宮に向かってくれ」

おそらく、一緒に戦うと言ってくれようとしたんだろうが。

今回のように原作にないイベントが起こるのなら、温存しておくに越したことはない。

「ロムちゃんとラムちゃんは、ミナさんと一緒にここで待機してお

いてくれ」

「何で！？わたしたちも戦えるわよ！」

「…（コクコク）」

ロムちゃんとラムちゃんはそう言って戦おうとしているが。

「2人は、ここでミナさんとがすを守ってくれ。いざとなれば、4人で逃げてくれてかまわない」

いざ、という時が来ないことを祈るだけだけどな。

そうこうしているうちに、グリさんの戦闘準備も整い、俺たちが出る段となった。

「みんな、あとはよろしく頼む」

「減らせるだけ減らしておくから、ね」

俺とグリさんはそう言って教会を出発した。
キラーマシンを迎撃するために。

side ネプギア

ケイスさんとグリさんは、私たちに後を託して教会を後にした。

2人を見送った後、私はアイエフさん、コンパさん、日本一さんのほうに向き直り、こう言った。

「アイエフさん、コンパさん、日本一さん。お願いします、私に力を貸してください!」

「何を今更…。決まってるでしょ?」

「私は、ギアちゃんが嫌だって言っても、ついて行くって決めてるです」

「女神様のお願いを断るヒーローなんていないよっ!」

「皆さん…」

みんな、力を貸してくれるって言ってくれた。

だから、私は一生懸命自分出来ることをやろう。そう心に決めた。

「ぐるこーん、ぐるこーん…」

がすとさんは一時も休まず調合釜をかき混ぜている。

額には汗が浮かんでいるがそれをもともせず、一心の下ずっとかき混ぜている。

時にゆっくりとかき混ぜたり、ふいに速くかき混ぜたり…。

「ふう、このくらいですの」

そして、がすとさんが調合釜から離れた。

そして、皆の方を向く。

「あとは、ここにゲームキャラの破片を入れれば終わりですの」

そう言つて、ミナさんの元へ行きゲームキャラさんの破片を受け取る。

そして、それを調査釜にどぼどぼと入れ、3回かき混ぜた。すると、調査釜から光が溢れ、ゲームキャラさんが復活した。

「あら？私は何でここにいるんでしょうか？確か私は…」

「あなたは一度壊されてしまったんですよ」

ミナさんが、ゲームキャラさんにそう言った。

「そう…ですか。では、封印は…」

「ええ、解かれてしまいました。今現時点で、すでに街に影響が出現始めてしまっています」

そう言つて、ケイスさんとグリさんが迎撃に出たことを説明した。

「そうですか、彼らが…。ですが、彼らなら間違いなく、この状況を打破してくれるでしょう」

「ええ、状況は違いますが、4年前と同じです。それですね、ゲームキャラさん…」

「教祖、それ以上言わなくても分かっています。今一度、封印の任に就きましょう」

これで、キラーマシン封印の準備は整いました。後は、再度封印するだけです。

s
i
d
e

ネ
プ
ギ
ア

E
N
D

第33話 ゲームキャラの復活（後書き）

キラーマシンが復活、かつ街に被害が出てしまっている。

前回のキラーマシン騒ぎとはちょっと違う状況になっています。

さて、ケイスとグリは街に進行してきたキラーマシンにどう対抗するのか

ということ。

それでは次回、「蒼き翼」でまたお会いしましょう。

第34話 蒼き翼（前書き）

迎撃に出たケイスとグリ。

そこに待ち構えるは、数十体のキラーマシンと…。

第34話 蒼き翼

俺とグリさんが外に出ると、キラーマシンから逃げようとする人々で溢れていた。

「グリさんはとりあえず皆の先導をお願いします」

「わかりました。皆の避難が終わったら、私もすぐに駆けつけます」

俺は、「よろしく」と言ってからキラーマシンの方へ駆け出した。キラーマシンたちは、家を破壊しながらこちらへ向かってきていた。だが、何かおかしい。

下っ端の姿は見えないのに、統率がなされている。

ワレチューの姿も見えない。

誰が、統率している？

「ほお、リンダから報告を受けてきてみれば。やはりお前だったのか」

そう、声がする。

この声、聞き間違えるはずがない！

「…マジック・ザ・ハード！」

「生きていてくれて嬉しいよ、逃亡者^{ケース}」

出来れば、したくない再会だった。
しかも、こんな時期に。

「マジック・ザ・ハード。なぜ、お前がここにいる」

声が震える。当然だな。

前回、敵わなくて逃げた相手に、一人で挑まなくてはならない。

「愚問だな。我等の障害となる者がいるのなら、排除するのが当然だろう」

そう言った後、マジック・ザ・ハードはキラーマシンたちに掃討を続けるように指示を出す。

「さて、これで邪魔も入らん。あの時の続きをしようか」

そして「今回はブレイブの邪魔も入らんしな」と言いながら、俺の方に鎌を向ける。

「ハウリン、スタンバイ」

『了解です、マスター』

それに答え、俺もハウリンをセットアップする。

「前の鎧は使わないのか？」

痛いところを突いてくれる。

お前らのおかげで、まだ目覚めてないんだよ！

「……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。私は我等の障害となる者を駆逐するのみ」

そう言つて、鎌を構え俺の方へ斬り込んできた。
そして、鎌が振り下ろされる。

「くうっ！」

俺はそれを左腕でガードしつつ、右腕を振りかぶりストレートを放つ。

だが、マジック・ザ・ハードは鎌の柄の部分を使い、それを防ぐ。

「人間にしては、いいパンチだ」

「それはそれは、ありがと、よっ！」

そう言いながらもう一回右のストレートを放つ。
が、今度は後ろに跳躍され、避けられてしまった。

「ハウリン、ドッグサーカス行けるか？」

『了解です。…ドッグサーカス、ロード完了です』

「今度はこっちから行くぜ。ドッグサーカス！」

そう言つて、俺はマジック・ザ・ハードの懷に飛び込み、パンチの連打を浴びせる。

流石にこれは防げなかったようで、ほぼすべてが手ごたえがあった。

「これで、最後だああっ！」

そう言いながら体を引き絞り、最後の一撃を入れる体勢に入った。
左足を踏み込み、体のバネを最大限に使い右腕を打ち込む。

「ドッグ・インパクト！」

俺の右腕がマジック・ザ・ハードの腹に突き刺さった……かのように見えた。

手ごたえが、薄い。

マジック・ザ・ハードが瞬間的に後ろに跳んでいたためだった。だが、それでもダメージが蓄積しているのは明確だった。

「さて形勢逆転だ、マジック・ザ・ハード」

「ふふ。そのようだな」

マジック・ザ・ハードはそう言いながら邪笑う。

「何が可笑しい！」

「君が私の策略に見事に嵌ってくれてそれが嬉しくてつい、な」

そう言いながら、マジック・ザ・ハードは魔法陣の中に姿を沈めていく。

どういう、意味だ？

…そういうことか。

俺は、奴に嵌められたってことか。

Side
グリ

ケイスさん、何をやっているんだろう。

私は、キラーマシンたちの攻撃がなくならないことに疑問を感じた。

…何か、不測の事態が発生した？

そう思い、ケイスさんのいるほうを見てみた。

確かに、ケイスさんは何かと戦ってる。

けど、キラーマシンが放置されているから、攻撃が止まない。

「皆さん、教会まで避難をお願いします」

私はそう言つて、キラーマシンの方へ駆け出す。

私が、守らなきゃ。

キラーマシンだって、機械仕掛けなんだから、雷に弱いはず。そう思い、私は雷撃の魔法を唱える。

「雷よ降れ、サンダーフォール」

雷撃の呪文は、確かにキラーマシンに直撃した。直撃したキラーマシンは止まったけど、まだまだ残ってる。

「止まって！止まってよぉ！」

私はそう言いながら、サンダーフォールを連発する。

だけど、キラーマシンの侵攻は止まることはなかった。

かといって、街中で氷炎魔法メトロアを放つわけにもいかないし…。

『だったら、わたしを呼んで！』

頭の中に、そう声が響く。

誰？私に話しかけてるのは。

『私は役に立つよー。それに、わたしをゲームギョウ界に喚べるのはあなただけみたいだし』

信じて、いいのかな？

『うん、わたしの名前は…』

私は、彼女の名を呼んだ。

side グリ END

不意に空に雷鳴が轟く。

そして空に亀裂が走り、空の一部が割れた。

「な、何だありゃ」

俺は、そう口にしていた。

まるで、何かを召喚しているみたいだな。

そして、その割れたところから何かが出てくる。

俺は、それに見覚えがあった。

「ビック…バイパー？」

そう、往年の名作STGのプレイヤー機、ビックバイパーだった。けど、何か小さいな。

s i d e グリ

あれが、私が喚^よんだもの？

私はその飛行機を見ながらそんなことを思っていた。

『あ、おねーちゃんありがと。これで、わたしも「ますたー」に会えるよ』

そう言っつて、その飛行機はお礼だと言っつて、キラーマシンたちを全て破壊してくれていた。

s i d e グリ E N D

その光景は、圧巻だった。

ビックバイパーが使用できる武器である、レーザー、スプレッドボムなどを使ってキラーマシンたちを破壊していた。

俺は興味本位で近くに寄っつて行つた。

すると、ビックバイパーから声が聞こえてくる。

『ますたー、やっとお会いできました！』

…… S A V E

第34話 蒼き翼（後書き）

さて、ビックバイパーが登場したわけですが。

ケイス「彼女は何者？神姫みただけど、俺はビックバイパーの神姫なんて知らないぞ」

まあ、その辺は次回に。

今回使用した技は以下の通りです。

ドッグサーカス

敵の懐にもぐりこみ、パンチの連打を浴びせる技。
地味に痛い。

ドッグ・インパクト

本作オリジナル。

ドッグサーカスで削りきった後のフィニッシュブロー。
渾身の力を込めて放つストレートパンチ。

ということ。

それでは次回、「使命」でまたお会いしましょう。

第35話 使命（前書き）

俺のことを『マスター』と呼ぶビツクバイパー。
彼女は一体…。

第35話 使命

キラマシンの大群を一掃する火力を持ったビックバイパー。
そんなビックバイパーが俺のことをマスターと呼ぶ？
どうなってんだよ一体！

『ますたー、何か問題でも？』

ビックバイパーが、心配そうに声を掛けてきた。
まあ、怪訝そうに見ていたことは認めるけど。

「キミは一体誰なんだ？」

『わたし？わたしはヴェルヴィエッタ』

「ケイスさん、無事だったみたいですね」

そう声を掛けられ、俺はそちらの方を向く。
声がした方から、グリさんが歩いてきていた。

「グリさん、そちらも無事な用で何よりです」

「無事と言っか…。その子がいなかったら、大変なことになっていたんですよ？」

「その件に関しては申し訳ない。で、グリさんはコイツのことを知ってるんですか？」

そう言っつて、ヴェルヴィエッタと名乗ったビックバイパーを指差す。

『お姉ちゃん、やつほー』

「…まあ、私が喚んだみたいですからね」

そう言つて、ため息をつく。

「グリさんが喚んだ？」

「ええ。なんと言つか、頭の中に『私を喚んで』と響いてきて」

グリさんはそう言つて、ヴェルヴィエッタの方を見る。

『？』

ヴェルヴィエッタは、自分が何故見られているのか解らない様子だった。

とはいえ、ヴェルヴィエッタのおかげで助かったのも事実だしな。

「まあ、何と言つか。ヴェルヴィエッタ、助かったよ。ありがとう」

『ま、ますたーからそう言われると、すっごい嬉しいよ！』

「で、君は何者で何でここにいるか教えてもらえないかな？」

そう言いながらヴェルヴィエッタの方をもう一度見る。

…いや、睨んだと言つた方が良いか。

『ますたー、なんか怖い感じがしますー』

そう言いつつ、ヴェルヴィエッタは俺の質問に答えた。

まず、存在としては神姫である、ということ。

元々時空転移装置でゲームギョウ界に転移するはずだったが、座標がずれて亜空間に閉じ込められてしまったらしい。

そして、呼びかけをしても誰にも気付かれず、やっとこの時代で波長の合う人間^{グリさん}を見つけてコンタクトした。

…ということらしい。

『他の神姫はここにちゃんと転移できたのに、なんでわたしだけ…』

「お前も神姫なのか？」

『あ、はい！ちゃんとごあいさつしてなかったよね。ビックバイパー型神姫のヴェルヴィエッタだよ！』

ビックバイパー型？

まあ、型^{フレーム}がビックバイパーってのはわかるが。

「で、どんな能力があるんだ？」

『元々、他の神姫^{おねーちゃんたち}のサポートロイドとして作られたんだ。一応、武装もあるけど…他の神姫^{おねーちゃんたち}には劣るよ』

「サポートロイド？」

『うん。ヒューマノイド型に変形もできるんだよ』

そう言っつて、ヴェルヴィエッタはヒューマノイド型へ変形した。
なんか、マクロスのバルキリー？

「…何か微妙だなあ」

side ネプギア

それじゃ、ゲームキャラさんも復活したし、そろそろ…。
そう思い、みんなに声をかける。

「それじゃみんな、行きましょう！」

私はそう言つて皆を促し外へ出た。

「うわ。何かすごい光景ね」

「けが人さんもいっぱいいるです」

「うわあ、家がたくさん倒されてるよ」

「げっ。何よこれ」

「…ひどい」

「残骸がいっぱいなんですの」

みんな外の景色に思い思いのセリフを呟く。

そして私は、その景色の中にケイスさんとグリさんの姿を見つけた。
その横には、何か青と白のロボット(?)が浮いていた。
か、かつこいい…。

「ケイスさん、グリさん」

私は手を振りながら二人に近づいていった。

side ネプギア END

「ケイスさん、グリさん」

ネプギアの声が聞こえる。

ああ、ゲームキャラの補修が終わったのか。

そして、声のした方に目を向けると、教会にいたはずの皆がこっちに向かってきていた。

「おお、みんな。とりあえずキラーマシンは駆逐したぜ？」

俺はそう声を発しているのだが、皆の視線が俺の横に集まっているのに気付いた。

「ケイスさん、その横のロボットは何ですか？」

ネプギアがそう聞いてくる。

そうしている間にも、日本ーやロムちゃん、ラムちゃんがヴェルヴィエッタにぺたぺた触っている。

「俺の新しい仲間、ヴェルヴィエッタだ」

『ヴェルヴィエッタです。よろしくー』

軽っ。

まあ、AIが未成熟なんだろうなあ。

『それじゃますたー、わたし帰るね。用があるときには呼んでね！』
ヴェルヴィエッタはそう言うのと光の珠となり、俺の懐へ飛び込んできた。

「ケイスさん、私たちゲームキャラさんを元の場所に連れて行くんですけど、一緒に行きませんか？」

ネプギアが俺にそう聞いてきた。

…まあ、一緒に行ってみるか。

「ああ、いいけど。ロムちゃんとラムちゃんも一緒に行くの？」

「…ケイスさんが行くなら（ぼそぼそ）」

「ロムちゃんが行くなら、私もー」

ロムちゃんとラムちゃんも行く気満々みたいだけど。

ミナさんはどうしようかなあ。

そう思っでグリさんを見ると。

「ミナさんには、私がついてるから大丈夫ですよ」

グリさんはそう言っで、にっこりと笑っでいた。

そして、ロムちゃんとラムちゃんに何やら小声で話をしていた。

「うん、わかつた」

「めーわくなんてかけないわよ」

グリさんがロムちゃんとラムちゃんに何か言い聞かせていたようだった。

「それじゃみなさん、行っでらっしゃい」

そう言って俺たちを送り出すグリさん。

「それじゃ、みんな行こうか」

そう言う俺に、

「はいっ！」

「そうね」

「はいです」

「うんっ」

「ですの」

「…うん」

「しょうがないわね」

それぞれが答えて出発したのだった。
目指すは、世界中の迷宮！

……SAVE

第35話 使命（後書き）

さて、ビックバイパーの正体が明らかに。

ケイス「まあ、一応味方だったのはわかった」

ということで、紹介をしておきます。

ビックバイパー型神姫 ヴェルヴィエッタ

まだ、武装神姫B M m k 2に正式に出てきては 아니ですが、一応
配信予定なので。

ケイスはこの情報が出る前にゲームギョウ界に来てしまったので知
らないのも当然。

ただ、彼女は武装神姫のほうとはちょっと設定を変えています。
個体でのセットアップは一応可能ですが、サポート的な役割の方が
強くなるかと。

どうサポートするかについては、おいおい説明していきます。

それでは次回、「フォームチェンジ」でまたお会いしましょう。

第36話 フォームチェンジ（前書き）

世界中の迷宮…そこは、かつてキラーマシンが封印されていた地。
ケイスたちは、再びキラーマシンの封印に赴く。
そこに現れしは…。

第36話 フォームチェンジ

この世界に来て、何回目だろう。

この『世界中の迷宮』に入ったのは。

間違いないのは、前々回も今回と同じくキラーマシンの封印のために入ったこと。

「あー、やっぱりまだキラ（略）が残ってるんだな」

世界中の迷宮に入って早々にキラーマシンの大群を見かけて、おれはため息を吐く。

まあ、ここは俺が一肌脱ごうかねえ。

side ロム

あ、ケイスさんがため息を吐いてる。

さつきもキラーマシンと戦ってたしね。

もう辟易しちゃってるのかな。

私はそう思って、思い切ってネプギアちゃんに提案を持ちかけてみた。

「…ネプギアちゃん？ここは、わたしたちが引き受けるから、先に進んで？」

わたしの横でラムちゃんがびっくりした顔をしてるけど。

「本当に、任せちゃって大丈夫かな？」

ネプギアちゃんはそう言つて、ケイスさんにそう話しかける。
うん、ここまでは計画通り。

ケイスさんだったら、絶対にこう言ってくれるはず。

『あの二人だけじゃ危ないから、俺も残るよ』
つて。

side ロム END

むう、パーティー全員の視線が俺に集中してるような気が…。
まさか、ここつてそんなに重要な選択だったりする！？

つて、ちよつと考えてみよう。

原作だとここでロムちゃんとラムちゃんが乱入してキラーマシンを
制圧。

ネプギアたちはハードブレイカーと戦闘…だよな。

ロムちゃんとラムちゃんが女神化できるかはわからないが…。
多分、ネプギア達についていくほうが正解…なんだろうなあ。

「そついえば、ロムちゃんとラムちゃんって女神化できるのか？」

俺は一応確認のためロムちゃんとラムちゃんにそう聞いてみる。

「もちろん、できるわよっ！」

「…うん」

だったら、答えは決まっただな。

「それじゃ、ロムちゃんとラムちゃん、ここは頼む。出来るだけ早く
封印するからさ」

そう言つて、ネプギアたちと一緒に封印の地を目指し歩き始めた。

side ロム

…うそ。

何で。何でケイスさんが、ネプギアちゃんと一緒に行っちゃうの!?

「…変身」

わたしはぼつりとそう言つて、女神化する。

そして、ラムちゃんに声を掛ける。

「ラムちゃん、ごめんね。読み間違えちゃった」

「だ、大丈夫よ。わたしとロムちゃんだったら、こんな奴ららしくよーだから」

ラムちゃんはそう言いながら女神化する。

けど、ラムちゃんの体が少しだけ震えてるのが解る。

怖いよね、わたしも怖いもん。

だけど…。

「…言つたことは守らないとね。イイ女の条件だからっ!」

「ルウイーの双子女神候補の実力、見せてあげるっ!」

わたし達は自分たちにそう言い聞かせて、キラーマシン達に向かつていった。

side ロム END

俺たちの後ろから、金属同士がぶつかる音が聞こえてくる。
きつと、ロムちゃんやラムちゃんが奮戦しているんだろうなあ。

「あの、ケイスさん。ロムちゃんとラムちゃん、大丈夫なんですよか」

ネプギアが心配そうにそう聞いてきた。
うんうん、ネプギアは優しいねえ。

「だいじょうぶだよ、ネプギア。あの二人だって小さくても女神候補生なんだろう？」

そう言いながら、後ろの音に耳を傾けていた。
だが、さっきと音が微妙に違う？

違和感が気になって後ろを向いたとき、息を呑んだ。
読み違えたか！

「ネプギアっ！」

「はいっ！？」

俺が出した声の大きさにびっくりしたのか、ネプギアも大きな声で反応した。

「封印の方を頼む。俺はあの2人の方の加勢に入らないといけないみたいだ」

俺はそう言つと、来た道を引き返し始めた。

side ラム

コイツ等、こんなに強かったの！？
前回も今回もケイスが簡単に相手してたみたいだったから、今のわたしなら行けるかなって思ったけど。

「全然ダメじゃない！」

そう言つて、アイスストームを唱える。
けど、コイツ等には効いてない。

「ロムちゃん、大丈夫？」

わたしは、ロムちゃんが心配になり声を掛けてみた。

「…まだまだ、大丈夫」

そう答えが返ってきたから安心してた。
けど、ロムちゃんの方を見ると、擦り傷だらけだった。

誰か…助けて！

side ラム END

「くそ、普通に走ってたんじゃない間に合わねえ！」

俺はそう言つて、ラブティースを取り出す。

「ラプティアス、スタンバイ！」

『了解です、マスター』

そして俺はラプティアスを纏う。

そして一気に加速し、ロムちゃんとラムちゃんのいるところまで翔んでいく。

1体のキラマシンがラムちゃんを攻撃しようとしていた。

ラムちゃんは防御体制を取り、少しでもダメージが少なくなるようにしていた。

ラムちゃんに攻撃が当たる直前、ラムちゃんをそこから腕に抱いて救い出すことに成功した。

「…あれ？攻撃がこない？」

ラムちゃんは俺の腕の中で恐る恐る目を開けた。

「ケイス？」

「ああ。ロムちゃんも救い出してくるぞ」

俺はそう言っつて、ロムちゃんも救い出しラムちゃんがいるところまで運んだ。

「さて、本当はここで謝っておきたいんだが」

そう言いながら後ろを向く。

そこには、2人をここまで追い詰めたキラマシンたちがいた。

「俺の大事な妹たちをこんなにしやがって。ただで済むと思うなよ？」

俺は自分のことは棚の上に置き、キラーマシンたちを睨んだ。

『半分以上、マスターの所為のような気がしますけどね』
ラプティアス、そこは黙っててくれ。

俺も心が痛いんだから。

「かといって、ラプティアスはどっちかというと急襲型だからな。さて、どうするか」

俺がそう言っていると、ヴェルヴィエッタが声を掛けてきた。

『ますたー、わたしだったらラプティアスおねーちゃんをサポートできるよ?』

そういえば、コイツそんな事言ってたな。

「キラーマシン達に勝てる可能性は?」

『確実に100%だよ』

ちよつと、乗ってみるか?

「OK、やってみるか」

『りょーかい!』

ヴェルヴィエッタはそう言っていると、まず実体化しビックバイパーとな

る。

『ラプティアスおねーちゃん、今から送るプログラムを実行してね』
『わかりました』

ヴェルヴィエッタが何か送っているらしいが、何も見えない。
…電波だからか。

『実行終了。…なんですか？この武装合体というのは』

『ますたー、いつでも準備完了だよ。きーわーどは武装合体！だよ』

武装合体？

どこぞのロボットみたいだな。

まあいい。いってみるか。

「武装合体！」

俺がそう叫ぶと、ヴェルヴィエッタが3つの部品に分かれた。
1つは武器のハンマーを模した武器に、残りの2つは主翼に。
そして、主翼はラプティアスのスラスター部に組み付き、ハンマー
はラプティアスの手に握られた。

『フォームチェンジ完了、ラプティアス エアドミナンス』

『各部チェック完了。速度上昇、VハンマーはVVスラッシャーへ
変形可能』

……SAVE

第36話 フォームチェンジ（後書き）

ケイス「何ぞこれ」

ゲームには出てこないよ、このフォームチェンジとかは。それでは、ラプティアス エアドミナンスの説明をば。

ラプティアス エアドミナンス

ラプティアスとヴェルヴィエッタが武装合体した姿。

基本的に、元々のラプティアスの翼を大きくしてハンマーを持たせたとおもってもらえれば。

手に持っているハンマーは、形的にはアックスって言った方がいいのかな？

名称はVハンマー。命名は何となく。

で、上のVハンマーに合体の際についた主翼をハンマーの両端につけた武器。

武器種別は、ハンマーから大剣に変わる。

名称はVVスラッシャー。命名はV i c V i p e r S l a s h e rから。

（公式だとVGスラッシャーですけどね）

それでは次回、「ラプティアス エアドミナンス」でまたお会いしましょう。

第37話 ラプティアス エアドミナンス（前書き）

多数のキラーマシンとの戦闘に苦戦するロムとラム。

2人が苦戦するとは思わなかったケイスだったが、2人の救出に成功。

ここから、ケイスたちの反撃が始まる。

第37話 ラプティアス エアドミナンス

「2人とも、そこで休んでてくれ」

俺は背中越しにロムちゃんとラムちゃんにそう声を掛ける。
これが、2人にできる唯一の償いだから。

「ラプティアス、調子はどうだ？」

『駆動系は完全に掌握しました。いつでも行けます』

「ヴェルヴィエッタはどうだ？」

『Vハンマーの制御はわたしに任せてもらっていいよ』

こつちも大丈夫そうだな。
さて。

「ヴェルヴィエッタには悪いが、性能測定をさせてもらっぞ」

そう言いつつ、一番近くのキラーマシンにハンマーで攻撃を仕掛けようとした。

だが、ここで違和感が生じる。

「ハンマーの重さが…感じられない？」

『Angeravity 反重力技術の応用だね。Impact 接触の瞬間だけ重力を発生する設定になっているよ』

… どんだけ高等技術を突っ込んであるんだ、この世界の神姫は。
そんなことを思いつつ、キラーマシンの左側からハンマーをぶち当てる。

グシャツ。

そんな効果音が一番しっくり来る。

キラーマシンにVハンマーを当てた瞬間、キラーマシンが横からプレスされたかのように潰れた。

「おいおい、チート武装でしかないだろ、コレ」

俺はあまりの光景に、そう口に出していた。
だが、神姫たちは…。

『ねね、おねーちゃん。これに技名付けた方が良くないかな?』
『そうですね、スプレندیッド・インパクトとでも名付けましょうか』

今の攻撃に名前をつけていた。
Splendid impact
華麗な衝撃ねえ。

ま、せっかくだから使わせてもらおうか。

「まだまだ、行くぜ。スプレندیッド・インパクト!」

重さを感じないため軽々と振り回し、俺の周りにいたキラーマシンを潰して回る。

いつの間にか、俺の周りのキラーマシンは一掃されていた。

side ラム

ケイス、わたし達が苦戦してたキラーマシンをあんなに簡単に…。それに、すごい怒ってるわね。

じゃなければ、一撃でぺちゃんこになったりしないわよね。

「ありがと、ケース」

わたしは小声でそう呟く。

ロムちゃんにも聞こえないくらい小さい声で。

だけど、私たちに無茶させたって言うのは忘れないからね？
どんな事言って困らせてあげようかな」

s i d e ラム E N D

s i d e ロム

ラムちゃん、わたしに聞こえないように言っただつもりだろうけど、
聞こえちゃった。

これで、『ケースさんルウィーしうちけいかく』の第一段階完了、
だね。

ちょっと予定と変わっちゃったけど。

「計画通り（ニヤリ）」

s i d e ロム E N D

「さて、あとはあっちの中集団だけか」

俺は、そう言っ少し離れたところにいるキラーマシンの集団を見る。

…もしかして、俺に怯えてたりする？
近寄ってこないしな。

そう思いながら、一歩一歩歩を進めてみる。
俺が歩を進める度に、キラーマシンたちは後退する。
だから、距離が縮まらない。

「さて、どうしようかねえ」

後退していくキラーマシン達を見ながら俺は何気なくそう呟く。

『まあ、滅ぼすのも視野に入れないといけません…』
『でも、また出てきたら悪さするよね？』

ちゃんと封印を施して、2度と出てこなければ悪さをするこゝともないしな。

そう思って、ロムちゃんラムちゃんとネプギアの方へ向かうかと思ひ、キラーマシンに背を向けた時だった。

キラーマシンの数体が腕に装填されていたミサイルを発射した…ロムちゃん、ラムちゃんに向けて。

『マスター、キラーマシンがあゝの2人に向けてミサイルを発射しました！』

目で追っていたら間に合わないと思ひ、ロムちゃんラムちゃんに向かって飛翔する。

どうにかミサイルに追いつき、Vハンマーを振るう。

「スプレンドレッド・インパクト！」

爆風を最小限に押さえ込み、ロムちゃんとラムちゃんには何も影響がないようにすることが出来た。

「ケイス…」

「…ケイスさん」

「…怖かったよお（です）」

2人は、俺の足にしがみつき、泣き始めてしまった。

俺はそんな2人を安心させるためしゃがみ、頭を撫でた。

「怖かったよな…」

俺の甘さが招いた結果だった。

一歩間違えば、この2人を失っていたかもしれない。

「ちょっとだけ、もうちょっとだけ待っていてくれ、な」

そう言っつて、俺は二人の頭から手を離す。

「「あ…」」

「あいつらを…ブツ潰す！」

そう言っつて、キラーマシンを睨みつける。

「ヴェルヴィエッタ、剣を頼む」
（two）

『うん…VVスラッシャー形態にフォーム変更』

ヴェルヴィエッタがそう言っつと、ラプティアスのスラスターに付いていた主翼が離れ、Vハンマーに組み付く。

そしてそれは、一振りの剣となった。

ラブティアスの大きさから考えても相当大的な剣、VVスラッシュが俺の手に握られていた。

「行くぞ」

そう呟き、スラスターを全開にしてキラーマシンに突っ込んでいく。キラーマシンに肉薄する直前、剣を水平に右腕の方に構える。そしてすれ違う瞬間。

「せいやあっ」

右からの一閃。

「もう一回！」

返す刀でもう一閃。

その二閃を振るう。

キラーマシン達を通り抜け一息ついたところで。

ドゴオオン。

キラーマシンたちは、爆散した。

side ラム

「ケイス、カッコイイわね」

わたしは自然にその声を出していた。
強くて、優しくて。

これじゃ、ロムちゃんが魅かれちゃうのかもしれないかな。

「…うん」

わたしの横で、その声がする。
ロムちゃんだった。

「ロムちゃん、ケイスのこと好き、よね？」

わたしがそう言うと、ロムちゃんは恥ずかしそうに顔を伏せた。
そして、「うん」とだけ答えた。

「わたしも好き…なのかも」

そういうわたしを、ロムちゃんはいつものように柔らかく微笑んで
見ていた。

何か、恥ずかしい。

side ラム END

ふう、ようやく片付いたか。

そして俺は、ロムちゃんとラムちゃんのところに戻り、武装を解いた。

「怖い思いさせちゃって、ごめんね？」

俺はそう言つて、2人に頭を下げる。
何て言われてもしようがないよな。

「ケース！」

ラムちゃんが怒ったようにその声を張り上げる。

…まあ、当然だよな。

「い、一回で許してあげるから、しゃがみなさい！」

「しゃがむ？」

いつもだったら、腹にイイ拳が入ってきたりするんだが。
何でしゃがむ？

そう思っていると…。

「~~~~っ！早く！！しゃがむの？しゃがまないの？」

そう言つて、急かしてくる。

「わかった、わかったから。しゃがむよ」

そう言つて、俺はラムちゃんの前にしゃがんだ。

「それで、目を閉じるの。いい？目を開けていいって言つまで開け
ちゃダメだからね！」

目を開けたらひどいんだからね、と続けられた。

まあ、元から逆らう気はないから、ここで目を閉じておく。

s i d e ラム

今、目の前ではケイスが目を閉じたまましゃがんでいる。
うう、気にししたらどんどんドキドキしてきた。

そんな時、ロムちゃんに肩をつつかれ、ケイスの右側を指差される。
わ、わかってるわよ。

わたしは声を出しそうになるのを必死に堪え、ケイスの右側に移動する。

そしてロムちゃんとアイコンタクトをとり、タイミングを合わせる。

それじゃいくわよ。

3・2・1…

s i d e ラム E N D

ちゅっ。

左右の頬に柔らかい感触がした。

え？え？

俺は驚き、目を開けてしまう。

「もう。目を開けちゃダメって言ったのに」

俺の両横には、頬を真っ赤に染めた2人の恥ずかしそうな笑顔があった。

そのあと、ハードブレイカーを倒しキラーマシンを再封印したネプギアたちが戻ってきた。

…加勢に行くの、忘れてたな…。

…
… S A V E

第37話 ラプティアス エアドミナンス（後書き）

ネプギア「わたしの扱いがぞんざいすぎです！」

しょうがないだろ？

今回はルウイーの姉妹がヒロインの回なんだから。

ネプギア「ううー、そんなことを言われても…」

さて。

次回は、ルウイーの事件も解決したし、いよいよリンボックスへ向かうためにラストイション入りします。

ネプギア「下っ端さんの妨害に遭うんですね、わかります」

…それはどうかな？

ネプギア「え？それってどういう…」

それでは次回、「変わり始めた歴史」でまたお会いしましょう。

番外 聖夜（前書き）

これは、もしかしたら未来に起こるかもしれない物語。

番外 聖夜

……Quick Load

「うーん、やっぱり寒いねえ」

俺はひとりごちりながら、はぁと手に息を吹きかける。

ここは、ルウイーのとある街角。

ここで、俺ことケイスはある人物を待っているのだった。
って、何か説明臭いな。(笑)

「ケイスー！」

そう声のした方を振り向く。

そこには、今まで俺が待っていた人、ノワちゃんが手を振りながら
走ってきていた。

「ごめんね、待った？」

「いや、全然」

まあ、浮かれていたから1時間以上待っていたとは言っまい。
流石に恥ずかしすぎる。

「それじゃ、行こっか」

そう言つて、ノワちゃんが俺の手を引いて行こうとしたんだが。

「あれ、手が冷たくない？」

そう言い、両手で暖めるかのように俺の右手を覆う。

「まあ、寒いからねえ」

「それにしても冷たすぎるわよ。一体何時間待ってたのよ」

俺は言い訳するも、簡単に看破されて…。

「う…1時間近く」

俺は渋々真実を口にする。

「…まったく」

ノワちゃんは、しょうがないなあとも言いたげな顔で笑う。

そして、俺の右手に添えていた手を離し、俺の頭をコツンと打つ。

「あいたっ」

「だから、喫茶店とかで待ち合わせよう、って言ったじゃない」

そう言いながら、彼女が持っているポーチに手を入れ、何かを取り出す。

「はい、これをつけておけば寒くないでしょ？」

そう言つて、黒い手袋を差し出してきた。

ポーチにいつも入れているのか？流石女の子。

「まったく。買ったばかりで一回も使っていないのよ？感謝してよね」

買った…ばかり？

どう見ても手編みですが…。

俺はその言葉を飲み込み、受け取った手袋を装着する。

「うん、あったかいな。ありがと、ノワちゃん」

そう言って、左手で彼女の右手をとる。

そして、二人で街を歩いていく。

side ネプギア

うー、ノワールさんめえ。

ケイスさんと手をつないで歩くなんて、羨まし過ぎるう。

「ネプギア、早く行くわよっ」

ラムちゃんは私にそう声をかけ、路地から出ようとしていた。

「…ラムちゃん、これをもって行つて？」

ロムちゃんがそう言ってラムちゃんに渡したものの…。

それは、白く塗った段ボール箱だった。

「これなら、みつからないから」

ロムちゃん、その自信はどこから…？

side ネプギア END

うん、今日もルウィーの街は平和だ。
平和なのはいいことだね。

そう言いながら、以前の出来事を思い返していた。
第2次マジエコンヌ大戦と呼ばれることになった戦い。
もう、あの戦いは終わったんだから、平和なのは当たり前。

「さて、あとはターキーくらいか？」

ミナさんとグリさんからの頼まれ物。
まあ、所謂クリスマス会の準備だ。

「まったく。何で私が…（ブツブツ）」

「ごめんね、ノワちゃん。初めから買い物だって行っておけばよかったね」

そう言ってノワちゃんに謝る。
確かに、デートの誘い方みたいだったからなあ。

「う、ううん。期待してたのは確かだけど…」

ノワちゃんは、顔を紅く染めながらそう言った。
まあ、こっちも半分はその気だったけど。
っていうか、さっきから何か視線を感じるんだよなあ。

side ネプギア

「離れすぎて、何の話をしてるのか分からないよお」

「…だから、これで身を隠せば…」

ロムちゃんが例の段ボール箱を出す。

「『それは無理！！！』」

そこにいる全員でそれを否定する。

「でも、師匠とお姉ちゃん、いいカンジじゃない？」

ユニちゃんにとっては、ノワールさんはお姉さんだし、ケイスさんもお師匠様だし。

両方とも尊敬の対象なんだよね。

「うーん、ネプ子さん的にはヨメを取られたカンジなんだよねえ」

お姉ちゃん、ヨメって。

この小説じゃ、そんなこと何も書いてないじゃない。

「ここは私が正義のために…」

「『ヤメテ！』」

私たち、何をしてるんだろう。

side ネプギア END

頼まれたものを全部買って、俺とノワちゃんはルウィーの教会へ来ていた。

「ケイスさん、すいません。買い物なんか頼んでしまいまして」

「ノワールさんと二人で過ごす予定だったのに、本当にゴメンね？」

グリさん、そこでさらっとバラさないでください。

「それなので、一室用意させて頂きました。そちらでお寛ぎください」

そう言つて、ミナさんにある部屋に案内された。

そこは、整理の行き届いた、本当に綺麗な部屋だった。

「ぎ、逆に落ち着かないね、こういう部屋は」

「そ、そうね」

大きな暖炉、それに大きなテレビのある部屋。

その部屋の中で、座ることが出来るのは、ベッドとソファのみ。

そんなところに、女の子と二人きり…。

「す、座ろつか」

「え、ええ」

俺もノワちゃんもぎこちなく会話を交わし、ソファに座る。

…右端と左端に。

もちろん、手を伸ばせば届く距離なんだが、その距離が遠く感じる。

「け、ケース？」

ノワちゃんがそう、俺に話しかけてくる。

「な、何？」

「今まで、色んなことがあったよね。私は助けられてばかりだけ
ど」

「そんなことない。俺も、助けられてる」

「ねえ、これからも私のこと、助けてくれる？」

「ああ、もちろん」

「…よかった。ねえ、ケース。キス、して？ケースがその約束を違
えないように」

ノワちゃんは、そう言ってこちらに顔を向け目を閉じる。

「ノワちゃん…」

俺はそう言っ、ノワちゃんの肩を抱き、顔を近づけていった。
あと少しでノワちゃんの体温を感じられると思ったとき。

ドアがバンツと開けられ、そこからネプギア達が顔を出す。

「ちょっと待ったーっ！」

それにびつくりし、ノワちゃんも目を開けてドアの方を見る。

「あーんーたーらあー」

ノワちゃんのそんな低い声に皆が驚き、ただただノワちゃんを見つめる。

「よくも…よくも邪魔してくれたわねっ！」

そう言いながらハイパーモード女神化するノワちゃん。
と、とにかく止めよう。

「ノワちゃん、止まってくれ！」

「ケイス！アンタも皆に味方するの！？」

そう言つて、駄々っ子のように暴れ始めるノワちゃん。

ええい、ままよ。

そう思い、ノワちゃんの正面に行き、ノワちゃんにキスをする。

「「「あああああっ！？」」」」

ネプギアたちがそんな声を上げるが、気にしない。

その間にノワちゃんの女神化は解け、擬人化状態に戻る。

時間は経過し、クリスマスパーティー会場。

部屋を中心のテーブルにはターキーやらケーキやら、色々な食べ物が所狭しと並べられていた。

部屋には4国の女神と候補生、教祖といつもの協力者達。

さすがにファルコムとがすとは放浪中ということで捕まえられなかったらしい。

「みんな、飲み物は行き渡ったかな？」

「……はい」「」

未成年はジュース、大人はシャンパンの注がれたグラスを持つ。

「それじゃ、乾杯の音頭はケイスさん、よろしくー」

「はいよ」

俺はそう言って、一歩前に出る。

「それじゃ、みんな。いっせーのーでっ！」

「……メリー・クリスマス」「」

キインと、グラスを軽くぶつける音がこだまする。
その部屋には、笑顔が溢れていた。

……Quick Save

番外 聖夜（後書き）

ということで、クリスマススペシャルでした。

まあ、ゲームギョウ界が平和になった後の一幕というところか。

ケイス「戦いが終わった後か。本当にこんな話になるのか？」

いや、マジで読めん。

本当にこんな未来が来るかも分からないしな。

もしかしたら、ノワールの配役のところにネプギアが来るかもしれないし、ロムちゃんやラムちゃん、はたまたファルコムって可能性もあるわけだ。

ケイス「まあ、今のまま進めば、こんな結末ってところなのか」

ということで、1日遅れではありますが、こんな物語を書いてみました。

第38話 変わり始めた歴史（前書き）

キラーマシンの封印を終え、ルウィーに戻ったネプギアたち一行。
そこで、思いがけないことが起こる。
果たして、何が起こったのだろうか。

第38話 変わり始めた歴史

世界中の迷宮でキラーマシンを封印した俺たちは、ルウィーへと戻っていた。

俺はというと、帰り道からずっとロムちゃんとラムちゃんがべったりとくっついていて、何も出来ない状態だったりする。

「うう〜」

果ては、後ろからネプギアのうなり声が聞こえてくる始末。

俺、何かやったか？

まあ、そんなこんなでルウィーの教会に到着し、事の顛末を報告していた。

「それでは、もう危機は去ったと言っことですか…」

「そうですね。けど、また誰かが封印を破壊しないと限りませんから、用心に越したことはないと思います」

ミナさんの問いに俺はそう答える。

今現在、マジエコノヌの危機が去ったわけではないのだから。

「でしたら、今まで通り私が警戒をしておきますよ」

グリさんは私に任せてくださいと、そう言った。

四六時中見守るわけではないだろうけど、無理をしないでください
ね？

俺は、そう思いながら「お願いします」と言い、右手を出す。

「お願いされましたっ！」

グリさんはそう答え、俺の右手を取り握手をする。
グリさん、本当によろしくお願いします。

「さて、これからどうしようかしらね」

アイエフさんがそうネプギアに言う。

そのとき、ネプギアのNPGがけたたましく鳴り出した。
ネプギアはNPGの通話ボタンを押し、それを耳にあて会話を始めた

side ネプギア

「はい、ネプギアです」

私は通話ボタンを押した後、そう言って電話に出た。

『ネプギアさん、イストワールです』

電話の主はいーすんさんだった。
あれ、でもどうしたんだろ？

『ネプギアさん、今会話しても大丈夫ですか？』

「はい、大丈夫ですよ」

私はそう答え、いーすんさんの言葉を待つ。

『ネプギアさん、ルウィーにキラーマシンが現れたと聞きましたが……』

「あ、それはもう解決しました。心強い味方がついたので」

私はそう言ってケイスさんとがすとさんを見る。

この二人がいなかったら、まだ解決してないだろうなあ。

『そうですか、それは重畳でした』

そう言つて、いーすんさんはいったん言葉を切った。

『それでしたら、リーンボックスへ向かっていただけますか？』

「リーンボックス……ですか？」

リーンボックス……ラストেশションとは別の意味で、機械技術が発展した国。

……思わずよだれが出そうになるのを必死で押さえ込む。

『ええ、教祖のチカさんがネプギアさんに早急に会いたいと通信してきたので』

「チカさんが、ですか」

どうしたんだろう、私に会いたいなんて。

「わかりました。すぐにリーンボックスに向かいます」

『よろしくお願いします』

いーすんさんはそう言った後、通話を切ったようだった。

side ネプギア END

「ということで、リーンボックスに向かいます」

「アンタね…」

アイエフさんがそう言いながらジト目でネプギアを睨む。

「そういうことは…すぐに相談しなさいって…いつも言ってるですよ！」

「にゃあああつ、ごめんなさあああいつ！」

アイエフさんはそう言いながらネプギアのコメカミをグリグリする。
まあ、実際そんなに力を入れてないんだろうが。

「もう、次からはちゃんと相談しなさいよね？」

「はい」

アイエフさんは全くもうと言いながらしょうがないなあと言つような顔をする。

で、俺の方を見たときに、ちょうど目が合ってしまった。

「…何見てんのよ」

アイエフさんは顔を少し赤らめながらそう言った。
この人も、こういう年非相応な表情をすると、かわいいんだよなあ
と失礼とは思いつつ思ってしまった。

「ねえ、ネプギア。前に一緒に行こうって誘われた件だけど」

旅支度を始めているネプギアに、ラムちゃんがそう話しかけていた。

「あ…、うんうん。考えてくれたの？」

「ええ、ロムちゃんと話し合って、ついて行こうって決めたわ」

「…よろしくね、ネプギアちゃん」

「ホント！？うれしいなあ」

そう言ってネプギアは喜んでいた。

「ミナさん、グリさん。あれ、いいんですか？」

俺はミナさんとグリさんの所まで行ってそう話しかけた。

「私には引き止めるのは不可能です」

「ロムちゃんが遅しく育ってくれて、嬉しいやら困るやらですね」

二人は遠い目をしながらそう答えた。

「引き止めないんですか？」

「死にたくないですから…」

二人はそう言うため息をついていた。

「それでは、これで失礼します」

ネプギアはそう言うと、ぺこりとお辞儀をする。

「ロム様とラム様をよろしく申し上げます」

ミナさんもそう言って頭を下げていた。
当のロムちゃんとラムちゃんと言えば…。

「旅なんて初めてよね、ロムちゃん！」

「うん…はじめて」

そんな会話をしながら、終始ニコニコしている。
でも、ロムちゃんとラムちゃんがパーティー加入するのって、当分先じゃなかったか？

「それじゃ皆さん、行きましょう！」

ネプギアがそう言うと、全員で歩き始めた。
大所帯になってるなあ。

ネプギア、アイエフさん、コンパさん、日本一、俺、ロムちゃん、
ラムちゃん、…

「わたしを置いていくなー、ですよっ！」

それにがすと。

この8人でリーンボックスへの渡航船が出ているラステーションを目指した。

ルウィーから出発して数日、俺たちは目的地に着いていた。だが、着いた早々であるが、何だか街の中心部から人々が逃げ出していた。

「何があつたんだ!？」

たしか、ここでは何もイベントは起こらなかったはず。

…って、やめやめ。

もう、原作知識には頼らないって決めたばかりじゃないか。

「皆さん、行ってみましょう!」

ネプギアのその声に従い、俺たちは町の中心を目指した。そこで見たものは…。

「おおー、まだ幼女の匂いがする。貴様ら、幼女を隠すとは…許せん!」

そう言いながら、黄色の大きなぬいぐるみが喋っていた。

あれは、トリック・ザ・ハード!?

そんな時、銃声が聞こえた。

「全く、私たちの国で暴れるなんて」

そう声が聞こえてきた。

「ほう、ワガハイの姿を見ても恐れないとは。貴様、何者だ？」

「私は、ユニ。この国の女神候補生よ」

ユニはそう言うが早いか、再び銃を撃つ。

だが、トリック・ザ・ハードには効いていない。

「そんな豆鉄砲が通用するとも思ってたか」

トリック・ザ・ハードはそう言うと言撃のために力をため始めた。

「ネプギアっ」

「任せてください！変身っ」

ネプギアは俺の言葉に応え、変身を完了させた。

「行きます！ランチャーモード！」

ネプギアがそう言うのと、剣がランチャーに変形する。

そしてランチャーのチャージを開始した。

だが、一足遅くトリック・ザ・ハードの方が先に動いた。

「これでも食らえ！」

トリック・ザ・ハードから魔力の奔流が放たれる。

ユニはその場から動けず、それをまともに食らってしまった。だが。

「変身！」

その奔流の中から声が響きその直後魔力が霧散され、そのあとには女神化したユニが立っていた。

「イタタタ、さすがに危なかったわね」

そうこうしているうちにネプギアのランチャーのチャージが終了した。

「チャージ完了、ファイヤー！」

そして、ネプギアはトリガーを引く。

今度はネプギアからトリック・ザ・ハードに光の奔流が放たれた。

「ぬおおああっ！」

「ユニちゃん、こっちに！」

「…分かったわよ、ネプギア」

そして、ユニは俺たちのほうにやってきた。

…… SAVE

第38話 変わり始めた歴史（後書き）

と言うことで、未だに出番のなかったトリック・ザ・ハードの出番でした。

他のザ・ハードはすでに出演してるからね。

ケイス「それと、ユニの出番か」

ユニは、元々の設定だとまだ出番じゃなかったんだけどね。

先にネプギアが戦っていて、ピンチのときに出てくるって設定だったんだけど。

今のケイスは、ピンチに陥らないなあ、と。

ケイス「それは…贅沢な悩みだな」

それでは次回、「師匠と弟子」でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621w/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

2011年12月29日20時54分発行